act 2　夜半の月、砂上の旅

望月満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｃｔ　２　夜半の月、砂上の旅

【Ｎコード】
Ｎ６４８８Ｐ

【作者名】
望月満

【あらすじ】
「砂漠の薔薇（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４０３７ｉ／）」の続編。　砂漠を旅する青年・海棠。目的地へ辿りついた彼を待ちうけていたのは、絶望的な光景だった。これは、一人きりで立ちつくす彼の追憶の物語。そして、彼と砂漠の薔薇に、新たな影が迫る。砂漠の薔薇を巡る物語・第二弾。

scene 1

――雨粒が、頬に落ちてきた。
不幸になる予感がした――

＊　＊　＊

砂塵が、空高く舞った。
満月の光は、明るく黄土色の土地を照らす。微かに起きる風は水気のない砂を易々と舞い上げる。広大な夜の砂漠は神秘的で美しく、昼間とは比べ物にならないほど寒い。
「今日中には到着すると思っていたんだが……。某（それがし）の見当違いだったか」
蜜色の満月が浮かぶ夜。地平線が望めるほど途方もなく広い砂漠の中で、柔らかな響きを含んだ涼やかな男の声が響いた。砂漠にブーツの底で点々とへこみをつけながら、男は全く疲れを見せずに歩く。
年齢は二十（はたち）歳ほど。この夜闇に負けぬほど黒い長髪と、同色の瞳を持つ。長い髪は、うなじで一つに束ねられている。青年は地面につきそうなほど長い、ローブのような薄い生地のフード付きコートをはおり、その下に黒いシャツを着、ゆったりとしたズボンとショートブーツをはいていた。砂よけのためか、鼻から口のあたりは布で覆われている。背には大きめのリュックが背負われていた。目鼻立ちは整っているが、美形というよりは中性的な顔立ちだ。
「今日はこのあたりにするか。あとは明日だ」
青年は前方に見えてきた大きな岩を確認し、小さく頷いた。岩にはそれほど厚みがなく、砂漠の砂よりもやや濃い黄土色をしている。

「よし」
青年は岩の陰に腰を落ち着け、肩から背負っていたリュックを下ろすと岩に沿わすようにして自分の隣に置いた。リュックを置かれた砂は、僅かにへこむ。
青年は下ろしたばかりのリュックの中に両手を入れると、おもむろに何かを探りだした。
しばらくリュックの中をかき回していた青年は「あ。あった」と声を上げ、リュックの中から両手を引き抜いた。リュックの中から青年は両手を抜き、右手の方には紙に包まれた長細い固形の携帯食料が握られていた。
「さて。火を焚かなくてはな」
青年は無造作に携帯食料の包みを破ると、そのままさして美味しくもなさそうに食べ始めた。味わわず、ただ咀嚼(そしゃく)し嚥下(えんか)する。まさにそれは、空腹の胃にモノを詰め込んでいるという表現がぴったりな食べ方であった。
青年は右手に持っていた携帯食料を左手に持ち替えると、それを食べながら右手の人差し指で砂に何やら奇怪なものを描き始めた。コンパスで描いたかのように綺麗な二重の円の中に、正位置の三角と逆位置のの三角をそれぞれ一つずつ重ねて描き、六角形の星を描き上げる。さらに二つの円の間にできた空間に、ルーン文字のようなものを細かく描き込んだ。最後に、六角形の星の中心に小さなトカゲのようなものを描く。青年はトカゲを頭、身体、尻尾の順に描いていく。
その指が尻尾を描き終え、尻尾を描く動作に続けて少しずつ砂から指を離しつつ今度は宙に何かを描き始めた。宙に何かを描く指は、蛇のようにうねっている。そのためその動きは何かを描いているというより、宙で人差し指を奇妙にくねらせているように見える。
一体何をしているのだ、と訝しく思うような青年の行動。しかし宙を動く指の残像を残すようにして、赤い筋が浮かびあがってきたのだ。赤い筋は指の動きを追うようにしてうねり、それは下の方か

らだんだんと太さを増していく。筋は揺らめきながらみるみるうちに大きさを増し、やがてそれは砂の上で煌々と燃える炎へと変わった。

炎が上がると同時に、青年は見計らったかのように携帯食料を食べ終えた。

「ひとまず、暖は確保できたな」

青年は伸ばしていた右手を自分の方に引き寄せると軽く両手をはらい、顔を綻ばせた。その表情は赤々と燃える炎に照らされて、照れているかのように赤く染まっていた。火は燃えるような木も紙も草も一切ない、さらさらの砂の上で燃え続ける。

青年が使ったのは、魔術である。簡単な魔方陣を使った、四精霊の魔術。青年の術を見る限り、どうやらこの青年は四精霊使いであるようだった。

scene 2

「さてと。とりあえず地図を確認してみるるか」
青年はリュックについている小さなポケットを探り、何重にも折りたたまれ、あちこちが破れてボロボロになっている地図と重量感のある立派な方位磁針を中から取り出した。青年は地図を丁寧に砂の上へ広げ、その上へ重石をするかのように方位磁針を置いた。
青年の広げた地図の大半は砂色が占めており、地図を縁取るようにして申し訳程度に緑が塗られていた。
「えっと……。昨日この街を出て、一昨日がこのあたりだったかな……」
青年は広大な砂色の地図に人差し指を置き、方位磁針と照らし合わせながら自分が通ってきたルートをたどる。
「……で。今日は……。やはり、おかしいな」
青年の人差し指がさすのは？東の街（イーストシティ）？と書かれた、砂漠の中の大きな街。街のそばには、小さく？オアシス？という文字が表記されていた。
青年は地図から顔を上げ双眸を細めると、遠くに見える小さな緑の塊を望んだ。
「オアシスも見える。この位置にイーストシティがあるはずなのだが……。何故だ？」
青年は指で、イーストシティと書かれた部分を一定のリズムを刻みながら叩く。左手の指に顎を乗せ、しばらく考え込む。
沈黙だけが流れる、荒涼とした砂漠。風は凪ぎ、煌々と燃える火に照らされた青年を蜜色の満月だけが見下ろす。
「間違えたのは、距離か方向か……。しかし、このオアシス以外のオアシスはもっと先に行かなければないはずだ……」
青年は眉をひそめ、難しそうに顔を歪める。が、
「――ま。いいか。こうして考えていても時間の無駄だ。朝になれ

ば方向を確認してみよう。よし」
青年はあっさりと地図から方位磁針を上げ、リュックのポケットに収めた。それから地図を丁寧に折りたたみ、方位磁針を入れたものと同じポケットにしまう。
続いて青年は違うポケットの中から、手の平よりやや大きめの本を取り出した。本は古ぼけており、装丁は緑一色だけでそれ以外にはない。
青年は黙って本のページをめくる。紙の擦れる小さな音が、滑らかに流れるように響く。
「確か、このあたりまで読んでいたかな……」
青年は薄い岩に背をあずけると、魔方陣が描かれ、ルーン文字のような奇怪な文字が羅列している本を読み耽(ふけ)だした。
本に視線を落とす青年の姿を、優しい光で月と炎が照らす。穏やかな風は小さな粒子を舞わせ、炎を神秘的に揺らしていた。

朝日がゆっくりと登り、砂丘をその光で縁取る。
朝の爽やかな光は砂に覆われた地を照らす。
「っ……。うぅ」
岩に背をあずけたまま毛布にくるまって眠っていた青年は、掠れたような呻き声を上げながら身を起こした。その闇色の目をうっすらと開け、太陽を確認する。瞳は黄金に輝く太陽をその瞳に移し、間もなく瞳を閉ざした。そのまま青年は深呼吸をするように、大きく息を吸い込んだ。
「うぐぅぅっ……」
そのまま身体を伸ばし、腕も頭上へと伸ばす。その体勢のまま大きく息を吐くと、腹筋に力を込めて上半身を起こした。
「よっと」
青年はそのまま立ち上がり、毛布を砂の上へと落とした。
「今日も一日、頑張って歩かねばな」
青年は双眸を細めて、眩しく輝く太陽を一瞥する。そして落ちた

毛布をかがんで拾い上げ、砂を軽く払い落す。
「さて。ここは一体どこなん――」
青年は慣れた手つきで毛布をたたみながら周りを見まわし、そして、
バサッ
毛布をその手から、落とした。青年の手は瞬時に固まり、目は大きく見開かれる。
「まさか……。嘘だろ……。何だ。某(それがし)は、間違ってなどいなかった……」
青年は小さく口を動かし、眼前に広がる景色を食い入るように見つめた。
青年が見つめるのは、奇怪な岩が広がる景色。よく見ると、岩はどれも青年が凭(もた)れていたもののように薄い。
――青年は、着いていたのだ。イーストシティに。しかし、その街は完全に形を変えていた。
「……某が、もう少し速く着いていたならば……。くっ。悔やんでももう無駄か……」
青年の前に今広がっているのは、殺風景な瓦礫の街であった。
「……」
青年は漆黒の瞳を閉ざすと、緩慢とも思える動きで口を開いた。
「まだ、旅は長引きそうだ。某は、なかなか帰れぬようだ。――すまない。彩乃、ユーフェミア……」
十年も昔の記憶が、滅びた砂漠の街を見つめる青年の頭の中で鮮やかに思い浮かぶ。

scene 3

＊　＊　＊

瑞穂の国にある、とある小さな田舎。
「よいしょっ。よいしょっ。よいしょっ」
そこに小さなかけ声とともに畑を耕す、十歳になるかならないかというほど幼い少年がいた。
少年は男にしては長い黒髪と、同色の瞳を持っていた。作業着なのか、土で汚れた綿の服を纏っている。少年――青年の面影がある少年は、やはり中性的な顔立ちをしていた。
自分の身長ほどもあろうかというほどの鍬(くわ)を目線の高さまで振り上げ、鈍い音を立てながら土に突き立てる。少年は息も荒く汗を流しながら、その動作を繰り返していた。そんな少年を、まとわりつくような生温かい春風が包み込む。
鈍い音と小さなかけ声が、一定の間隔を保ったまま響く。華やぐ瑞穂の国の中心都市の喧騒とはかけ離れた、だだっ広い田畑が広がる静かな田舎。舗装もされていない土の道や畦道(あぜみち)がのび、畑のそばには点々と藁ぶき屋根の家が見える。
「よっと。よっこいしょっ」
少年は鍬を一振りするたびに汗を散らしながら、畑の土を掘り起こしていく。茶色の土を鍬で抉ると、黒っぽい土が独特の湿った臭いを放ちながら姿を現す。
少年が同じ動作を繰り返す、その時だった。
「よいっ――？」
少年の足に、何かか軽くぶつかってきた。眉をひそめ、動きを止めた少年は土に鍬を突き立てたまま、足元を見る。と、
「あ」

そこには、小さな手毬(てまり)が落ちていた。
赤や橙や金の糸できらびやかに作られた、小さな手毬。それが少し畑の土で汚れて、少年の足元に転がっていた。
「何故、こんなものが……？」
少年は黒い髪を軽く揺らしながら首を傾げる。そのまま鍬から手を離し、腰をかがめると鍬から離した手で手毬を拾い上げた。自分の右手の中にすっぽりと収まっている手毬を、怪訝そうに黒い双眸で見つめる。少年は手毬を左手に持ち替えると、右手でそれについている畑の土を軽く払い落した。
「何故なのだろう？」
少年はどうして手毬がこんなところに？　と言わんばかりにしげしげとそれを見つめる。その時、
「兄者(あにじゃ)！　兄者！　それは一体何だい？」
あどけなく可愛らしい、少女の高い声が朗々と畑に響いた。
「彩乃！」
少年はその声に驚いて、視線を手毬から上げる。先ほどの声の主は、雑草が茂る畦道を小さく腕を振りながら走っていた。
「走ってはいけないと何度も言っているだろ。ちゃんと家で寝ていろ」
自分のそばまで駆けて来た小さな黒髪黒眼の少女を、少年は呆れたようにも叱責するようにも見える顔つきで見つめる。
はぁはぁと息を切らして、少女は膝に手をつける。
「兄者を見ていたら、何かを拾い上げていたみたいだったからさ。気になったんだよ」
息を切らせながらも、ニッと少女――彩乃は兄に笑いかける。
「だからと言って、走ってはだめだ。体調が悪くなったらどうする」
「大丈夫さ。最近は立ち眩みの回数も減ってきてるし、気分もいいんだよ」
彩乃はニコニコとしながら嬉しそうに話す。少年はそんな妹を複雑な表情で見つめながら、鼻で小さなため息をついた。

「ところで兄者。それは何だい？　ずいぶん立派なものじゃないか」
彩乃は兄の持つ手毬を指でさし、小さく首をかしげた。
「あぁ。実は某にもよく分からないのだ。何故か、足元に転がってきた」
少年は畑の数メートル先に伸びる道に視線を移し、そこを見渡し始めた。右から左へとじっと目を動かし、
「あ」
その動きを、道のやや左寄りの場所でぴたりと止めた。
「うん？　兄者。どうしたんだい」
彩乃は兄の視線を追って、自分もそちらを見つめる。
「多分だが、これはあの子のものではないか？」
二人が見つめる先。そこには、一本の桜の木が立っていた。薄紅の花弁をつけた桜は、丁度満開であった。風は凪いでいるため、花弁は流れないが一枚二枚と僅かに花弁をその足元へ落としていた。
そんな美麗な桜が咲き誇る木の後ろ側。そこに、一人の少女が立っていた。
「そこの人！」
少年は木に隠れるようにして立っている少女に、声をかけた。びくっ少女の身体は震え、少年の声に反応する。
「……」
少女は控えめに木の陰からその姿を覗かせた。そして、
「っ……」「ほぅ……」
少年はその姿に息をのみ、彩乃は見惚れるようにしてため息の様な吐息をついた。
木から姿を覗かせた少女は、とても美しかった。夜空にかかる月を思わせるような蜜色の髪と瞳、おずおずと木の後ろから少年と彩乃を窺うその顔は、照れているのか朱に染まっていた。

scene 4

ふわりと風になびく艶やかな金髪。上目遣いに少年を見つめる金の瞳。繊細さを感じさせる、線の細いすらりとした体つき。橙色の地に白い蝶の舞う模様が入った着物を紅色の帯で結び、金髪の頭の上で真っ赤なリボンを結ぶ。

優雅とも言える桜の下に立つ少女は、神々しいまでに美しかった。

少年はその美しさにか、呆気にとられたようにポカンと口を開き、彩乃は目を瞠ってその姿を見つめていた。やがて少年が彩乃より早く我に返り、手毬を持った左手を真っすぐに天へと高く掲げた。

「そこの者。これは、おぬしのものか？」

少年の問いに、桜の木の下の少女は何度も大きく頷いた。

「やはりか」

少年はほっとしたように安堵の表情を見せ、畑に刺したまま鍬を放置し少女の元へと歩みだす。

「あ、兄者」

彩乃ははっとし、歩みだした兄の背を追う。

「彩乃は来ることはないのだぞ」

少年は一旦足を止め、肩越しに自分に付いてくる妹を振り返った。

「いいんだよ。あの子のことが、気になるんだ」

少年は自分の隣に並んだ妹を、心配げな眼差しで見つめる。

「無理はするなよ。気分が少しでも悪くなれば、某に言うのだぞ」

「分かってるよ。全く。兄者は心配のしすぎだよ」

彩乃は兄に片手の平を突き付けて、その発言を阻止した。そのまま一人、歩き出す。

「……」

少年は腑に落ちないような顔をしながらも、彩乃について再度少女へ歩みを進める。

「よっ、と」

道路より僅かに畑の方が低いため、道路と畑の境界線は段差になっている。その段差を、身体の小さな彩乃はゆっくりと登る。すぐに彩乃へ追いついた少年は、その彩乃より大きい身体で難なく段差を登った。

段差を登りきった二人は、桜の木の裏に隠れるようにして佇む少女の元へゆっくりと近づいた。

「どうぞ。畑の土で汚れてしまったが、許してくれ」

「いっ、いえ。あ、ありがとう……ございます」

少女は、とても澄んで綺麗なソプラノ声でおずおずと礼を言った。その美しい声音は、朝の訪れとともに鳴く小鳥のさえずりの様である。

少女は今にも茶色い幹と一体化してしまいそうなほど、ぴったりと木に寄り添う。手毬を少年から受け取るために恐る恐るのばされたその手は細く、発光しているかのように白い。畑仕事で豆だらけになり、土で黒く汚れた少年の手とは全く違う。

少年は少女の白く滑らかな手の平に、しばらく見とれていた。が、はっと我に返り、その綺麗な手の平の上にそっと手毬を乗せた。

「……その。おぬしは、異国人なのか」

少年は手毬を乗せながら、少女に問う。少女は遠慮がちに小さく頷き、そして、躊躇うように首を振った。

「？」

少年は少女のおかしな返答に首をかしげる。その少年の後ろに隠れるようにして立っていた彩乃が、少年の胴体の向こうからちらりと顔を出し、

「もしかして？はーふ？？」

小さく首を傾けた。桜の幹にべったりと張り付くように寄り添っている少女は、首がもげてしまうのではと心配になるほど力強く縦にこくこくと頷いた。その頬は恥ずかしさのためか、ずっと朱を帯びたままだったがさらにその頬に赤みが増した。

「私、月倉ユーフェミアと申します。……母が、アシュリー人なの

です」
「ほぅ。ハーフなのか」
「はーふ。美人だねぇ」
少年はユーフェミアと名乗った少女を、珍しそうに見つめる。彩乃の方は、ニコニコと笑顔全開でユーフェミアを見る。ユーフェミアは二人に見つめられ、恥ずかしそうに俯く。
「申し遅れた。某は。入江海棠と申す。こちらは、妹の彩乃だ」
少年、海棠は名を名乗り、妹を紹介した。ユーフェミアは丁寧に二人に頭を下げる。
「ところで話は変わるけど。？ゆうちゃん？は今、何歳なんだい」
彩乃は興味深げにユーフェミアを見つめる。唐突に？ゆうちゃん？と呼ばれたユーフェミアは、ぎょっとした顔になる。
「こらッ。彩乃、失礼だろ」
「だって……。？ゆーふぇみあ？って長くて言い難いんだよ。ゆうちゃんでいいじゃないか。兄者」
「だからといってだな……」
海棠は呆れたように、彩乃を見つめる。彩乃はすねた様に口を尖らせ、海棠をじっと見上げる。
「……構いませんよ、その呼び方で。私はただ、とても驚いて、いるのです」
ユーフェミアの返答に「しっ、しかし……」り海棠が口ごもり、「ほらね」と言わんばかりの顔をして彩乃は胸を張って海棠を見上げた。
「それに、ゆうちゃんって可愛らしくて響きがいいので、私は好きですよ。ちなみに、私は九歳です」
ユーフェミアはそこで初めて、二人に笑いかけた。それは恥ずかしそうな、はにかんだ微笑みではあったが、とても可愛い笑みだった。
「あたしゃ今は七つだけど、次の夏が来たら八つになるんだ。兄者は十だよ」

彩乃はそう言って笑い、そして、その笑みを一瞬で苦しみに歪めた。細い身体が、腰からくの字に曲げられる。明るい笑みを浮かべていた顔には苦しみだけが影を落とし、その口からは激しく苦しげな咳だけがこぼれる。

「彩乃ッ！」

海棠は彩乃の咳に敏感に反応し、その小さな背中を手でそっと擦る。

「ほら。家の中にいろと言っただろう。身体が弱いんだから、無理に身体を動かそうとするな」

「うん。ゴホッゴホッ。じゃあ、またね。ゆうちゃん」

彩乃は血の気の引いた顔に笑みを浮かべ、先ほどまで海棠が耕していた畑のそばにある家へと続く畦道を歩み始めた。

scene 5

「あの……。彩乃さんは、どこかお身体の具合がよろしくないのですか」

ユーフェミアは畦道を歩む彩乃の背を目で追いながら、恐る恐る問うた。その問いに、海棠は「あぁ」と短く肯定する。

「実は……。おぬしが知っておるかどうかは分からぬが、彩乃は？呪われし瞳の子？なのだ」

「なっ……。呪われし、瞳の子……。それでは、あの……」

「あぁ。未だに、その病気の詳しい原因も治療法も見つかっていない。だから……どうしようもない、病気だ。一年と数か月前、彩乃は突然発病してしまった」

「そう、だったのですか……。申し訳ありません。余計なことをお聞きしてしまって……」

ユーフェミアは大変反省しているという風に顔を歪め、小さく俯く。少女の憂い顔を見、慌てて海棠は首を振る。

「いいんだ。おぬしがそのように落ち込まずとも。彩乃の病気は、某が必ず治すのだと決めたのだ」

「……海棠さんは、お医者様を目指してらっしゃるのですか？」

「え。あ、いや。そうではない」

少し戸惑ったような、海棠の曖昧な返答。ユーフェミアはきょとんと小首を傾げ、口を開く。

「では、どうなさるおつもりなのですか。病を治すのは、お医者様の役目では？」

「あ、あぁ。そうだが、某の場合は――」

ぎこちなく紡がれる海棠の言葉に、

「海棠。仕事サボって、なぁに可愛い娘口説いてるんだ」

男性の声が重なった。柔らかく心地よいその声質は、包容力がありとても魅力的であった。

「あっ」
そんな声に反応して、海棠は素早く右を向いた。そんな海棠につられるようにして、ユーフェミアも海棠と同じ方向を見る。二人の視線の先。そこにいたのは、
「全く。最近の子は、ませてるなー」
黒眼黒髪の、男性だった。一つにまとめられた長髪と、薄い銀縁フレームの眼鏡が特徴的な童顔の男性だ。顔つきは、海棠と似通っている。
「とっ、父様！」
驚いたように海棠は声を僅かに荒げ、それから慌てたようにユーフェミアと父親を交互に見つめる。
「その、これは、口説いていたのではないぞ！　某は、この娘の手毬を拾っただけであり……。その、そんなやましいことなぞ、けしてしているわけでは……」
「ほぉーう」
ニタニタ顔で父親は、海棠に近づく。ユーフェミアは突然登場したこの男性、海棠の父に人見知りをしているのか、木の陰の再度身を隠してしまった。
木の後ろにこそこそと隠れてしまったユーフェミアを、海棠の父は目敏く見つける。
「ふむ。これは、これは……。アシュリー人とのハーフの子だな」
海棠の父は、ユーフェミアの目線の高さに合わせるため腰と膝を折った。そして驚いたように目を見開き、恥ずかしそうに木と一体化しようとしているユーフェミアに微笑みかけた。
「今日は。私はこいつの父親、入江蓬。君は？」
「つっ、月倉、ユーフェマッ……ユーフェミア、です……」
ユーフェミアは舌を噛んでしまい、耳まで真っ赤にして俯いた。
そんなユーフェミアの姿を、蓬は微笑んだまま見つめる。
「ユーフェミアちゃんだね。名前がカタカナってことは、母親がアシュリー人か」

蓬は腰と膝を真っすぐにのばし、ニタリと海棠を上から見下げる。人をからかうような笑みを浮かべた父親を、海棠はムスッとした顔で見上げる。
「それじゃ。若者はどうぞごゆっくり。年寄りは退散するよ」
「そうかよ。あっ。それから、今日は何故こんなに早い時間に帰ったんだ？」
「あぁ。仕事が早く終わってな。それよりも。彩乃は？」
「体調が良いと言って先ほどまでここにいたんだが、急に咳が出だしたから家へ戻るように言った。多分、今は布団で大人しくしているだろう」
「そうか。ありがとうな。お兄さん。それから、ユーフェミアちゃんとは仲良くするんだぞ。いいな」
幼い笑みを浮かべた蓬は、彩乃も通った畦道を歩み家へと向かう。
「……お若いのですね。海棠さんと彩乃さんのお父上様」
「え。そうか？　……某には子供（ガキ）っぽすぎると思うのだが」
「いいえ。素敵なお父上様です。……ところで、先ほどから気になっていたのですが……」
「うん？」
ユーフェミアの問いに、海棠は首をかしげる。
「先ほど、何故蓬様は私がアシュリー人とのハーフだとお分かりになられたのでしょうか。そのようなこと、私は一言も言っておりませんのに……」
海棠に続くようにして、ユーフェミアが首をかしげる。海棠は「あぁ」と声を上げ、傾けていた首を起こした。
「それはな、父様が魔術師だからだ。人には、？気？の流れというものがあってだな、魔術師にはその気の流れが分かるんだ。その流れは、年齢や性別、人種など様々なことで一人ひとり違うし、体調や感情などで簡単に変わる。だから、父様はユーフェミアの中にアシュリー人の流れを感じたんだよ」
海棠は説明を終え、すぐにあっと小さく声を上げた。

「何ですか？」
「……その。名前、呼び捨てで、構わなかったか？」

scene 6

相手を気遣うような海棠の表情と声音に、ユーフェミアは不思議そうに目を瞬(しばたた)かせる。質問の内容が全く分かっていないようなきょとんとしたユーフェミアの表情に、逆に海棠が不思議そうな顔をした。

「その、先ほど某はおぬしのことを呼び捨てで呼んでしまったのだが……？」

「え？　あぁ。そうなのですか。それで、何か悪いことでもあるのですか？」

「いや。おぬしは今日初めて会ったばかりの者に呼び捨てにされて、気にはならぬのかと某は聞きたいんだ」

再度ユーフェミアは瞬きを繰り返し、曖昧な口だけの笑みを浮かべきょとんとする。そんなユーフェミアの反応に、海棠は戸惑う。

「あ、の……。ユーフェミア、さん？」

「あ、その……。私、名前なんて一緒に屋敷に住んでいる人たちにしか呼ばれたことがないもので……。呼び捨て以外で呼ばれたことが、ないのです。先ほど彩乃さんに初めてあだ名で呼ばれましたし、蓬様に初めてちゃんをつけて呼ばれました」

今度は、海棠がきょとんとする番だった。

「初めてって……。おぬしのことをちゃん付けで呼ぶ友人などは、いないのか？」

「あ……」

海棠の問いに、ユーフェミアは顔を歪める。

一陣の風が二人の間を通り過ぎ、ユーフェミアの持つ蜜色の髪を長く揺らす。風に儚く揺れる細い糸の様な髪が、ユーフェミアの顔を覆う。

ユーフェミアのよくはない反応を見て、海棠は慌てる。

「すっ、すまぬ。気に障るようなことを聞いてしまったか……？」

「――いいえ。構いません。お気になさらないでください。それから、さん付けはしないでください。呼び捨てで構いませんから」
そう言ったユーフェミアは、光を受けて輝く朝露のように静かで美しい笑みを浮かべていた。しかしそれは、どこか作ったように見える笑みだった。

快晴。
澄みきった川は、青く晴れ渡った空の色を反映して煌めく。風は穏やかに凪いで、とても心地よい。
ユーフェミアとの出会いから数日経った、そんな美しい日のこと。
「彩乃。ついて来なくても良かったんだぞ？」
「いいんだよ。兄者について行きたかったんだ。良いじゃないか」
「しかしだな……」
「大丈夫だよ。これくらい平気さ」
にぎやかに店が建ち並ぶ中心都市。そこに白い和服と紺の袴をはいた海棠と、淡い桃色に色づいた白い紬を着、漆黒の長髪を丁寧にポニーテールに結っている彩乃の姿があった。
二人が歩くのは、華やぐ中心都市の大通り。彩乃は海棠と手を繋いでいるものの、海棠の少し後ろを歩いている。その姿はまるで、恋人同士のようだった。
「あら坊ちゃん。べっぴんさん連れてデートかい？　妬けるねぇ」
案の定、そんな二人の姿を見た布屋の主人らしき一人のおばさんが、店から顔を出してケラケラと笑いながら海棠に言った。
布屋の前を通った海棠は、顔を真っ赤に染め、
「なっ……」
僅かに言葉に詰まった。
「ちっ、違います。某は、この者の兄です」
「あら？　そうかい」
ケラケラ笑いを止めぬまま、おばさんは二人を見る。
海棠はおばさんの言葉にむすっと顔をしかめ、彩乃はきょとんと

おばさんを見上げる。
海棠は顔をしかめたまま、ぎゅっと彩乃の手を握る右手を握り締めた。
「っ！」
その力の強さに、ビクッと彩乃は首をすくめる。そのまま視線を下げ、まじまじと海棠に握られている自分の左手を見つめる。
「行くぞ」
そんな彩乃をお構いなしに、海棠は強引とも思えるほど強く彩乃の手を引っ張り、ずんずんと速足で進み始める。
「えっ！」
彩乃は急なことに、小さく声を上げた。ぐっと腕が引っ張られ、足取りが自然と速くなる。
海棠の速足は、彩乃にとっては走るスピードとほぼ同じである。
「あっ、兄者。ちょっと、速いよッ」
「……」
むっつりと黙ったまま、人ごみの中を海棠はひたすら歩む。彩乃は必死になって前を行く兄に付いていく。が、身体が弱く体力もない彩乃はあっという間に息を切らしてしまった。
「兄者……。ちょっと、止まってくれッ」
喘ぐような彩乃の言葉に、ぴたりと海棠は足を止める。
やっと止まってくれたとばかりに、彩乃はせわしなく浅い呼吸を繰り返しながら僅かに微笑む。
「兄者。一体、どうしたんだい。急に急ぎ足になって。びっくりするじゃないか」
彩乃の純粋な疑問に返ってきた答えは、
「……っ」
振り払われた、二人の手だった。
「あ……にじゃ？」
唐突な兄の行動に、彩乃の笑みはかき消された。視線を下げ、戸惑いを浮かべた顔で僅かに兄の手の感触と温度が残っている左手を

見つめる。
「……どうしたんだい。兄者？」
彩乃の問いに、海棠は振り返る。その顔は、不快に歪められていた。
「彩乃。いつまで手など繋ごうとするんだ。もうおぬしも某が手を繋がずとも構わぬ歳だろう。大体、おぬしが手を繋いできたからッ……！」
海棠は濁流のように言葉を彩乃に浴びせ、ふいにその流れを止めた。
「……」
自分の正面に立つ彩乃の顔が、その時ふいに悲しみで歪んだのだった。

scene 7

今にも涙がこぼれそうな彩乃の瞳。その瞳から逃れるようにして、海棠はふいと視線をそらした。彩乃もそんな海棠に話しかけたりはせず、ただ黙って俯く。

正面に向き直った海棠は前を向いたまま、

「……迷子になるなよ」

それだけ言うと歩み始めた。先ほどよりもそのスピードが遅いのは、彩乃への罪悪感があるからだろう。

自分の足音に重なるもう一つの小さな足音を聞きながら、海棠は後ろから彩乃がちゃんとついてきていることを悟る。それと同時にその耳は、ぐすぐすという鼻をすする音も聞き取っていた。

「……彩乃」

しばらく歩んだ後、海棠は正面を向いたまま妹の名を呼んだ。その呼びかけに後ろから返事はなかったが、それは重々承知の上で海棠は名を呼んでいた。

「すまない。先ほどは悪かった。あのようにムキになって……。某もあれごときで怒るなど、どうかしていた。どうか、許してくれ……」

ぎゅっと、海棠は両手でこぶしを握る。

彩乃と手を解いてから、ずっと考えて考えて考え続けていた謝罪の言葉。海棠は道中、ずっとそのことばかりを考えていた。普段優しく思いやりのある兄の姿しか見ていない分、あのように突き放したもの言いをされては、彩乃のショックも大きいだろう。

「……」

歩みを止めぬまま、海棠は黙って彩乃の返答を待つ。

絶対に許さない、と言われようがそれは仕方のないことだ。しかし、海棠の心中では許してほしいという気持ちの方が断然勝ってい

る。
「……」
重苦しい沈黙。
「……彩、乃？」
さすがにここまで黙しているのはおかしいと思ったのか、海棠は歩みを止めると怪訝そうに彩乃のいる自分の後ろを振り返った。そして、
「っ！　まずい！」
そこに彩乃の姿がないことに、やっと気がついた。
「くそっ！　考え事に気を取られすぎていたッ」
海棠の顔に、みるみる後悔の色がにじむ。彩乃がいなくなったことに気がつかなかった自分の不甲斐なさに、腹を立てているのだろう。海棠は強く奥歯を噛み締めると、勢いよく地を蹴った。
「……彩乃。無事でいてくれよ」
海棠はここまで歩いてきた道を、疾風のような速さで走り始めた。

病が悪化し、道端に倒れているかもしれない。
悪人にさらわれているかもしれない。
右も左も分からない中心都市で、迷子になっておろおろしているかもしれない。
最悪の事態ばかりが、海棠の頭に浮かぶ。頭によぎる彩乃はすべて、手を解いた時のように憂いを含んだ泣き出しそうな表情をしているのだった。
海棠の頭の中で、涙に潤む漆黒の瞳が自分を見つめる。
「――あぁっ！　某は何故あのようなことを言ってしまったのだ！！」
海棠は苦虫を噛み潰したかのように顔を歪め後悔するが、その念は海棠をイラつかせるばかりだった。
――おつかいと彩乃の世話を頼むよ。お兄ちゃん――
家を出る間際に見た、童顔の父の笑顔。

彩乃の世話をすることなど当たり前のこと。言われずとも分かっている。
強気にそう思っていた自分に、海棠は腹が立ち同時に恥ずかしくなった。
「……馬鹿みたいだ。全く」
陰鬱に俯き、ボソリと呟く。眉間に深いしわが刻まれる。
海棠が、今自分はどこまで引き返したのか確認しようと顔を上げ、道際に並ぶ店にどのようなものがあるのかを確かめようとしたときだった。
「ゆうちゃんをいじめるんじゃないよ！」
勇ましく響いた、甲高い少女の声。
「！」
その声に誰よりも早く海棠は反応する。
声の主を一瞬で悟った海棠は、ぴたりと足を止めた。海棠の前進方向の数十メートル先から上がった声。それは、
「彩乃！」
聞き間違えようのない、海棠が毎日聞いている妹の声。
「待っていろ……！」
海棠は声の上がった方向へ向けて、さらにスピードを上げて走り出す。
人込みは、海棠の前進を阻む。海棠はたくさんの人にぶつかり、たくさんの人に押されながらゆっくりと、しかし確実に前進を続け、
「っとと……！」
唐突に、開けた場所へ出た。
しかし海棠は、道のど真ん中だというのに何故ここだけ開けているのか、ということを考えるよりも先に、
「彩乃！」
眼（まなこ）が捉えた妹の方へと、身体が動き出していた。
開けた場所の中心。そこに彩乃はいた。凛とした顔つきで三人の少年と対峙し、尻もちをついている一人の少女を大きく両手を広げ

て背中に庇(かば)いながら。
海棠は彩乃以外の人物が自分の顔見知りなのかそうでないのかを確認するより早く、その瞳は彩乃と対峙している三人の少年たちの立ち位置、近辺に火の元がないこと、側を流れる浅瀬の川を確認した。そして何かを確信したかのように小さく頷くと立ち止まり、勢いよく前へ両手を突き出した。
唐突に不可思議な行動をとった海棠の姿を見つめる道行く人々は、怪訝そうに顔をしかめる。海棠の漆黒の闇を写し取ったかのように黒い瞳はうっすらとしか開かれておらず、唇は何かを詠唱するかのように小さく、しかし速く動いていた。その口からは、何の音も漏れては来ない。
彩乃に対峙する少年の一人が怪しげな行動をとっている海棠に気付き、そちらを振り向こうと顔を動かした刹那、
「――我が僕(しもべ)、風の精霊(シルフ)の風麗(ふうれい)よ！　ここに形を成し、我が力となれ！」
うっすらと開かれていた海棠の瞳が決意を秘めたかのような光を灯して力強く開かれ、朗々とした声がその場に響き渡った。

scene 8

海棠は鋭い声とともに、目の前の相手を下から袈裟に切るようにして、風を切り裂きながら右手を左下から右上へと勢いよく振り上げた。

刹那――

「ぎゃあっ！」「何なんだよー！」「うわっ！　なッ――！」

彩乃と対峙ていた三人の少年が、突然吹いた疾風によって軽々と宙へ飛ばされた。

ぎゃあぎゃあと三様のわめき声を上げながら、三人は呆気なく川へと落ちる。派手に水しぶきが上がり、太陽の光によって小さな虹が出来上がった。

驚きと戸惑いと怒りと悔しさを練り混ぜたような複雑な感情を抱きながら、掘が深い川に落ちた三人の少年たちを気にもせず、海棠は彩乃へと走り寄る。

「彩乃！　大丈夫であったか？　っと……あ。ユーフェミア？」

「あ、海棠さん……。貴方が、助けてくださったのですか？」

「あ、あぁ。正しくは、？間接的に？だがな……」

苦笑を浮かべる海棠。その曖昧な言葉と表情を見て、ユーフェミアはきょとんと首をかしげる。そして、

「あぁー！　非道（ひど）いじゃない、海棠ッ！　この浮気者！」

小鳥の泣き声のように清々しく、吹きわたる風のように涼しげなソプラノ声が、強く吹き付ける一陣の風のように甲高く流れてきた。

「なッ。ひっ、人聞きの悪いことを言うなッ！　大体、某（それがし）はおぬしとの恋愛関係は一切持っていないぞ。あくまで契約主と僕（しもべ）だ。分かっているのか、風麗」

僅かに紅潮した顔で、海棠は後ろを素早く振り返った。

「っあぁん。もう。海棠ってば冷たいわね。でもそこがまた萌えるのよねぇ」

「何だそれは」
海棠がいかがわしげに見つめる先。そこには、宙に浮いている一人の少女がいた。見た感じの年齢は十代の後半ほど。ノースリーブの質素な緑と黄緑のワンピースを身にまとい、風にさらりとなびく腰まである白銀の長髪と、透き通るようなエメラルドグリーンの瞳と、エルフのような尖った耳をその少女は持っていた。
ふわふわと宙に浮く少女は化粧気はないが、まるで付けまつ毛をしているかのようにまつ毛は長く、綺麗な二重をしており、頬には紅を塗っているかのように朱が差し、蠱惑（こわく）な笑みを浮かべる肉感的な唇は紅を引いているかのように真っ赤である。つまりは、大変色っぽい美人なのであった。その美しさはかなり人間離れして見えるが、実際宙に浮いているのだから人間ではないだろうと予想はつく。
「あ……の。海棠さん。あのお方は、一体誰ですか？」
少女のあまりの美しさとその身体が宙に浮いているという異様さに、しばらく呆気にとられていたユーフェミアは、言葉を絞り出すようにしてやっとそれだけ言った。
「あやつは、魔術的な契約を交わし某の僕（しもべ）となっている風の精霊シルフだ。まぁ。某専属のシルフだと思ってくれ。ちなみに名は風麗（ふうれい）という」
「専属の、ですか……」
ユーフェミアはシルフの少女――風麗にゆっくりと視線を向ける。
「ちょっとぉ！　何、仲良さ気（げ）に話しちゃってンのよッ。そこの女！　邪魔よッ」
風麗の言葉とともに、海棠の横で小さな風が巻き起こった。風は海棠の髪をフワリと柔らかく揺らす。漆黒の髪が舞いあがり、もとの位置に戻るより早く、
「うわっ！　速ッ」
海棠のすぐ左隣りに風麗の姿があった。
風（シルフ）なのだから、もちろん速いに決まっているのだが。
「海棠～。久しぶりなんだから、もっと再会を感動してもいいじゃ

ないの」
風麗は勢いよく海棠の腕に抱きつく。
「――って。わっ！」
その反動で、海棠はバランスを崩しそのまま風麗もろとも地面に倒れた。
「きゃっ。あたしったら海棠を押し倒しちゃったっ」
「阿呆ッ！　だから！　某は――」
声を荒げ、風麗の腕から逃れようと必死にもがいた海棠だったが――
唐突に、海棠の口が閉ざされる。
海棠が、何かマズいことでもあったかのようにふっと言葉を止めた理由。それは、
「――待て。待てって言ってるんだよッ！！」
ふいに立ち上がり、大声で怒鳴りつけた彩乃に驚いたからであった。
海棠も彩乃も父親の血を濃く受け継いでいるのか、二人とも普段からよほどのことがない限りは声を荒げたりしない。そのため海棠は、大声を上げる彩乃の姿など見たことがなかったのだ。
「彩、乃……？」
驚きで目を瞠る海棠と、その横で彩乃にきょとんとした視線を送る風麗と、再び呆気にとられたユーフェミアを残し、彩乃は川へと落ちた少年三人組の元へと向かって行った。
「貴様ら。ゆうちゃんをいじめておいて、まさか何もしないで簡単に帰ろうってのかい？　そんなこと、あたしが許さないよ！」
川の淵に立ち、腕組みをして彩乃はぎろりと三人を見下ろす。少年たちよりも彩乃の方が歳は下だというのに、今の彩乃には年上の相手さえも怯ませてしまうような凄みがあった。
風麗と海棠によるちょっとした諍いの間に、こそこそと川から這い上がって逃げようと企んでいた三人は、彩乃の剣幕に肩をすくめる。

「まずはゆうちゃんとちゃんと向き合って謝りな！　ゆうちゃんが許すというまで、何回だって頭を下げな！　本当は土下座して謝ってもらいたいくらいだけどねッ」
風を切り裂きながら、彩乃は三人へと右手の指を突き出した。三人はまるで鋭く切れ味のよい刃物を突き付けられたかのように、同時にびくりと身体を震わせる。
「……」「……」「……」
「速く謝りなって言ってんだろッ！！」
彩乃の叫ぶような声に、三人は居心地悪そうに互いの顔を見合わせる。
しばらく無言で見合わせていた後、三人の中で最も年長の中心的存在と見える少年が、「分かったから、川から上がらせてくれ」とぶっきらぼうに声を上げた。
「分かった。逃げるようなマネはするんじゃないよ」
彩乃は念を押し、その場から一歩退いた。しかし、その厳しい視線はしっかりと三人の方向へ向けられたままだ。
少年たちは慌てながら上へあがるために堀を登る。先に上がった二人が、三人の中で最も小柄な少年が上がるのを手助けした後、三人はびしょ濡れの身体の正面をユーフェミアの方へ向け、
「……すまなかった。許してくれ」「……ごめん」「すいませんでした」
彩乃に恐れをなしたのか、三人が腰を折って真剣に素直な声音で謝った。

scene 9

それまでぼぅっと彩乃を見ていたユーフェミアは、僅かに反応が遅れる。はっと我に返り、ユーフェミアの美しい蜜色の髪が肩からこぼれた。

「あ……。はい。私は、構いませんよ。申し訳ないと思っているのでしたら」

ユーフェミアはちいさく首を縦にふる。

「あ、あぁ。思ってるよ」

顔を上げた少年のもごもごとした口調に、彩乃の鋭い眼差しがそちらへ飛ぶ。彩乃に鋭く睨みつけられた少年たちのリーダーは、慌てて大きく手を振る。

「ほっ、本当だ！　嘘なんてついてないって！」

リーダーの懸命に訴えるその瞳からは、真剣な色がうかがえる。彩乃はそれを見て取ると、ゆっくりと頷いた。

「よい。じゃ、もう行っていいよ」

彩乃の声を合図に、三人は転げるようにして走り去ってしまった。

「なぁに？　アレ。男なのにみっともないわねぇ。海棠の爪の垢を煎じて飲ませてあげたいわよ。まっ、謝った誠意だけは認めてあげるけど」

未だに海棠から離れようとしない風麗は、クスクスと小さく笑いながら少年たちの背を見送った。

「……」

ユーフェミアは、目の前で起きた出来事に呆然とするしかなかった。どうやら心と頭の整理ができないようで、ぼんやりとした表情のままその場に座り込んでいた。その体勢は終始、変わることがなかった。

「――あぁ。何だ」

海棠はその真っ黒な瞳に希望に似た柔らかな光をたたえ、勇まし

く立っている彩乃の背を見つめる。
「もう、某が守らずとも立派に生きていけるではないか。彩乃……」
海棠はふっとため息をつくように、小さく呟いた。その呟きは、悲愴と感嘆と安堵が入り混じったような複雑な響きをしていた。
「うん？　どうしたのよ、海棠」
風麗の笑顔の問いに、
「あぁ。そろそろおぬしを四精霊の居るべき場所に帰さねばならないな、と思ってな」
海棠はさも可笑しそうに笑いを堪えながら答える。
「それはイヤァァァァァァ――――！」
風麗の絶叫が五月蠅く響く。しかし、海棠の心には一点の曇りもなく清々しさだけに満ち溢れていた。けれどやはり、その瞳にはほんのわずかな憂いが浮かんでいた。

彩乃の話によると――
気がつけば兄の姿を見失い、迷子になってしまっていた彩乃は、泣き泣き家へ引き返そうか、それとも前へ進もうか迷っていたのだが、その決断を下すよりはやくふとそばでユーフェミアの声がしたような気がして、そちらへ行ってみるとユーフェミアを取り囲んでいじめている三人の少年がいたので、それに憤怒した彩乃は少年らに突き飛ばされて尻もちをついたユーフェミアのそばへと駆けより、反泣きになっていたその金髪少女をかばいつつ少年たちと対峙していたところ、海棠が現れ少年たちをシルフの力で川へと落としてくれた、というわけだったらしい。
「文章が長いわね」
未だに帰っていない風麗の突っ込みはさておき。
「ときに、兄者。どうしてここへ――？」
彩乃の問い。その言葉に、海棠はうっと詰まる。
今まで目の前の事に対応することで手いっぱいだったため、彩乃に謝るために彼女を探していたことをすっかり忘れていたのだ。

謝罪の言葉はすでに考えているし、それを考える時間ならいくらでもあった。だというのに――いざ言いだそうとすると、何故か頭の中が真っ白になってしまうのだった。

頭の中で言葉を懸命に紡ごうとするのだが、紡いだ矢先それらの言葉は簡単に解けてしまい、頭の中から消えていってしまう。つまり海棠には、今の心情や感情を上手く言い表せないのであった。

「その……。彩乃に、謝りたいんだ」

海棠の口から出てきたのは、そんなひどく簡単な言葉だった。が、それだけでことは十分足りる。のだが、

「何を？」

彩乃はきょとんを小首を傾げ、本気で兄が何を謝ろうとしているのか分からない様であった。

そう切り返されるとは思ってもみなかったためか、一瞬海棠は不意を突かれたような気分に陥る。その戸惑いは、思い切り顔に現れていた。

海棠はやや俯きながら、言葉を少しずつ丁寧に紡ぐ。

「何をって……。その、彩乃に、あんなことを言ってしまって、その……怒鳴りつけたりなどしてしまって……本当に、すまない。某は――最低な兄だ」

「そんなことないよ！」

彩乃の力強い声に、だんだんと顔を俯かせていた海棠は顔をはっと上げた。

さすがにこの場の空気を読むことはできるらしく、風麗も自分の腕を海棠から解いた。そして軽く宙に飛びあがると、そのまま風と一体化するようにして煙のように風麗自ら姿を消した。

身体が軽くなった海棠は地面に足をしっかりとつけて立ち上がる。未だにユーフェミアは地面から腰を上げようとはしない。その視線は、シルフが突如として消えた空中と、向き合う兄妹（きょうだい）との間をせわしなく行き来していた。

「兄者。あたしは兄者に怒られて、良かったと思ってるんだよ。怒

るっていうのは相手のためを思ってすることだって、あたしは思うからさ。相手にこうなってほしくない、こうしてほしくないっていう、相手を思いやる気持ちから来てる怒りだってあると思うんだ。確かに、この世には理不尽な怒りも存在するけどさ。――それでも、兄者の怒りはきっとあたしを思ってのことだと思うからね。それにユーフェミアを守って、あの三人を怒ってみて……初めて兄者の気持ちが少し分かったような気がするんだ。だから、謝ったりしないでおくれ。むしろこっちが感謝を述べたいくらいなんだからさ」

はにかんだような、可愛らしい彩乃の笑み。それを見て、海棠はほっと安堵の息をついた。それは、彩乃の良い変貌を称える関心の吐息でもあるようだった。

ｓｃｅｎｅ　９（後書き）

私的には、海棠メインの話よりシャノン&ユーフェミアメインの話の方が好きなんですよねｗｗ
まあ、もう少し話が進めば海棠の旅にも変化が……って感じなんすけどね。

scene 10

「ちょいと。そこの坊ちゃんとお嬢ちゃん」
海棠と彩乃が声をかけられたのは、買い物を済ませユーフェミアとも別れた後、二人で帰ろうと行きと同じルートを歩いていた時だった。
その声音に、海棠は驚いて声のした後ろを振り返る。案の定、海棠たちのすぐ後ろにある布屋の前に、行きに海棠をからかったおばさんが満面の笑みを浮かべて二人を見ていた。
「あ。さきほどの……」
「あぁ。そうだよ」
海棠の言葉に、布屋の入口に設置された木のベンチに座っているおばさんは大きく頷く。そして一瞬でその顔に浮かべている笑みを崩し、不安そうに申し訳なさそうに眉を曲げた。
「さっきはすまなかったね。少しからかいすぎたよ」
「えっ、あ、いえ。こちらこそ、あのようなことでむきになってしまうなど、恥ずかしいばかりです」
海棠は小さく頭を下げ、ちらりと隣に立つ彩乃に視線を向けた。今はもう、海棠と彩乃の手はつながれていない。が、それについて駄々をこねるようなことをもう彩乃はしなかった。
「ところで坊ちゃん。あんた、あたしの知ってる人に顔がよく似てるんだけど……もしかしてはずれに住んでる蓬さんのところの息子さんかい？」
「あっ、はい。そうですが。……あの、父が何か？」
海棠はあの楽天的で緊張感ゼロの童顔を思い浮かべながら、おずおずと尋ねた。海棠の父は魔術師で、その力を使って人助けの仕事をしている。しかしそのためか、蓬が助けた人物を恨む者などから恨みを買うこともしばしばあるのだ。
海棠はまた父が恨みを買ったのではないかと心配げに顔を歪めた

が、その表情とは裏腹におばさんはケタケタと軽快に笑っていた。
「やっぱりそうかい。あんた、父親にそっくりな顔してるねぇ。なぁに。心配するような悪い話じゃないよ。あたしは――正確にはあたしとあたしの娘は、昔蓬さんに助けてもらったことがあるんだよ」
「そ、そうだったのですか……」
海棠はほっと胸をなでおろし、強張っていた表情を和らげた。
「あぁ。ところでちょうど今、うちに団子がたんとあるんだけど、それを片付けて行ってくれないかい？」
おばさんの言葉に、すっかり会話の輪から取り残されていた彩乃が嬉々として海棠の右袖を引っ張り、前方へ僅かに身を乗り出した。
「お団子ッ！？　あたし、お団子大好きなんだ！」
「そうかい。そりゃあ、良かった」
僅かに顔を上気させながら、彩乃は嬉しそうに太陽のように明るい笑みを浮かべる。そんな彩乃をおばさんは笑顔で見つめる。
「そっ、そんな、申し訳ないです……」
海棠は左手を振りながら、慌てて答える。
「あたしは団子を片付けてほしいんだよ。団子をあげるわけじゃないんだから、いいだろう？」
「え？　あ……」
「それに、あんたの話も聞かせてもらいたいからね。どうだい？妹さんも喜んでいるみたいだよ。
海棠は自分の右袖を握っている彩乃のキラキラと輝く瞳を見て、断ることを諦めたらしく小さなため息をついた。

「へぇ！　蓬さんに魔術を習ってるのかい。じゃああんた――海棠君は、蓬さんの後を継ぐのかい？」
「まぁ……できればそうしたいと思っていますが、他にもしたいと思っていることがありますので、まだはっきりとは分かりません。しかも某は、魔術師といっても四精霊使(しせいれいつか)いなので」
「四精霊っていうと、アレかい？　エルフとかサマランダーとかか

い？」
　おばさんのうろ覚えの言葉に、海棠は頭上に大きな疑問符を作り上げた。
「シルフとサラマンダー！」
　疑問符を頭の上に乗せている海棠に変わり、口いっぱいにみたらし団子を頬張っている彩乃が大声で答えた。
「あぁ！　そうそう。それだよ。あたしより彩乃ちゃんの方が良く知ってるじゃないか」
　おばさんの苦笑とともに、「あぁ。シルフとサラマンダーですか」と海棠は両手を軽く打つ。
「それからねぇ。シルフは風の精霊で、サラマンダー火の精霊で、あとウンディーネが水の精霊で、あと……あと……」
「ノーム。地の精霊、な」
「そうそれ！　あの髭もじゃのちっちゃいおじいさん！」
　海棠の助け舟を一部借りて、彩乃は四精霊の名をすべて上げた。
「こら。彩乃。ちっちゃいって言ったら、土影（ひじかげ）に怒られるぞ」
　海棠は困ったような、呆れたような笑みを浮かべて彩乃を見る。
「ひじかげ？」
　おばさんは聞きなれないその名に、一瞬眉を寄せる。
「あぁ。土影というのは、某の召喚するノームの名です。地面の？土？に景色の？景？とさんづくりの？影？で？土影？です」
「へぇ。そうなのかい。変わった名前を付けたねぇ」
　おばさんは感心したような、好奇心をそそられたような顔をして小さく頷きながら海棠を見る。
「でね、シルフの風麗はすっごく美人のお姉さんでね、兄者とラブラブなんだ」
「なっ！　彩乃！　それは違うぞッ」
　ニタニタと彩乃は意地悪く笑い、慌てて海棠はそれに反論する。
布屋のおばさんは、そんな兄妹を微笑みながら見つめていた。
「あと、サラマンダーの奏焔（そうえん）は格好良い男の子で、うろこがあって

蛇みたいだ」
「蛇じゃなくて、トカゲだぞ」
「うん。あと、ウンディーネの水蘭（すいらん）は優しくて綺麗で、大人な感じのお姉さんなんだよ」
嬉しそうに、時々間違えながら四精霊について顔を紅潮させながら語る彩乃。その姿を海棠は柔らかい笑みを浮かべて、穏やかに見つめていた。

scene　10（後書き）

最近何かと疲れやすいです。
さて。もうそろそろ話に進展が見られます。

scene 11

「へぇ。布屋の美寿々(みすず)さんに会ったのか」
「へぇ。あの人、美寿々っていうんだ」
美寿々というらしいおばさんの家で海棠と彩乃は、串でかなり大きな山ができてしまうほど大量の団子を食べたのだが、それは食べても食べてもきりがなかった。
終(しま)いには二人とも、当分団子を見たくも食べたくもなくなってしまったのだが、そんな二人をいじめるかの如く、布屋のおばさんは何本もの団子をお土産にと二人に持たせたのだった。
帰路の間中ずっと海棠が、「団子屋でもないのに、何故あのように大量の団子があるんだ？」などどと文句を垂れていたほどだった。
そして、そろそろ子供は寝なければならないという時間帯に差し掛かった今、お土産であるその団子を食いながら海棠は今日あった出来事を蓬に話していた。蓬は何の躊躇いもなく団子に手を伸ばし美味しそうにそれを頬張るが、海棠の手はさすがにあまり団子の方へは伸びない。
彩乃はというと、少し無理をしてしまったのか帰り道の途中で咳が止まらなくなり、家に帰ってしばらくすると発熱を起こしたため今は静かに自室で眠っている。自室、といってもこの家は一階しかないため、蓬と海棠が団子を食べながら話し込んでいる囲炉裏(いろり)がある居間と、襖一枚で仕切られただけの小さな部屋だ。
「何だ。名前も聞かずに別れたのか」
蓬は美寿々の名を知らなかった海棠に、呆れたような声で言う。
「うん……。まぁ……。で、その美寿々さんって人、父様に助けてもらったことがあるって言ってたけど？」
「あぁ。美寿々さんを助けてから、かれこれ十年くらい経つかな？」
「じゅっ……！　そんなに前なのかよ」
「そうだぞ。まだお前も彩乃も生まれていない時だ。ちなみに柚姫(ゆずき)

に逃げられてもいなかった時だな」
「ふぅん……」
曖昧な返事。海棠は父に感情を悟られないよう誤魔化そうと、無理やり気持ちを抑え込んで団子に口をつけた。
柚姫。それは、顔も声も海棠は全く覚えていない母の名だった。彩乃にいたっては、ちゃんと見たことさえもないだろう。柚姫は彩乃を産んですぐ、蓬に愛想を尽かして一人で出て行ってしまったのだ。父曰く、彩乃は柚姫似らしい。海棠は母親の顔も声も覚えていないが、母が漆黒の長い髪を撫でるようにして耳にかけるという癖は朧ではあるが覚えている。
「……で。美寿々さんは自分と娘を助けてもらったって言ってたけど？」
海棠は母の話の話題をかき消すようにして、先ほどと似たようなことを父に質問した。
はっきり言うと、海棠は母親の話があまり好きではなかった。自分たちを捨てた母を恨んでいるわけではない。けれど蓬は柚姫の話をするときに一瞬、本当にほんの一瞬だけ、その瞳に陰りを浮かべるのだ。海棠はいつものんびりのほほんとしている父に呆れてはいるが、嫌いでもなければ尊敬をしていないわけでもない。だから海棠は父の顔に浮かぶ影を見たくないから、あまり柚姫の話が好きではないのだった。
海棠の問いに、蓬は団子を食べる手を止め、遠くを見つめるように目を細めた。
「あれは、大雨の後のことだったな。十年ほど前、このあたり一帯に何日も雨が降り続いたことがあった。その雨は川に氾濫をもたらし、人々を水害で困らせた。その時はどこも雨のせいで家が水につかったり、畑がだめになったりして大変だったよ。ま、そのおかげで私の仕事は増えて儲かったんだけどね。本当に皮肉な話だ。――幸い家（うち）は川から遠いし、畑の方も結界を張ってなんとか持ちこたえてくれたから大きな被害は無くて済んだ。だから家に柚姫を一人残

して、私は近くの村や中心都市の方へ人助けの仕事をしに行っていた。そんな時、被害が大きかった中心都市の川沿いの道を歩いていたら、川の上流から一人の女の子が流されてきたんだ。もちろん、荒れ狂った流れの中をね。女の子を見つけた私が、浮遊の魔術でその女の子を川から上げようと手を上げた時。女の子を追いかけるようにして一人の女性が川沿いの道をこちらへ走ってきて、丁度私と軽くぶつかったんだ。女性は人助けで有名な私を見ると、すがりつくようにして娘を助けてくださいって懇願してきた。私は無論助けるつもりだったし、人の命にかかる仕事は無償で受ける主義だからすぐに少女を荒れ狂う川から助け出したさ。私にとってそれは、手を動かすだけの簡単なことだから、さしてすごいわけでもないんだが、女性はこちらが困ってしまうくらい頭を下げて礼を言ってくれてね。その時改めて、あぁこの仕事をしていて良かった、と思えたよ」

屈託のない子供の様な父の笑みに、海棠はつられて笑みをこぼす。が、

「あれ？　でも、美寿々さんは、自分と娘を助けてもらったって……？」

「あぁ。それはきっと、娘さんを助けたことで、自分も救われたってことなんじゃないか。もしもあのまま私と会わず、娘さんが助からなかったら美寿々さんは正気じゃ居られなかったんだろう」

「そうか……」

海棠は複雑な表情で呟き、それからすぐ笑顔になる。

「父様は、以外に立派なんだな」

「以外、は余計だろ」

蓬の屈託のない笑みは海棠の言葉によって、苦笑へと早変わりする。

「父様はガキすぎるんだ。一体今年で幾つだよ」

「あー。そろそろ三十歳になるかなぁ。もう三十路（みそじ）だ三十路。っていうか、親の歳くらい覚えておけよ、海棠」

「はいはい」
海棠は呆れたように父へひらひらと手を振る。そんな海棠の姿を苦笑を浮かべたまま見つめていた蓬は、ふいに「あぁ」と声を上げた。
「そういえば、私が助けた美寿々さんの娘さんはその時十歳だったから、今はさぞ私好みの麗しい女性になっているんだろうなぁ……」
蓬のほんわりとした声に、じっと海棠は冷たい視線を父へと向ける。
「そういうこと考えるか？　普通」
「無論、考えるさ」
「……この助平親父（すけべおやじ）め」
「安心しろ。私にロリコンの趣味は無い」
「さいですか」
未だに冷たい視線を送る海棠。そんな瞳を見て、蓬は慌てて話題を変えようと海棠に話を振る。
「そういえば、他に都市で変わったことはなかったか？　誰かに会ったとか」
蓬の発言に海棠は、まるで父に心を読まれたといわんばかりに大きく目を見開き、顔を真っ赤に染めた。

scene 11（後書き）

今回、中途半端に切れてしまって申し訳ありません；

scene 12（前書き）

今回は一区切りつけたかったので、少し長めです。

scene 12

「なっ、何でそのような話に、なるんだよッ」
「うん？　何でって、別にいいじゃないか。あ。さては誰かに会ったな？」
　ニヤニヤと意地の悪い蓬の笑み。
「……こういうところがガキなんだよな」と独りごちる海棠は、ため息とともに言葉を発する。
「ユーフェミアに、会った」
「ほう！　あの美人の！　あ……。だから、私はロリコンではないぞ」
　冷たく湿ったような海棠の視線に、蓬はいそがしく首を降る。
「分かってるよ。で……ユーフェミアに会ったんだが、その……ユーフェミアが、三人の少年にいじめられていた」
　海棠のその一言に、ニヤついていた蓬の顔がふっと一瞬で能面のような無表情になった。俯きながら話している海棠は、父の表情の変化に気がつかない。
「彩乃が助けてくれたからよかったんだが。まぁ、その、ユーフェミアくらい内気な女の子ならいじめられることもあるかもしれないが……某が気になったのは、たくさんの人がそこにいたのに誰一人としてユーフェミアを助けようとしなかったことなんだ。ユーフェミアがいじめられている周辺には意図的に避けてるとしか思えないくらい人がよりつかなかったし、皆見て見ぬふりをするように素通りして行くんだ」
　海棠は眉を寄せて訴える。何故人々はユーフェミアを助けなかったのだろう？　何故、誰一人としてあの少年三人を止めなかったのだろう？
　海棠の頭の中にはそんな疑問ばかりがつのる。が、頭や心の中へ自問自答したところで、少しも答えは返ってこない。海棠はそれで

も何度もユーフェミアがいじめられていた場面を思い出し、何故誰も助けなかったのかを思案し続け、結局答えは「分からない」で行き詰まり、そして、
「それは、ユーフェミアちゃんがハーフだからだよ」
その疑問の答えは、唐突に蓬の口からこぼれ落ちてきた。
海棠は驚いたように、びくりと身を震わせる。それは蓬の答えに驚いたのではなかった。――蓬の、その声音の冷たさに驚いたのだ。
「――え？」
海棠は答えの意味が分からないことと、驚きに素早く顔を上げて蓬を見た。そして、息をのんだ。
蓬は、その柔和な顔に普段は見せないような厳しい表情を浮かべていたのだ。
絶句している海棠をよそに、蓬は表情を崩さぬまま言葉を続ける。
「海棠。差別って知ってるか？」
「差別って……あの、区別をつけて扱う、あれ？」
「そうだ。今の世の中、差別というのはそう珍しいものじゃない。ユーフェミアちゃんはアシュリー人とのハーフで、そっちの血が濃く出ているから人種差別を受けてしまうんだ。まぁ、二十七年前に大陸共通語になってからは国々の文化も統一性を帯びてきているから、瑞穂の国とアシュリー王国とユバーフィールド連合王国の間での人種差別は僅かながら減ってきたんだけどな」
蓬の言葉に、海棠は苦汁を飲んだかのようにぎゅっと顔をしかめた。
「だって、同じ人間だろ。それに、ユーフェミアは何も悪くないじゃないか」
「そうだ。海棠の言っていることは正論だ。だけどな、人生正論ばかりでできているわけじゃないんだよ」
「でもっ……」
海棠は顔を俯けこぶしを握り、何かを訴えようとしたのか肩に力が入る。がすぐに力を抜き、僅かに上げていた肩を力なく、呆気な

く落としてしまった。
「海棠。ユーフェミアちゃんと仲良くなったからには、絶対に最後まで仲良くしろ。分かっているな？」
海棠は蓬の言葉に、俯きながらもこくこくと大きく力強く頷いた。
「今日から刀稽古（かたなげいこ）を受けたい！」
そんな突拍子もないことを言い出したのは、身体の弱い彩乃だった。
それは、早起きが苦手な蓬がまだ布団の中でいびきをかいて眠り、早起きに慣れている海棠と彩乃が二人で朝食を作っている朝のことだった。
その日は、蓬と海棠がユーフェミアについての話をした次の日である。
キャベツを千切りにしている途中であった海棠は、妹の突然の発言に危なく手に持っていた包丁で自分の手を千切りにするところであった。が、慌てて包丁を手を切るより速く止め、事なきを得る。
「っと……。え、ま、またどうしてだ？」
戸惑いがちに海棠は彩乃を見る。彩乃は小さな鍋の中の味噌汁を味見しながら、目つきを鋭く尖らせる。ふわりふわりと柔らかく湯気を上げる味噌汁と、彩乃の鋭い眼光はとても不釣り合いに見えた。
「無論、ゆうちゃんを守るためだ」
真剣な彩乃の答えに、海棠ははっと目を瞠（みは）る。包丁を握る手から力が僅かに抜け、銀光りするそれはまな板の上に重い音を立てながら落ちた。
海棠が見つめる中。彩乃は神妙な眼差しで味噌汁を混ぜていた。
「……もしかして、彩乃。昨日の話、聞いていたのか」
「あぁ。聞いたよ。最初から最後まで、一語一句逃さずにね。だから、ゆうちゃんをしっかりと守れるだけの力があたしは欲しいんだよ」
彩乃は手が白くなるほど、お玉を持っている右手をぎゅっと握り

しめた。まるで硬いお玉の柄を、へし折らんとするかのような力の入れ具合だった。
海棠は何か追い詰められているような妹の表情を、呆気にとられたような憂鬱に歪めるような悲嘆にくれたような、様々な感情が入り混じった複雑な表情で見つめる。
「……本当に、それでいいのか」
「あぁ。あたしは、ゆうちゃんを守りたいんだよ。いつまでも、守られてばかりは嫌なんだ。それに――ゆうちゃんの悲しむ顔も、見たくない」
彩乃はその瞳に、強く輝く光を宿す。その言葉に、海棠は未だ複雑な表情を浮かべたまま、
「いいんじゃないか？　彩乃が大丈夫なら」
そう言わなかった。
「えっ？」「わっ！」
突然上がった声に、二人は同時に飛び上がった。そうして身体を僅かに震わせた後、二人はそろえているとしか思えないような動きで同時に振り返る。そして、
「父様！」「父上！」
また同時に、同じ人物を指す言葉を大声を上げた。
「はっはっは！　二人とも、ぴったりだな。以心伝心（いしんでんしん）ってやつか？」
台所の入口にもたれて顔をのぞかせている蓬は、そんな二人を見て大きな笑い声をあげた。その笑いに、海棠と彩乃は互いに目を合わせて苦笑しあう。
「ところで彩乃。刀を習いたいのか？」
蓬の言葉にふっと彩乃は一瞬で表情を引き締め、蓬を真っすぐな眼差しで見つめる。
「あぁ。あたしは本気だよ。……確かに身体は弱いし、体力もない。けど……ゆうちゃんを、守りたいんだ」
何かを固く決意したときのゆるぎない瞳。燃え盛る炎を灯したかのようなその瞳に、蓬はふっと微笑んだ。

「何かを守るための強さ、というのは何ものにも負けないほど強いものだ。彩乃なら、大丈夫だろう」
蓬の答えに、彩乃はぱっと明るく顔に笑みを浮かべる。が、
「しかし父様。彩乃は身体が弱いのだぞ」
それに反論したのは、海棠だった。
海棠は厳しい眼差しで彩乃を見つめ、続いて蓬を見つめる。蓬は昨夜とは打って変わって、普段通りのゆるりとした笑みを浮かべて海棠の視線を受け止める。
「刀を習ったとして、彩乃が身体を壊しては――」
「兄者！　あたしは大丈夫だよ。あたしは、もう決めたんだ」
彩乃の決意は、誰にも壊すことのできないような巨大な岩のように恐ろしく固かった。そんな決意をあらわにしている瞳に見つめられ、海棠は僅かに狼狽する。
「私はいいと思うよ。だけど、誰でも気軽にできるほど刀稽古は楽じゃないと思うぞ」
「あぁ。勿論分かってるよ。あたしにゃ魔術の才能がないからね。刀なんかの武器の扱いを習うしかないんだよ」
苦笑交じりに彩乃は言う。
「どんなに辛くても、続けられるという覚悟はあるか？」
「勿論だよ」
彩乃は心配げに見つめる海棠の視線を受けながらも、力強く頷いた。
その首肯により、彩乃が刀稽古を受けることは決まったのだった。

scene 13

海棠と彩乃がユーフェミアに出会ってから、八年の歳月が流れた。
彩乃は刀のセンスがあったのか驚くほど上達し、海棠も父とともに人助けをできるようになるほど魔術の力をつけた。
やはりユーフェミアは差別を受けていたが、人助けで有名な腕の立つ魔術師である蓬の息子、娘と中が良いということで、さほどひどい扱いは受けていないようだった。
このまま穏やかな日々が過ぎてゆくのだと、誰もが思い、これから起きる三人の転機に気付くものなど、誰一人としていなかった。
いや――時見である蓬には、分かっていたことなのかもしれないが。
そんな運命の境目は、雨とともにやって来た。

黒く染まった曇天の空の下。
「――あっ」
人助けの依頼を終え、蓬とともに家へ帰っていた海棠の頬に突然雨粒が降って来た。
「うん？　どうした」
蓬はふいに声を上げた海棠の顔をのぞき、海棠は「いや……」と曖昧に返答を返しながら、湿った頬を右手の平で拭った。
「雨が降ってくるみたいだ」
海棠は低く雲が垂れこめる空を見上げ、顔をしかめた。
「そうか。少し風も湿っぽくなってきたしな。急ごうか」
蓬は急いでいる風は全くない、のんびりとしたマイペースな声でそう言う。
「あぁ。まぁ、笠（かさ）も持ってきてあるがな」
海棠はひもで首にかけている笠がちゃんとそこにあるか確認するように、肩越しに軽く振り返る。一方の蓬は全く気にする風もなく、海棠の言葉に頷く。

「そうだな。――あぁ、そうだ。話は変わるが、海棠」
「何だ？」
海棠は暗い虚空を見つめていた視線を下げる。
「周囲の人の中で雨が最初に落ちてきた人は不幸になるって迷信、知ってるか？」
「何だよ？　それ」
「雨って、あまり嬉しいもんじゃないだろう」
「まぁな。日照りが続くのも、嬉しいものではないが」
「だな。まぁ、一般的に雨はあまり好かれない。だからその雨が一番に落ちてきた人は不幸になるって、それだけの話さ」
「ふぅん」
海棠はやや顔をしかめながらも、さして興味もなさそうに生返事を返す。その瞳は再び曇天の空を映し出す。漆黒の瞳に灰色の空が映り、その瞳の下に再び雨が落ちてきた。雨の雫はゆっくりと頬を滑り、その後素早く駆け抜けるように頬の上を走る。それはまるで、海棠が一粒の涙を流したかのようであった。

本降りになる前に、なんとか二人は家にたどり着くことができた。
雨は僅かに強さを増していた。今はその雫が地や木の葉を打つ、冷たく湿った音が聞こえるほどになっている。
「あー、父様。彩乃はちゃんと笠を持って、下駄をはいて稽古場に行っただろうか？」
海棠は囲炉裏に火を焚きながら、玄関でわらじを脱いでいる蓬に問いかける。わらじときゃはんを脱ぎかけていた蓬はその手を止め、玄関脇の笠をかけている壁を見つめ、それから土間に並べられている靴を見つめ、
「あぁ。大丈夫だ。ちゃんと彩乃の笠が一つなくなっているし、わらじはあるが下駄はなくなってる」
海棠は安堵のため息をそっとついた。彩乃にとって雨は天敵である。雨の勢いが強ければ笠をかぶったところで少しはぬれるが、か

ぶらないよりはましだろう。
安心している海棠を見ながら、蓬はにやりと意地悪く笑う。
「ま。あいつはお前と違ってしっかりしているからな」
その言葉に、むっと海棠は顔をしかめる。
「某(それがし)がそれほど頼りないというのか」
「いいや。誰もそこまでは言ってないぞ」
蓬はわらじときゃはんを脱ぐと、海棠が火を焚いている囲炉裏へと近寄った。
その時だった。
強風が戸を揺らすような、激しく戸を叩く音が響く。戸の建てつけが悪いのか、入口の戸はかなり激しく揺れ、大きな音をたてた。
「何だ……？　風か」
音の原因は、雨とともに強まってきた風のせいだろうと海棠は決めつけたが、
「誰か……！　誰か、いませんか……！」
音とともに聞こえてきた、今にも風にかき消されそうな声によってその可能性はゼロになった。
「あ、はい！　今開けます！」
海棠は先ほど入って来たばかりの戸へ駆け寄り、軽くわらじをはくと大きなきしむ音を立てながら木戸を開けた。そこにいたのは、
「あの……！　入江さんのお宅で、間違いありませんよね？」
十代半ばほどに見える見知らぬ少年だった。笠もかぶっていないため、その短い黒髪はぺったりと頭に張り付き、毛先からは水が滴り落ちていた。
「そうだが……。何の用だ？」
訝しげに海棠はずぶぬれになりながら息を切らしている少年を見つめる。
「とにかく……！　彩乃さんが、大変なんです！」
「彩乃がっ？　彩乃が、どうしたんだ！」
海棠は突然出てきた妹の名に、目を見開き声を荒げた。その声の

大きさに驚いたのか、囲炉裏の前に座っていた蓬も玄関前へと出てきた。
「彩乃さんが……稽古中に突然、倒れてしまって……。とにかく、発熱がすごいんです……！　それで、僕はお家の方を呼んでくるようにと……」
「分かった。父様」
海棠は振り返り、土間には降りず土間より前に立っている蓬へと声をかけた。
「あぁ。分かった。私はここで待っている。誰もいないときに、仕事の依頼が突然来ても困るしな。それに、海棠なら一人でも大丈夫だよ」
海棠は頷くと、笠もかぶらずにわらじではなく下駄をはいて外へと出る。
「案内を頼む」
「はい！」
海棠と少年は頷きあい、さらに強さを増して降り出した雨の中を駆けだす。
雨は容赦なく二人を打ち、服に水を吸わせていく。ずぶぬれになって重さを増す服に、体温と体力を奪われながらも二人は稽古場へと急ぐ。
「彩乃……」
妹の名を呟いた海棠は、嫌な予感に胸を激しく打つ心臓を抱えながら、眉間に深い縦皺（たてじわ）を刻んだ。

scene 14

入江家から走って十五分ほどの場所に、稽古場はあった。
そこはいかにも道場という風格のある、木造りの立派な建物だった。が、建物の鑑賞などをしてる余裕も暇も今の海棠にはない。
びしょ濡れになった海棠は、道場に入ったところで入口にいた人たちにタオルを渡され、同じくタオルを受け取っている、海棠を案内した少年に「こちらです」と案内される。海棠は導かれるまま、稽古をするための広い板張りの間をぬけ、扉によって仕切られた奥まった廊下へと歩を進める。窓のない薄暗いそこは、すみのほうでポツリポツリと頼りなげな蝋燭の炎が燃えていた。
海棠を案内していた少年は一つの扉の前で立ち止まり、そこを手で示した。
「彩乃さんがいるのはここです」
少年ができる限り音を立てないよう、静かに戸を開く。部屋の中は、闇を好み光を拒んでいるかのように一本の蝋燭しか光源は存在していなかった。
扉が開かれた部屋の中。そこには、数人の女性たちが一つの布団を取り囲むようにして座っており、部屋の隅にはその部屋では一人だけの男性が、気難しい顔をしてあぐらを組んで座っていた。
少女女性たちが囲んでいる布団の上。そこに、彩乃はいた。
「……おや。君は？」
海棠に皆の視線が集まる中、部屋の隅に座っていた男性が声をかけた。
見た感じ、四十代前半というところか。黒髪は短く刈りあげられており、筋肉隆々というわけではないが、しっかりと筋肉の付いたいかにも武道をしていそうな男性だった。
海棠はその場に音もなく正座すると、丁寧に両手をつけて深々と腰を折る。その背後からは、少年が静かに戸を閉める気配が感じら

れた。
「某は、彩乃の兄の海棠と申します。この度は、妹が大変ご迷惑をおかけしました」
海棠は頭を下げたまま、畏まって言う。
「まずは海棠殿、その頭を上げてください。それから、一つお聞きしてもよろしいかな？」
「はい」
海棠は頭をあげ、男をまっすぐに見る。
「彩乃殿は？呪われし瞳の子？と聞いたが、今までもこのようなことはあったのかね？」
「はい。突然倒れ、発熱することは度々ありました」
「では、対処法も分かるのだな？」
「承知しております」
海棠は頭を小さく下げると、再び音もなく立ち上がると彩乃の左側の枕元へと移動した。
彩乃を取り巻いていた人たちは海棠のために左右へと寄る。蝋燭のほのかな明かりのもと、海棠は少女女性たちが寄ってできた隙間に膝をつく。彩乃の顔は蝋燭によって僅かに朱に染め上げられていたが、実際発熱によってその顔は赤く火照っていた。額にはたくさんの汗の玉ができているが、できた途端にすぐさま水にぬれたタオルを持った女性によって吹き取られる。火照った頬とは反対に、僅かに開けられた唇はすっかり血の気を失っている。唇の隙間からは、苦しげなうめき声が漏れる。
「彩乃……。もう少しの辛抱だからな」
海棠は熱にうなされている妹を励ますように囁くと、周りに座る女性たちに彩乃の周りから離れてもらうようにことわりを入れる。
女性たちが心配げに彩乃を見つめながらも、彩乃から離れたことを確認すると海棠は手を正面にかざし、ゆっくりと顔を伏せ影を落とす。漆黒の瞳はうっすらと閉ざされ、口は何を言っているのか分からないほど速く小さく動く。その声は、静寂と沈黙という言葉が

とてもふさわしいこの部屋にいる者にさえ、全く聞こえない。
やがて、
「我が僕、水の精霊の水蘭（ウンディーネ）（すいらん）よ。ここに形を成し、我が力となれ」
海棠は声に出して静かにそう言う。
明らかに、小さなころより詠唱を唱える時間も短くなっている。
海棠の言葉とともに彩乃の右側の枕元に小さな水の渦が起きた。
部屋にいる全員の視線を浴びながら、それはみるみる人ほどの大きさになり、ついには人の形へと変化した。
「っ――」
部屋の中にいる人々は、水からできた人物――ウンディーネを見た途端、一斉に息をのんだ。
ウンディーネはこの世のものとは思えぬほど神々しく、誰もが目を瞠（みは）らずにはいられない美貌を持っている。
暗闇に沈む部屋の中で眩しいほど煌めく水色の髪は光の粒子を纏っているかのようで、吸い込まれてしまうそうなほど深い紺碧の瞳は皆の視線を集めてしまうような魅力に溢れていた。肌は透き通るように白く、しかしそれが不健康に見えることは決してないのだった。
レースのほどこされた質素なワンピースは、よりウンディーネの美しさを際立たせる。
ウンディーネ――水蘭は、自分の目の前に座る、主人の海棠を微笑みながら見つめる。
「水蘭。彩乃の体温を下げてくれ」
「仰せのとおりに」
澄んだ音を奏でる鈴が震えるかのような、涼やかで儚い響きを持つ水蘭の声音。海棠への返答とともに、水蘭はその細長く白い手の平を彩乃の額にそっと当てた。一体何を始めるのかと海棠以外のものが注目する中、水蘭の手の下の彩乃の額が青白く発光しだした。
光は、部屋を隅から隅まで照らせるほど明るい。
青白い発光とともに、彩乃の口からもれる苦しげな息も少しずつ

穏やかになっていく。水蘭はそのまましばらく彩乃の額から手を離さなかったが、彩乃のうめき声が和らぐとそっと額から手を離した。同時に、青白い光も音もなく消え去る。

とその時、

「……う、ん。っ――あ、れ……」

固く閉ざされていた彩乃の瞼が、うっすらと持ち上げられた。その漆黒の瞳はまだ焦点が定まっていないのか、虚ろではあったが。

やがてその瞳に光が宿り、視線が枕元に座る海棠へと向けられる。

「あ、兄者……。一体、何故、ここに……？」

普段の声からは想像もつかないようなかすれた声で、彩乃は海棠に問う。海棠はそんな妹の顔を、ほっとしたような笑みを浮かべて見つめる。

「彩乃が稽古の途中で突然倒れたと聞いてな。某が慌てて駆け付けたんだ」

「あぁ……。そうだった、のかい……」

彩乃は視線をふらりと彷徨わせ、今度は海棠の反対側に座る水蘭の方へ向けられた。

「あ。久しぶりだね、水蘭」

「お久しぶりでございます。彩乃様」

水蘭は誰がどう見ても美しいというであろう、優美で可憐な笑みを浮かべながら、軽く瞳を閉じ膝に両手を置いて小さく頭を下げた。

ｓｃｅｎｅ　１４（後書き）

ふふ～♪

私、実は四精霊の中で一番ウンディーネが好きなんですよね～。だからウンディーネはメッチャ美人に描写しました。つまり、エコひいきです（笑）。

scene 15

彩乃もその口元をうっすらほころばせる。
軽く頭を下げている水蘭が顔を上げると同時に彩乃は視線を横へ移動させ、視界に入った海棠の姿を静かに見つめた。
「兄者。ありがとう、ね。あたしは、いつも兄者に、助けられて、ばかりっ――」
言葉を最後まで言い終わらぬうちに、彩乃は苦しげに咳き込み始めた。
「彩乃ッ！　大丈夫か！？」
「あっ、あぁ……。だ、いじょうぶ、だよ」
彩乃は必死に咳を我慢しながら、やっとそれだけ言う。
「水蘭」
海棠は彩乃から向かいに座る水蘭へと視線を上げた。水蘭は背筋をまっすぐ伸ばしたまま、姿勢良く正座をして海棠を見返した。
「彩乃の喉をうるおしてくれ。少しは楽になるだろうから」
「承知いたしました」
水蘭は「失礼いたします」と瞼を伏せながら彩乃に告げ、瞼を閉じた彩乃の喉の上にそっと手を置いた。水蘭の白い手が彩乃の喉に重なるとともに、先ほどと同じく水蘭の手の下が青白く発光しはじめる。今回はすぐに水蘭も手を引き、同時に光もすぐにおさまった。
「――彩乃、大丈夫か」
海棠は彩乃の顔を覗き込むようにして見つめる。瞳を閉じたまま彩乃はゆっくりと深呼吸をし、やがて緩やかな動きで瞼を上げた。
「……あぁ。ありがとう。おかげで、すごく喉が楽になったよ。本当に迷惑ばかりかけてすまないね。兄者」
「何を言っているんだ。これくらいのこと、迷惑でも何でもない。それに某は水蘭を呼び出しただけであって、ほとんどの事は水蘭が

したことだからな」
海棠は彩乃に労わるような笑みを向けながら、「まだ体調も完全に治ってはいないのだから、ゆっくり休め」と言った。彩乃も自分を見つめる妹思いの兄に微笑みかけ、すっと瞼を下ろした。
やがて規則的な寝息が聞こえ始め、それと同時に海棠は大きく息をついた。そしてそれまでその顔に張り付けていた、何の不安も心配も見せない笑みを剥がし、その下から海棠の本当の気持ちを表した表情――絶望と悲嘆に暮れるような悲しげな顔――を露わにした。
海棠が悲しげに顔を歪める中、部屋にいた者たちは一斉に感嘆と安堵が混ざったような吐息をはきだす。
その中から代表するようにして、部屋の隅に座る男性が小さく声を上げた。
「……すごいな。魔術とは本当に万能の力なのか」
男は感心するように海棠と水蘭を見つめる。――明らかにその視線はほぼ水蘭に向けられていたが。
男の問いを聞いた海棠は男へと向き直ると、ゆっくりと首を振った。
「そうではありません。簡単な治癒はできますが、魔術といえど彩乃の病を完全に治すことは不可能です」
海棠は視線を膝の上に落とすと僅かに首を振り、悲しげに口を小さく動かした。その口調には憂いや無念や絶望などといった、負の感情ばかりがにじんでいる。
そんな海棠の悲愴をくみ取ってか、部屋の隅に座る男も顔を伏せ声のトーンを落とす。
「やはり、魔術でも治せぬものはあるのか……」
男の言葉に海棠は俯けていた視線を上げると、
「いいえ」
小さく首を振りながら否定の短い言葉を口にした。その言葉に驚いて、男は先ほど伏せた顔をすぐに上げる。その視線は、深い悲しみに溺れているにしては明るくまっすぐな、まるで希望を見つめて

いるかのような光を宿した海棠の瞳に向く。
「それは、今の君には使えない魔術なのかな？」
「――はい。しかし、手に入れるつもりです。それを手にすることはとても難しいかもしれません。……いいえ。とても言葉では言い表せないほどつらく、厳しく難しいことでしょう。しかし、某は彩乃の病を絶対に何があっても治したいのです」
「……。そうか」
男は布団の上ですやすやと安定した寝息を上げながら眠る彩乃を見て、優しく静かな微笑みを浮かべた。
「彩乃殿は、良い兄をお持ちのようだな」
「いえ。某は、兄として当然のことをしているだけにすぎませんから」
微笑みながら彩乃を見つめる海棠。その瞳には、悲壮の光が確かに煌めきを放っていた。

「……父様」
「うん？　何だ、海棠。こんな夜半にそんな真面目な顔をして」
「某は、決めた。これ以上、彩乃に苦しい思いをさせるわけにはいかないんだ」
「……というと、やっぱり？あれ？に頼るつもりか？」
「あぁ。もう頼りの綱は？あれ？しかないんだ」
「しかし……何もお前が危険な目に会う必要はない。縁起でもない話だが、お前がそうすることで私はお前と彩乃の二人を失ってしまいかねない。それに――もし？あれ？が手に入らなければ、お前は彩乃の死に目に会うことはできなくなるんだぞ」
「縁起でもない話はなしだ。これは某の意思だ。もうあと四年で彩乃も二十歳になってしまう。もっと速く出発するべきだったのだろうが、魔術の完全な取得までに時間がかかりすぎてしまった。某は、もうこれ以上待つことはできない。――たとえ某が彩乃の死に目に立ち会えなかったとしても、可能性がある限り彩乃を救うために某

は？あれ？を求める」
「海棠。お前はもっと自重（じちょう）したほうがいい」
「そんなこと、分かっている。しかしもう――時間がないんだ。時間は某や彩乃のために、止まってくれはしない。残酷なことにな」
「……。本当に、行く気か？　？あれ？を見つけるのは、そう容易いことじゃないぞ」
「それは百も承知している」
「――そうか。そんなに決意が固いなら、私は止めない」
「あぁ。ありがとう、父様――」

scene 16

快晴。太陽を東に置く雲ひとつない空は、凝視していると目が痛くなりそうなほど青い。

「……」

海棠は重くも暗くない、寧ろ清々しさにあふれた沈黙を纏いながら、床にあぐらをかいて大きなリュックの前に座り、自室で荷造りをしていた。海棠は一つひとつその手にとって確認しながら、大きく開かれたリュックの口の中に荷物を丁寧に入れていく。

「……彩乃。必ず某が病を治してやるからな」

海棠は漆黒の瞳に、決意と信念を秘めたようなゆるぎない光を帯びていた。その口調はいつものように涼やかで柔らかな響きを含んでいるが、数多の修羅を駆け抜けてきた者のような恐ろしいほどの強さがそこには滲んでいた。

海棠は男にしては細く白い手で、リュックに入れる最後の荷物――文庫本サイズの小さな古めかしい魔術書――をリュックの側面に付いた小さなポケットにゆっくりと収める。本がポケットに入りきり、海棠がポケットをボタンで閉じる。

「……ついに、某はゆくのか……」

海棠が物思いにふけるように視線をぼぅっと彷徨わせ始めた時、

コンコンコンッ

家の玄関の戸を素早くも歯切れよく、鋭い音を立てながら叩く音がした。

「うん？　朝から客か……？」

海棠は僅かに腰を床から浮かせる。

「はーい。今開けます」

海棠の自室とは木戸一枚で仕切られている居間から、蓬の呑気な声が上がる。ゆっくりと立ち上がった海棠の耳に、ゴトゴトと鈍い音を立てながら木戸が開く音が届く。

首をかしげながらも、海棠は自室の戸をあける。海棠の部屋は居間を挟んだ玄関の正面にあるため、戸を開ければ瞬時に玄関を見ることができる。

部屋から顔だけ出した海棠は、

「っ――」

一瞬で言葉を失い、黒目がちな双眸を大きく見開いた。

海棠の視線の先にある、大きく戸が開かれた玄関の前。そこに――美麗な少女が立っていた。

「……」

海棠は自分の鼓動が速まっていることにも気付かずに、自然と開いた口も閉じぬままに呆けたような顔で金髪の美しい少女を見つめる。そんなアホ面丸出しの海棠を、玄関脇に立つ蓬はニヤニヤと意地悪く見つめる。

「？」

玄関前に立つ少女は、蜜色の髪を揺らしながら小さく首をかしげて、きょとんと海棠を見つめる。少女の真っ赤な紅を引いているふっくらとした唇は、小さく微笑んでいる。

蜜色の髪は丁寧に結いあげられ、そこには涼しげな音を立てる綺麗なかんざしが飾られている。髪と同色の大きな瞳は澄んだ真っすぐな光を宿す。

少女の姿を固まったまましばらく見つめていた海棠は、突然何かに気付いたかのようにはっと息をのんだ。

「あ……。え、ま、まままさか、ユーフェミア、か……？」

「はい。そうですよ。そうですが……どうしたのですか？　海棠。とてもぼうっとしていらっしゃるようですが……」

「えっ？　あ、いや……その……」

海棠は裏返った声でどぎまぎと言葉を発していたが、やがてその言葉を濁す。耳から首まで真っ赤になった海棠は、ユーフェミアを見ていられなくなり視線を床へと落とす。

「ユーフェミアちゃんがあまりに綺麗だったから、照れているんだ

よ」
何の恥ずかし気もなくそう言ったのは俯いている海棠ではなく、その姿をにやにやと見つめる蓬だった。
海棠とユーフェミアの視線を一気に集めた蓬は、ふふんと小さく笑い声を上げる。
「なっ……！　父様ッ！！」
「そうだったのですか？」
ユーフェミアはきょとんとしたまま、視線を蓬から海棠へと移す。海棠は怒っているのか、戸惑っているのか、恥ずかしがっているのかよく分からない表情をしてユーフェミアと蓬の間で視線を行き来させる。
「えっと……。その、ユーフェミア……その……えっと……それは……」
海棠は顔を伏せて、もごもごと呟く。
ユーフェミアは再び俯いてしまった海棠を見つめながら、柔らかく微笑んだ。
「――ありがとうございます」
感謝を示すその一言に、海棠はぱっと顔を上げた。その頬は、まだ朱を帯びている。
「綺麗と思って下さっていたのなら、それはとても嬉しくありがたいことです」
「……え。あ、あぁ。うん……」
海棠は僅かに開いた口から、やっとそれだけ言葉を発する。
「ふふん。初々(ういうい)しいねぇ」
玄関脇に立つ蓬は、小さく笑いながら海棠を見つめる。その黒い瞳には――僅かな憂いと焦燥が滲む。
「とっ、ところでユーフェミア。今日はまた、何でそんな格好を……？」
海棠は自室から出て、後ろ手に戸を閉める。居間に彩乃の姿はない。どうやらまだ床の上で夢を見ているらしい。

「そうなのです。私は、海棠と彩乃に伝えなければならないことがあって、ここへ来たのです」
「伝えなければ、ならないこと……？」
海棠は、ふいに影を落としたユーフェミアの顔を見て、ぎゅっと強く眉を寄せた。先ほどのものとは違う胸の高鳴りが、海棠の身体を満たす。
ユーフェミアの赤い唇が、そっと開かれる。
「実は私……、ここを去らなければならないのです。なので、とても仲良くしてくれた海棠と彩乃に、そして大変お世話をおかけした蓬さんに――お別れの挨拶をするために、ここへ来たのです」

scene 17

「……え？」

海棠は、一瞬意味が分からなかった。というより、脳が、身体が、ユーフェミアの言葉を理解してはいけない、理解したくもないと、拒絶しているかのようだった。

「……な、何故、だ？」

海棠の身体が、驚愕と混乱と爆弾発言の衝撃によって不安定に傾ぐ。海棠はよろめく身体を支えようと、先ほど閉めた背後にそびえる自室の木戸に背をあずけた。木戸は鈍く低い音を立てながら、僅かに揺れる。

海棠は視線を不安げに四方へ彷徨わせ、手に大量の汗を滲ませ、額にはじっとりと脂汗のようなものを浮かべた。

「それは――」

ユーフェミアが憂いの色を浮かべた瞳を、そっと伏せながら口を開いたときだった。

「その説明は、わたくしからさせていただきます」

金髪金眼の少女の後ろから、海棠には聞き覚えのない女性の声が上がった。

氷でできた白刃のような冷たい鋭さと、一点の濁りもない水のように澄んだ響きをした声だった。

「ユーフェミア様――いいえ。主様。ここはわたくしがご説明をいたします」

ユーフェミアの後ろから現れたのは、くノ一の格好をした長身の女性だった。瞳は黒くややつり上がって鋭く、やや茶色を帯びた黒髪は女性にしてはとても短い。

「お初にお目にかかります。わたくし、この度？秘宝？の守り主となられました月倉ユーフェミア様の護衛兼秘宝の守り手をいたします、武政美桜と申します」

美桜と名乗った女性は慣れた動きで綺麗に四十五度腰を曲げ、丁寧にお辞儀をした。
「秘宝の守り主……。まさか、あの、森の中の……？」
海棠ははっとした声とともに、木戸へあずけていた身を前方へ乗り出す。漆黒の双眸はたくさんの感情が入り混じっているかのような複雑な色を浮かべながら、目玉が飛び出てしまいそうなほど大きく見開かれる。
「はい。左様でございます」
美桜は機械的な口調で、淡々と事実を明々白々に答えた。
「しかし……何故だ？　現在守り主である方は――」
「現在の守り主――いや、もう元守り主、というべきかな。秘宝の守り主であった白月閃花（しらつきせんか）さんは先日、心ノ臓の病によって享年九十七歳で他界されたよ」
それまで緊張感の欠片も持っていなかった人物――蓬が、書かれた文章を淡々と読むようにして言った。
蓬の言葉に、海棠は憂いに顔を歪め、ユーフェミアと美桜は蓬の発言に驚いた。
「っ……。貴殿、名は確か蓬といいましたね。何故、そのことを知っておられるのですか。その事実は、まだ閃花様の身近な人しか知らない情報だというのに……。貴殿は情報屋なのですか？」
美桜の驚きを隠せぬ言葉に、蓬は大仰な仕草で肩をすくめる。
「まさか。私はただの魔術師兼時見の中年オヤジさ」
蓬はうっすらと笑みを浮かべる。
「そうでしたか……。貴殿が時見だというのならば、納得できます」
美桜は僅かにトーンが落ちた声で蓬に言う。
海棠は信じられないという風に頭を左右に振り続ける。美桜のそばに立つユーフェミアは憂いに顔を歪め、瞼をそっと伏せる。
「しかし……。しかし、何故、だからといってユーフェミアが守り主にならなければならないんだ？　白月様との関係性は一体どこにある？」

海棠は困惑しきった様子で視線を定位置に定めぬまま、慌てたような口調で美桜に問う。

「ユーフェミア様は姓は違いますが、閃花様の里子であられます。閃花様の家族や縁者の方々が何処で何をしているのかも、ましてや実際に家族や縁者がいるのかも不明ですので、自然に次期守り主はユーフェミア様となるのです。またユーフェミア様は中心都市に住んでおられますが、特別に秘宝を守っている屋敷への出入りを許されていました。また、秘宝の知識も閃花様より学んでおりますので、ユーフェミア様ほど次期守り主にふさわしい方はおられないのです」

「そ……んな……」

頭の中の整理ができず、混乱したままの海棠は未だに話が信じられずにいた。

秘宝とは、この瑞穂の国の平和を長年保っている魔力の宿った宝石の事である。その秘宝が壊されたり、盗まれたりして瑞穂の国の平安が乱れないように命をかけて守るのが、守り主の役目。そしてその守り主と、守り主とともに秘宝を守る者――俗に守り手と呼ばれる者――がいる。守り手は武術に優れ、守り主とこの国に忠誠を誓うことができる者でなければならない。また、屋敷の場所を知られないようにするためにも、守り主と守り手はそれぞれ一人ずつと決まっている。それは、秘宝を狙う者に捕まったとしても口を割るものが少数で済むからという理由でそうなったのだが、世間では大人数であまり派手な行動を起こさないようにするためという理由で通されている。

そして肝心な秘宝は、その場所が特定されないようにするために、広い森の中の屋敷で守られている。その秘宝が何なのかは、守り主と守り手以外には誰も知らない。

海棠の中にある秘宝についての知識が、一気に脳内から溢れだした。

守り主と守り手が一人ずつである本当の理由については、裏ルートからたまたま耳にした情報だ。それ以外の情報は、瑞穂の国の国

民の大半が知っているであろう知識である。
海棠の頭の中から、秘宝についての知識と言う名の濁流が流れ出る。それと同時に、これからユーフェミアがどうなってしまうのかということが分かっている自分を非難するかのように、炎のように真っ赤な怒りの花が濁流を埋めつくさんばかりに咲く。
――これからユーフェミアは、秘宝と瑞穂の国の平和を守るために、その命をささげるのだ。それはもう、人柱と言っても過言ではない。
海棠は運命を呪い、きしむ音が立つほど奥歯を強く噛み締めた。
「海棠。大丈夫、ですか？」
ユーフェミアの心配げな眼差しと声音に、海棠ははっと我に返った。
「あ？　あぁ……。某は、大丈夫だ。しかし、ユーフェミア……。おぬしは、どうなんだ……？」
「私、ですか……？」
ユーフェミアは目を丸くして、きょとんと小首をかしげた。まるで、自分は守り主になることは当たり前のことで、何故海棠が自分のことを心配しているのか心底分からないという風に。
「私は大丈夫ですよ。確かに……閃花さんが永眠につかれてしまったことは、言葉では言い表せないほど悲しいですが……その後を継ぐことができるのならば、これ以上の幸せはありません。それに――海棠や彩乃たちの住むこの地の平和を私は維持したいと願っていますから……」
ユーフェミアは屈託なく笑い、美しい蜜色の瞳に柔らかな光をたたえた。しかし――
――海棠はその瞳に入り混じる、不安と憂いの色に気付いていた。

scene 18

「さて。長居はできません。主様。お別れのご挨拶を」
残酷とも思える美桜の冷たい声が、僅かな間流れた沈黙を断ち切る。
海棠は無表情の手本のような顔をした美桜を、睨みつけるように一瞥した。
「……そう、ですね」
ユーフェミアは悲しげに、寂しげに頷く。
「あの……彩乃はいますか？　彩乃にも挨拶をしなければなりませんので……」
「あ。あぁ。彩乃は……多分、まだ寝ているよ。――彩乃は、早起きが苦手なんだ」
彩乃が昨日倒れたなどと言ってユーフェミアに余計な心配をさせないためにも、海棠はその目鼻立ちの整った顔に笑顔を貼り付けて、ぎこちない声で苦手な嘘を言った。
「そう、ですか……」
ユーフェミアは申し訳なさそうに瞼を伏せ、思案する。
ユーフェミアの本心としては永遠の別れかもしれないのだから、彩乃に挨拶くらいはしていきたいのだろう。しかし身体が弱く早起きが苦手らしい彩乃を無理やり起こすのも悪い気がして、自分から彩乃を起こしてきてほしいとは言いにくい。
ユーフェミアは顔を歪め、しばらく心の中で葛藤する。
開き切った戸口から春の暖かいそよ風が家の中へと舞いこみ、そこにいる四人の髪を小さく揺らす。木戸は風によって揺れ、小さな音をたてた。家の裏手にある山でうぐいすが軽やかに鳴き、沈黙が降り注ぐ場にやけに大きく響き渡る。
「――えっと。良ければ、起こそうか？　彩乃を」
困り切っているユーフェミアを助けようと、海棠は思い切って口

を開く。
ユーフェミアは海棠の言葉に顔をふっと上げ、蜜色の瞳で真っすぐに海棠を見つめる。そのままこくりと小さく頷くと、僅かに口を開けて息を吸い、
「そんなこと、許さないよ！」
ユーフェミアは、そのまま言葉を発することはできなかった。
いつかどこかで聞いたことがある言葉が、あの頃より少し低くなった声音で静まり返っていた場所に大きく響いた。
「えっ――？」
ユーフェミアは言葉を発しようと開けていた口をそのままに、小さな疑問の声をもらした。
先ほどの言葉に驚いたのは、ユーフェミアだけではなかった。自室の前に立つ海棠も、玄関先にユーフェミアとともに立つ美桜も双眸を見開いて声の上がった方向に視線を移した。ただ一人――玄関脇に立つ蓬だけは、
「ふふん。舞台の幕が上がったな」
無邪気な子供のように目を輝かせて、先ほどの声の主――彩乃を見つめていた。
「……別れるなんて、そんなことあたしゃヤだよ！」
彩乃は激しく首を振り、駄々をこねる子供のような口調で言う。
「彩、乃……」
海棠は驚いたように、突然隣の部屋から現れた彩乃を振り向く。
四人の視線は一気に彩乃へと集まり、その視線をものともせず彩乃はただユーフェミアだけを見つめていた。
その立ち姿は凛々しいとも威風堂々としているとも言える。昔、ユーフェミアをいじめていた少年たちを蹴散らしたときのように、今の彩乃は相手を圧っするような雰囲気を纏っていた。
「彩乃……。これは、仕方のないことなのです。貴女には、とても申し訳ないですけれど……私は、行かなければならないのです。これは、私の役目であり決意なのですから」

「あたしだって！　あの日、ゆうちゃんを守るって決めたんだ……！　あたしはこの命をかけてでも、ゆうちゃんを守りたいんだよッ……」
「彩乃……」
ユーフェミアは胸に右手を当て、叫ぶようにして言った彩乃を申し訳なさそうに、そして悲しそうに見つめた。
彩乃は強く、血がにじみ出るほど強く唇を噛み、ユーフェミアの姿から決して目を離さない。
「貴殿は一体何を考えているのですか？　この国の平和を疎(おろそ)かにしようというのですか？」
美桜の呆れたような声と視線が、凛とした表情で立つ彩乃に浴びせられた。彩乃は美桜を、鋭い眼光を浮かべた瞳で睨み返す。
「それは違うよ。あたしは――ただゆうちゃんを守りたいんだ。ゆうちゃんが危険にさらされるようなことがあれば、あたしは命をかけることさえ惜しみはしない」
彩乃の声は低く、まるで相手を脅しているかのようだった。
しかしそんな彩乃の声に怯むような姿は見せず、美桜は不敵とも思える笑みで彩乃を見返した。
「ほう。それはつまり、ユーフェミア様とともに秘宝のある屋敷に住み、秘宝の守り手となることも厭わないということですか？」
美桜の挑発するような、馬鹿にしたような声音。
その言葉にユーフェミアは蜜色の瞳を大きく見開き、海棠は怒りと驚きに顔を歪めた。
「彩乃……！　そんな役割、負うものではない。おぬしは身体も悪いのだぞ！　昨日も稽古中に倒れて寝込んでいたというのに……ッ！」
海棠はそう言ってから、しまったと一瞬で口をつぐむ。
海棠の発言を敏感に聞きつけたユーフェミアは、さらに双眸を大きく開いた。
「彩乃は、昨日倒れたのですか！？　大丈夫だったのですか？　今

は、大丈夫なのですか？　どこか痛いところはありませんか？　熱は？」
　おろおろとしながらも、ユーフェミアは立て続けに彩乃へ質問を浴びせかける。
「ゆうちゃん。そんなに言わなくても、あたしは大丈夫だよ」
　彩乃は微笑を浮かべ、安心させるように穏やかな瞳でユーフェミアを見つめる。
「そう……ですか」
　ユーフェミアは僅かに上がっていた肩をすとんと下げ、しかしその瞳にはまだ少し不安の色が混ざっていた。
　彩乃は表情はそのままに、視線をユーフェミアから近くに立つ美桜へと移す。
　二人の視線がぶつかり合う。二対の黒い瞳はどちらも鮮烈に燃える炎の様な強い光を灯し、相手を閃く刃物のような眼光で射る。
　彩乃はその微笑を不敵な笑みへと変化させる。美桜は彩乃の笑みを、冷たい瞳で静かに威圧するように見つめ続ける。
「おい、そこのあんた。……確か、美桜だっけ」
「はい。何でしょう」
「さっきまでの話を聞く限り、ゆうちゃんと秘宝の守り手はあんたらしいじゃないか」
「そうですが。それが何か」
　すましたような美桜の顔と声。彩乃はその笑みを不敵なものから獰猛なものへと一瞬で変え、美桜を見すえる。
「じゃあ、あたしがあんたより強けりゃ、その役目をあたしがしてもいいってことだよね？」

scene 19

「なっ……！」
海棠は驚きに絶句し、
「！」
ユーフェミアは目を瞠り、
「……ほう。それは面白いですね」
美桜は口の端を釣り上げて歪んだ笑みを浮かべ、
「……」
蓬は、くすりと小さく笑った。
彩乃は標的を視線で捉えるようにして、双眸を眇める。
僅かな間の沈黙。沈黙は人々を容赦なく、静かに圧する。
沈黙の中。海棠はまるで自分の問題であるかのように不安げに眉を寄せ、心配げに彩乃を見つめる。
が、そんな兄に彩乃は少しも目をくれようとはしない。その視線はただ一人――武政美桜にのみ注がれる。
「彩乃！　気持ちは分かるが、そのようなこと――」
「兄者！　少し黙っていてくれないかい。これは、あたしの問題なんだっ――」
不安げに海棠が見つめる中、彩乃は美桜を見つめたまま海棠へと声をかけた。低いアルト声が大声で海棠の発言を阻止し、そして、
「っ……ゴホッ！！」
唐突に、その言葉が止まった。彩乃はふいに身体を折り曲げ、口元を右手で押さえると咳き込み始めた。しかもその咳は普段のものとは違っていた。普段の乾いたようなものではなく、もっと重く、喉の奥に何かが詰まっているかのような――
嘔吐か吐血をする間際のような。
「彩乃ッ！」
海棠が妹の名を叫んだ刹那、

「ガハッ！」
手で塞がれた彩乃の口から――真っ赤などろりとした液体が溢れだす。
彩乃の口からこぼれ出した血は床へと落ち、その上へ不気味な跡を形成し始める。液体と言うにはどろどろとしすぎている血は、床や彩乃の足を真紅に染め上げてゆく。
「彩乃！！」
再び、海棠の叫び。
彩乃は血を吐きながら呻き、力なく膝を折る。海棠はすぐ傍にいる彩乃へと素早く近寄り、その背中を撫でる。
「彩乃――」
床に座り込んだ彩乃を、ユーフェミアは今にも泣き出しそうに瞳を潤ませて見つめる。
「――」
美桜は双眸を鋭いナイフのように細め、真っ赤に染まる少女を見つめる。
彩乃の口から流れ出していた血はやっと止まり、血に汚れた口で荒い呼吸を数回繰り返した後、声を出すためにゆっくりと唇を持ち上げた。
「兄者……。大丈夫だよ。本当さ。だから――行かせて、くれ……」
「馬鹿者！　何を言っているんだ！！　今の自分の状態が分かっているのかッ！」
海棠は目をむいて叱責する。彩乃は血色の悪い顔をゆるりと上げ、大声を上げた海棠を見る。
海棠は叱りつけたようには見えない穏やかな表情で、血に顔を汚した彩乃を見つめる。
「彩乃……。ユーフェミアを守りたいという気持ちは分かる。しかし、これ以上……無理をするな」
海棠の穏やかではあるが、しっかりとした力強い声。彩乃は僅かに瞼を伏せて俯き、血にまみれた右手を小刻みに震えるほど強く握

りしめた。
「っ――。あたしは、あたしが正しいと思ったことをするだけだ――」
呟きとも囁きともとれる、彩乃の小さな声。それとともに彩乃は握りしめたこぶしで乱暴に口元をぬぐった。口元についていた血は、僅かに手へと移動する。
彩乃は海棠が驚いたように、心配するように見つめる中、しっかりと床に足をつけて立ち上がる。その足は立ち上がる間、僅かもふらつきはしなかった。
彩乃は拭ったもののまだかなり血で濡れている口を開き、爪の間まで血に汚れている右手の人差し指を刀の切っ先であるかのように美桜へと突き出した。
「美桜！　あたしと、勝負しな！　あたしは――月倉ユーフェミアを絶対に守るんだ！！」
海棠は彩乃の行動に再度絶句し、戸惑うような瞳で玄関の脇に立つ蓬を見た。蓬は先ほどから一ミクロンも立ち位置を変えずに、うっすらと微笑んだ。その笑みは、普段見せる子供の様なものではなく、落ち着いた大人びたものだった。
「彩乃」
静かな声が、勇ましい少女の名を呼ぶ。彩乃は自分の名を呼んだ人物――父である蓬へ、ゆっくりと視線を向ける。
「何だい。父上」
「本当に、お前はその選択でいいんだな」
「あぁ。絶対に、後悔はしないよ」
「これから先、身を裂かれるほどの苦しみや辛さがあっても、その思いは変わらないか？」
蓬の鋭い瞳。彩乃は視線を少しもそらさずに、その強い眼光を宿した漆黒の瞳を見すえる。
「――あぁ」
「ユーフェミアちゃんを、絶対に何があっても守り抜くことがきる

か？」
「？できる？んじゃないよ。？やってみせる？んだよ」
彩乃の顔に、僅かな笑みが浮かぶ。その笑みを面白そうに眺める
蓬は、静かに瞼を下ろした。
「そうか……。なら、私は止めない」
蓬は瞼をそっと持ち上げる。その瞳を、海棠が驚愕の視線で見つめる。
「父様！」
絶望の滲む海棠の顔を見ながら、蓬は双眸を細める。その表情は厳しく、いつもの幼さと緊張感の無さは欠片も感じられない。

scene 20

神妙な面持ちを崩さぬまま、蓬は落ち着いた声を上げる。
「海棠。いつであれどんなときであれ、進む道を決めるのはその道を進む人間自身だ。彩乃の道は、彩乃が決める。――その道に干渉する権利は誰にもない」
「し、しかし……」
「しかし、はナシだ。他人の人生を妨害したり、反対したりすることはたとえ家族であろうと許されない行為だ。ただ人生を干渉してよい唯一の例外は、その人物が己の選んだ人生を進むことで人様の迷惑になってしまう場合だけだ」
「……」
海棠は苦しげに胸を上下させて空気を飲み込む。蓬は冷静な表情を崩さないまま、海棠の悔しげで悲しげな表情を静かに見つめる。
「――海棠。？砂漠の薔薇？の決まりを、お前は知っているか？」
蓬は一瞬、その黒い瞳を閃かせる。
身体のあちこちに血がこびり付いてしまっている彩乃は何故こんな時にそんなものの話が出てくるのかと首をかしげる。背後から吹いてくる風に蜜色の髪を揺らしているユーフェミアは、自分しか知らない大切な秘密がバレてしまったかのように、ぎくりと身体を震わせる。ユーフェミアのそばで腕を組んで立つ美桜は、視線だけを蓬に向けると双眸を刃のように鋭く細める。床に膝をついている海棠は、すっと息をのむ。
「……私欲のために行使してはいけないことと、死者の蘇生を望んではいけないこと、だ」
海棠の神剣な答えに、蓬は満足そうに大きく頷く。
「その通り。他人の人生についても、その決まりと同じようなものだ。私欲のために、他人の人生についてあれこれ指図してはいけない。海棠。お前なら、そのことをよく分かっているはずだ」

「……」
海棠は何ともいえぬ苦々しげな表情で俯き、真っ赤に汚れている木の床を凝視した。木と木の板の境目に血が入り込み、その隙間を流れた血が小さな赤い川を作り上げている。
「父上……」
彩乃は海棠を見つめる父の方を向き、何と感謝の気持ちを述べたら良いものかと思案するような、父に自分の考えが認めてもらえたことが嬉しくてたまらないというような、複雑な表情を浮かべていた。蓬は小さく笑って自分を見る彩乃へ視線を向け、童顔に屈託のない微笑みを浮かべた。
「――それに、彩乃の病は海棠が治すんだろう？」
蓬の言葉に、ぱっと海棠は床から視線を上げ、視線だけをこちらへ向けている玄関わきの父を見た。
「えっ……？　兄者。そんなこと、あたしゃ聞いてないよ？」
彩乃は眉をひそめ、首を九十度回転させて海棠を見た。海棠は子供くさい笑顔の父を見ながら、うっすらと口を開く。
「あぁ……。そうだ。そうだ、な……。某が、彩乃の病を治すと決めたのだったな――」
海棠は足腰に力を込めてゆっくり立ち上がると、幼いながらもしっかりと父としての威厳をもつ蓬の顔を見すえる。
思い起こせば、夜半に海棠が旅立つと報告した時も、蓬は最終的に海棠を止めはしなかった。もし蓬が海棠の旅に反対していたとしても、海棠が旅に出ただろう。
――今の彩乃の心境も、それと同じなのだ。
「……。分かった。彩乃、某も――おぬしを止めはしない」
海棠は身体を横へと向け、彩乃に正面から向かい合った。彩乃へと向き直った海棠の顔には――
彩乃を祝福するかのような、柔らかい笑みが浮かんでいた。
「兄者――。ありがとう……」
彩乃は顔を明るく染め、深々と腰を折った。

「いや。いいんだ。その代わり、しっかりユーフェミアを守るんだぞ」
海棠は少し身を乗り出して、彩乃の左肩を右手で一度だけそっとたたいた。彩乃はしばらく頭を下げていたが、やがて下ろしたままの漆黒の長髪を揺らしながら顔を上げ、口がきけないかのようにこくこくと大きく頷いて返答をした。
二人を見つめる蓬は僅かに双眸を細め、
「海棠。彩乃」
二人の名を、ゆっくりとしっかりと呼ぶ。名を呼ばれた二人は同時に、同じ黒曜石のように美しい双眸を父に向けた。
蓬は自分と同じ二人の黒い瞳を見つめながら、口を開く。
「私は、お前たちの行動を止めはしない。しかし、その魂と肉体はこの世に一つしかないということを忘れるな。そして――後悔をするような生き方だけはしてはいけない。いつだって自分を信じ、自分に恥じぬ人生を歩め」
「あぁ」
「分かってるよ」
海棠は真っすぐな瞳で蓬を見、彩乃は炎を灯しているかのように明るい瞳で蓬を見る。
真っすぐな瞳をしたまま、海棠は彩乃へと向き直る。彩乃も海棠の行動を眼の端で捉え、自分よりもかなり背が高い海棠へと向き直る。
「大丈夫だ。――彩乃なら、絶対にできる」
海棠は彩乃を励ますようににっこりと笑った。
彩乃は海棠の顔を見て再び強く頷くと、黒い瞳に瞼を下ろしながら一度だけ大きく息を吸った。
漆黒の瞳が瞼の下からのぞいた瞬間、彩乃は身体を玄関の方向へと向け、その目でそこに立つ美桜の姿をしっかりととらえる。
「美桜！　あたしと勝負しな！」
彩乃の口から本日二度目の勇ましい科白が出た途端、美桜の口の

端がニッと歪に歪んだ。

scene 21

美桜は口の端を釣り上げたまま、唇をめくれ上がらせる。
「良いでしょう。では、表へ出てください」
「あぁ」
彩乃は固まった血が赤黒くこびり付いている右手を、ぎゅっと強く握り込む。それは短い彩乃の爪が、手の平に食い込むほどの強さだった。爪が強く手の平に食い込んでいるというのに、彩乃はその痛みに気付いていないかのようだった。
漆黒の瞳が、暗闇の中で閃く猫の目のような光を浮かべる。
「がんばれよ。彩乃」
「あぁ。必ず勝って見せるさ」
彩乃は正面を向いたまま海棠に向けてか、僅かにその口へ微笑みを浮かべた。海棠はその笑みを確認すると小さくその首を上下に動かす。
彩乃はゆっくりと、一歩前へ踏み出す。一歩、また一歩と着実に足は前方へと進む。彩乃の視線は移動する間も、つねに美桜へと注がれる。美桜は冷めたような光を浮かべた瞳で、彩乃の視線を受け止める。
「……」
「……彩乃」
海棠は無言で眉をしかめながら彩乃の背を見送り、ユーフェミアはこちらへ徐々に近づいてくる彩乃を心配げに見つめる。
たくさんの視線を浴びながら、彩乃は玄関へと、美桜とユーフェミアのそばへとたどり着く。
美桜は彩乃を見て、まるで小馬鹿にしているかのようにニヤリ笑い、一歩退いて外へ出ると指を折ったり伸ばしたりしながら彩乃を挑発するかのように呼ぶ。
彩乃は玄関に下りると慣れた手つきで素早くわらじをはき、足首

にきゃはんをつける。ユーフェミアはまるで彩乃が想い人であるかのように、その姿をずっと見つめていた。しかし想い人を見る目と違うのは、その瞳に映る色が喜色ではなく憂いを帯びた暗い色だということだ。しかもその顔にはつねに不安と相手を心配するような表情が浮かんでいた。

わらじときゃはんをつけ終えた彩乃は、彩乃が外へ出やすいようにとわざわざわきへ寄ったユーフェミアをまっすぐな瞳で見つめる。

「ゆうちゃん。あたし、絶対にゆうちゃんを守るから」

「彩乃――」

彩乃は緊張で厳しくなっていた表情をふいに和らげ、屈託のない笑みをその顔に貼り付けてユーフェミアを見た。ユーフェミアはやや心配げに彩乃を見つめていたが、やがて僅かに頭を上下させるとその瞳に決意に似た固い意志を宿した。

「分かりました。私は、彩乃を信じております」

「ありがとう。あたしを、信じてくれて」

彩乃は自然な笑みをその顔に浮かべた。ユーフェミアはこくりと小さく頷き、彩乃はユーフェミアのそばを通り抜けると、木戸をくぐって外へと出た。

春の穏やかな青空。淡い桃色の桜花が雪のように地に降り注ぐ。海棠と彩乃とユーフェミアが初めて出会ったあの桜の木は、今年も見事な花を溢れんばかりに咲かせていた。

紅桜は可憐に花弁を舞わせ、鮮やかな緑を放つ若葉は大変眩しく、まさに花紅柳緑（かこうりゅうりょく）と呼ぶにふさわしい風景だった。

美麗な景色の中。堅く、しかし強い決意を秘めた面持ちで歩む彩乃は、その景色にも劣らぬほど美しい。

彩乃は家の前に広がる土を固めただけの広場の中心に立ち、はっとするほど美しい蒼穹（そうきゅう）を静かに見上げる。

彩乃より先に外へと出ていた美桜は、ユーフェミアを乗せて来たらしい家の脇に置かれた駕籠（かご）の傍で肩甲骨あたりまであるクリーム色の髪と、澄んだ碧眼を持つ十歳くらいの少女から二本の木刀を受

け取っているところだった。
　二本のしなやかな木刀を携えた美桜は、彩乃のそばへと静かに歩み寄る。彩乃は視線をふっと下げ、自分へ向かってくる美桜を見すえた。
　誰もが静かに成り行きを見つめる中、美桜は彩乃のそばまで歩み寄り、木刀の一本をまっすぐに差し出した。
「これを持ってください」
　彩乃は美桜に差し出された木刀の柄を右手で握り、美桜も自分の手に握っているのは一本だけとなった木刀を静かに持ち直した。
「手負いだからと言って、甘く見るんじゃないよ」
　彩乃は視線を数ミリも反らすことなく、美桜の瞳だけをしっかりと見つめる。
　そんな彩乃をあざ笑うかの如く、美桜は不敵な笑みを浮かべた。
「そちらこそ、守り手の実力を甘く見ないでください」
　すらりと光る、鋭い刃（やいば）のような二人の瞳がぶつかる。
「じゃあ。はじめるよ」
「えぇ。はじめましょう」
　彩乃は全神経を美桜へと注ぎながらも、ゆっくりと背後へ歩み出す。
　彩乃は家から見て左の方向へ、美桜はそれと向き合う位置になる右の方向へと歩む。
　二人の間がたっぷり十メートルほど空いたところで二人は止まり、身体の正面を相手へ向ける。
「彩乃……がんばってください」
「彩乃。必ず勝つんだぞ」
　誰も美桜を応援しないという完全アウェイな状態で、しかし美桜は余裕と不敵に溢れる笑みを崩すことはない。
　ユーフェミアは祈るように指を組み、瞼をそっと伏せる。海棠は彩乃を信頼し、両こぶしを握り締めて成り行きを見守る。蓬はそんな二人とは対照的に、まるで見世物（みせもの）を面白そうに見ているかのよう

に口元を綻ばせている。
「では」
美桜は小気味良い音を立てながら、木刀で空(くう)を上から下へと斜めに切り裂く。そのまま連動するようにして、ゆっくりと中段に木刀を構えた。
その一連の動きは、緩やかでありながらもきっと清々しいほどに冷たく張りつめた、美しい冬の川の流れのようだった。
「っ――」
敵でありながら、美しいとさえ思えてしまう美桜の動きに、彩乃は思わず息をのむ。美桜の身体から発せられる、一点の濁りもない刃のように研ぎ澄まされた鋭利な雰囲気に、一瞬で気負され挫けそうになる。
彩乃は冷や汗を額から頬へと流しながらも、ぐっと奥歯を噛み締めた。
「――では。行きます」
美桜はすらりと光る刀身のような眼差しを彩乃へ向ける。二人にはかなりの距離があるというのに、彩乃にははっきりと自分に向けられる美桜の突き刺すような視線が分かった。
今や美桜の顔には笑みは欠片も残っておらず、その顔に浮かぶのは真剣な表情だけだった。先ほどまで歪んだ笑みを浮かべていた口元は、すっかり引き締まっている。
美桜は対峙する彩乃へ視線をしっかりと向けたまま、ゆるりと右わきへ木刀を構えなおす。木刀の切っ先が地面へと向いた刹那、わらじをはいた美桜の足が強く地面を蹴り、低い体勢で走り出した。
風を切りながら猛スピードで走り寄って来る美桜を見すえる彩乃は、その瞳にきつい光を閃かせる。　そして――
木刀と木刀のぶつかり合う、鈍い音が響き渡る。

ｓｃｅｎｅ　２１（後書き）

次回

疾風迅雷の戦闘シーン……になるはずねぇか…ｏｒｚ

デモセントウシーンヲガンバリタイナァ……

scene 22

堅いもののぶつかり合う音。それは鈍く低く、周りの山へと波紋を広げるようにこだまする。

「っ――」

美桜によって振るわれた一撃を己の木刀で受け止めた彩乃は、強く歯を食いしばるようにして奥歯を噛み締める。

「……」

美桜は木刀越しに、冷たく清々しい氷の様な瞳で彩乃を静かに、しかし鋭く見すえる。その瞳には焦りや躊躇いや戸惑いといった感情は全く映っておらず、そこに映るのは――

余裕と、相手を射すくめるような冷酷な光のみ。

美桜は木刀を前方へ押すようにして彩乃の木刀をはじく。彩乃は寸分もバランスを崩すことなく、僅かに後退する。

木刀を即座に中段に構えなおしていた美桜はさらに間合いを詰め勢いをつけるために足を一歩踏み出し、滑らかな弧を描くようにして裂帛の気合とともに彩乃の脇腹へ強かに木刀を振る。

「ッ――！」

彩乃は後方へ飛び退(すさ)り、かろうじて木刀をかわした。彩乃の腹部の前で、美桜の木刀が虚しく空を切り裂いてゆく。

「はぁぁッ！」

彩乃の迫力のある気合。

標的を失い空を裂く美桜の木刀を、彩乃の木刀が下から上へと一陣の風の如き素早い動きではじき上げた。

「――」

場違いに思えるような虚しく乾いた音とともに、美桜の目がぎょろりと下を見る。

味気のない色をした地面。茶色の地面を申し訳程度に彩るようにして生える緑の雑草。風に舞う桜。彩乃の木刀。揺れるセミロング

の黒髪。自分の――ガラ空きになっている腹部。
木刀を強くはじき上げられ、木刀を握っている右腕を宙へ上げている美桜の目がそれらを捉えた刹那、
「もらったぁぁッ！」
彩乃は地面が揺れるのではないかと思うほど強く、左足を大きく一歩踏み出した。その勢いにのせて、自らの右手に握る木刀を相手の鳩尾（みぞおち）めがけて、全体重をかけてつく。が――
「――！！」
「なッ――！」
上へ掲げられていた美桜の木刀が、まるで天空を舞う鷹（たか）が急降下をして地を駆ける兎を襲うように、上から下へと有り余る力を使って思い切り彩乃の木刀へ振り下ろされた。前方へ突き出されていた彩乃の木刀の軌道は大きく下へとそれ、その切っ先は美桜を倒すはずで突かれた強大な破壊力を用いて、いとも簡単に地面を深く抉る。地面を抉ったことによって木刀が急停止し、木刀を握っていた彩乃の右手首の関節が外側へと曲がる。
全体重を木刀にかけていた彩乃は、その身を前方へ――美桜の方へと投げ出すような形となってしまった。
「まずッ――！」
彩乃の顔に、明らかな焦りの表情が浮かぶ。
「ぬるい、ですね」
美桜は木刀を持ったままの右腕の肘を、こちらへ倒れこんできた彩乃のうなじへ強く叩きつけた。
「がはッ！」
短く息を吸い込むような声とともに、反撃することすらできぬまま彩乃は虚しく地面へと倒れる。
うなじを強打したことによって、彩乃の意識が一瞬だけ飛ぶ。が、地面に叩きつけられた痛みと、肺を打ったことによって一瞬息がつまったことにより意識は正常化した。
「ぐッ――！　がはッ！　ゲホッ」

彩乃は噛んだ唇から出た血と、口に入り込んできた地面の土が混ざった唾を吐きながら、木刀を握り直そうと右手に力を込めた。が――

握りしめるより早く、彩乃の右手に鋭い激痛が走った。

「ぐ――ッ！」

「甘いですね。あまりに、弱すぎます」

彩乃の顔に、影が落ちる。頭上から降って来た声音はどこまでも冷たく、まるで聞く者の心を凍りつかせようとしているようだった。

太陽を背に立つ美桜は、その足の下に彩乃の右手を敷いていた。しかし敷いている本人は、まるで彩乃の手が地面に落ちている葉っぱや石ころと同類であるかのように、何の気にもせず踏みつけ続ける。

「つッ――。ぐッ……」

彩乃は額に脂汗を浮かべながら、木刀を握る右手に力を込めようとした。が――

美桜によって踏まれているその手は、すでに木刀を離していた。

「終わりです。入江彩乃」

氷のように、相手を射るような美桜の声。彩乃は美桜を見上げ、そして――

「っ――」

目の前に突き付けられた木刀の鋭さに、息をのんだ。

まるで彩乃の眼球を貫こうとしているかのように、木刀は眼球の数ミリ手前で静止している。

「残念ながら、貴殿の負けです。下手に動けば――眼球が潰れますからね」

「……」

彩乃は額から頬へと汗を流す。その汗が顎から滴るとともに、彩乃はふっと目を伏せて口を閉ざした。

「そんな……嘘、だろ」

二人の姿を遠くから傍観していた海棠は、地面に突き倒されてい

る妹の姿を絶望の色を移した瞳で見つめる。
「……っ」
ユーフェミアは眼前で展開された光景に完全に言葉を失い、
「やはり、な。しかし……」
蓬はもとより承知であったかのように、この勝敗に頷きつつ、意味深な笑みを浮かべた。
「では。守り手は諦めてください」
「……」
敗北した彩乃は口を開かず、視線も上げようとはしなかった。その唇は、悔しげに結ばれていた。
ものの数十分で方が付いてしまった二人の戦い。
力量、迫力、体力、オーラ、判断力、身のこなし。それらの中のどれも、最初から最後まで彩乃の方が勝るものはなかった。その背には常に冷や汗が流れ、額には脂汗が絡む。
美桜の常に落ち着き払った瞳、冷静な判断力、流れるような身のこなしは戦闘中、一切乱れることはなかった。
圧倒的な優勢を誇って、美桜は彩乃を打ち負かし敗北へと追いやったのである。

scene 23

彩乃の手の上から、美桜の足が引かれる。相変わらず冷酷とも思える無感情な瞳で、美桜は彩乃を見る。彩乃は顔に影を落としたまま、頭を上げようとはしない。

「彩乃……」

周りに漂う冷たい沈黙を断ち切るようにして、海棠が悲しげに妹の名を呼んだ。静謐な闇のように美しい漆黒の瞳が、ふいに陰りを帯びる。

海棠は視線を伏せている彩乃のそばへと駆け寄ろうと足を一歩踏み出し、

「っ……」

刹那にそれを止めてしまっていた。海棠は信じられないという風に息をのみ、双眸を大きく見開く。

彩乃が、上半身を起こし、顔を上げたのだ。――その顔に、恐いほど綺麗な笑みを浮かべて。

「美桜。ありがとうね。うん。あたしも甘かったよ。秘宝の守り手に勝負を挑むなんて。こんな姿、剣術の師匠に見られたら、きっと怒鳴られるね。ははっ……。まったく――あたし、恥ずかしすぎだよ」

彩乃は立ち上がりながら、元気とさえ思える口調で言った。ただ、その言葉が終わりに近づくほど、その声はだんだんと小さくなっていた。

両足をしっかりと地面につけ、地に倒れていた彩乃は再び立ち上がる。しかしその瞳は誰も見ようとはせず、立ち上がった瞬間に視線を皆からそらすようにして彩乃は空を仰いだ。それは――

まるで、涙がこぼれるのを防いでいるかのようにも見えた。

全員が静寂を守る中、彩乃は雲ひとつない青空を見つめながら口から大きく息を吸った。

「――本当に、自分が、なさけないね」
吸った息をすべて吐き出すかのように、天空を仰ぐ少女は大きなため息をつくように言葉を吐き出した。そんな表情の見えない彩乃の顔を、美桜は双眸を細めて静かに見つめる。
「……」
海棠は足を一歩前へ出したままの体勢で、憂いを帯びている彩乃を沈んだ面持ちで見つめる。彩乃は視線を空から土色に汚れた自分の服へと落とし、「あーあ。服が土で台無しだよ。まったく……」と意図的に大きくしているとしか思えない音量の声で言い、身体中についた土を力任せに手の平で強く叩(はた)きはじめた。
しかし、彩乃を見つめる海棠はあることをちゃんと見ていた。
――彩乃が身体を叩く動作の一部と見せかけて、時折目元をこっそりと手で拭っていることを。
「くそっ。なかなか土の汚れって落ちないね……」
悪態を付きながら彩乃は懸命に身体中を叩き、そして、
「貴殿は馬鹿ですか」
ふいに、美桜に声をかけられた。
彩乃からもうもうと土煙りが上がっているというのに、何故か美桜は彩乃のそばから遠ざかってはいなかった。
「貴殿は、弱いうえに馬鹿で阿呆なのですね」
「……」
美桜の冷静とも冷淡ともとれる声に彩乃は一切返答せず、ただただ黙々と身体をはたき続ける。まるで、それをすることしかできないかのようにただただ、淡々と。
「――泣きたいときは泣けばいいんです。それを我慢している貴殿は、勝負で負けるより数千倍も情けないですよ」
美桜の言葉に、彩乃は黙したまま服から美桜へと視線を移す。美桜へと向けられたその瞳には、何の感情も浮かんでいなかった。
「やだね。あたしゃ、泣いてなんかないさ。泣くなんて、弱い者がすることだよ」

「そういう強がりなところが、情けないと言っているのです。それに――泣くことは弱いこととイコールではありません。泣いた分だけ、人は強くなるといいます。泣くほどの辛い経験や悲しみを強さに変えていける者。その者こそ、本当に強い者です。泣くことさえできないものは――最初から、強くなどなれません」

美桜は真っすぐに彩乃を見すえ、相手を諭すかのように言葉を紡いだ。彩乃は美桜のあまりに真っすぐな瞳から逃げるようにして視線を右の地面へと落とし、そこに自分の木刀が取り残されるようにして落ちていることに気がついた。

彩乃はゆっくりとかがんで木刀を拾い上げた。木刀は彩乃ほどは汚れていなかったにせよ、僅かに土を纏っていた。握る柄の部分には彩乃のものか、僅かに赤い血のシミがついている。

彩乃は木刀を土を軽く払い、右手で柄を強く握り締める。その瞳に浮かぶ強い決意は今や半分ほどを憂いに占領されており、決意の光は僅かに弱くなっていた。

彩乃は木刀を握ったまま立ち上がり、振り返って美桜の方へ木刀を握る右手をのばす。

「ほら。返すよ」

「帰すのであれば私ではなく、あちらにいる白胡（はっこ）――クリーム色と碧眼の少女に渡してください」

「白胡？」

彩乃は美桜の指し示す家のそばに置かれた駕籠（かご）の方向へ、訝しげに視線を送る。と、そこには先ほど美桜が木刀を受け取っていたクリーム色の髪の少女が、にっこりと可愛らしい微笑みを浮かべて立っていた。

「……？」

彩乃と同じく、美桜の指先を追って白胡を見た海棠は、小首をかしげた。

駕籠のそばに立つ少女――白胡からは、人間の持つ独特な気の流れと生きている者の温もりを感じられなかったのだ。

「あの子は、何なんだい？　何のためにいるんだい」
海棠とは違う意味で疑問を持った彩乃は、美桜へ訊ねる。美桜は白胡を指したまま、口を開く。
「白胡は、主様の身の回りのお世話をする？アンドロイド？です」
「へぇ。人造人間なのかい」
彩乃は珍しそうに、好奇心がわいたかのように僅かな喜色を含んだ声を上げる。
「あぁ。なるほどな」
海棠は二人の話を耳にし、彼女に気の流れと生きた者の温もりを感じられなかったことに独りで納得した。
彩乃は数メートルほど先に独りでたたんでいる白胡のそばへと歩み寄り、丁寧に木刀を両手で差し出した。
「白胡、と言ったね。ゆうちゃんを、頼むよ」
「分かッタ、アルよ」
白胡は歪な言葉を使いながら、ロボットとは思えない滑らかな動きで木刀を彩乃から受け取った。
白胡へと木刀を返したとき、彩乃の手が僅かに白胡の手に当たった。白胡の手は、驚くほど冷たかった。が、肌の質は驚くほど人間に近く、柔らかな弾力を持っていた。
木刀を確かに白胡へと返却した彩乃は、家の玄関前に立つ蓬と海棠とユーフェミアの顔を、しっかりと真っすぐに見つめた。その瞳は僅かに憂いを含んでいたものの、清々しいほど綺麗な光を浮かべていた。彩乃は口元をほころばせ、
「――ゆうちゃん！」
悲鳴に近いその声とともに、一瞬で笑顔を凍りつかせた。
彩乃の声に反応した海棠が驚いてユーフェミアを振り返るのと、美桜がしまったという風に届くはずもない手をユーフェミアへ虚しく伸ばすのと、ユーフェミアが「え？」と疑問を口にするのが同時だった。
次の瞬間、

「きゃあぁぁぁッ！！」
ユーフェミアが甲高い悲鳴を上げた。何故なら、
「皆、そこを動くなっ！」
突如として自分の背後に現れた者に、捕えられたのだから。
ユーフェミアの後ろに現れた者はユーフェミアの腹部に左腕を巻きつけ、白く今にも折れてしまいそうなほど細い首に鋭いくないを突きつけていた。
太陽の光を反射して怪しく閃くくないを見た海棠は目を見開いて動きを止め、蓬は楽しいという感情を無理やり押し殺して不自然な険しい表情を浮かべ、美桜は歯が鈍くきしむほど強く歯を噛み、彩乃はユーフェミアを捕えている者を鋭い眼光で睨み据える。その瞳には――強い決意が再び、強い光を放とうとしていた。

scene 24

沈黙。
そこに立つすべての人たちは口を閉ざし、決して開こうとはしない。同じく、身動きも皆しようとはしなかった。
「ククッ。懸命な判断だな。そこから一歩でも動くと、この女の首が瞬時に飛ぶと思え」
ユーフェミアを抑えつけている者は、己の前にひれ伏す者たちを見下すような下卑た笑い声を上げる。その顔はさも愉快だと言わんばかりに歪む。
その者は、真っ黒な服を纏い真っ黒な髪と瞳を持つ、大体二十から三十歳ほどに見える女性だった。
「ほう……。なかなか美人じゃないか」
この緊迫した空気に満ちた場には大変不釣り合いな、緊張の欠片もない呑気な声を蓬は上げた。
「父様。今はそのようなことを言っている場合では――」
「そこ！　五月蠅いよ」
海棠が上げた叱りつけるような呆れたような声は、女性の鋭い声に途中で抹殺された。
海棠も蓬も、瞬時に口をつぐむ。海棠の瞳には焦りが浮かぶが、蓬の瞳には事のすべての成り行きを見とおしているかのような、ひどく落ち着いた色がうかがえた。
しばしの沈黙が再び人々にまとわりつく。風はこんな張りつめた空気の中でも、先ほどと何ら変わりなく桜の花弁を運び続ける。
「――なぁ。そこの美人のお姉さん。ちょっといいかな？」
「父様」
海棠が呆れたようにため息をつきながら蓬を見、蓬は横目で海棠へ何か意味深な視線を投げた。海棠はその意味を汲み取ってか、蓬に気を取られている女性に気付かれぬよう、そっと両手を背中へと

まわした。
女性は奇妙なものを見る目つきで蓬を見る。
「何だ。お前、この状況が分かっているのか？」
女性はユーフェミアの腹部に巻きつけている左腕に力を込める。右手に握られた煌めくくないは、さらにユーフェミアの喉に近づき、僅かに白い肌へ食い込んだ。あまりの恐怖に、ユーフェミアは喘ぐような息をする。
「あぁ。分かっているさ。悲しいことにね。で、聞きたいことがあるんだが」
「この場でお前に発言の権利があると思っているのか？」
「発言に権利なんてものはもとから存在しないよ。で、美人のお姉さん」
「……。――何だ」
女性は諦めたように、小馬鹿にするように、呆れたように鼻で小さな息をついた。
――どうやら？美人？というところは否定しないらしい。
「君は、何故ユーフェミアちゃんを狙うんだ？」
「はっ。私を馬鹿にしているのか。こいつが、秘宝の守り主だからに決まっているだろう。こいつを殺せば、秘宝を奪うのは簡単になる。秘宝を守っている結界が容易く崩れる――」
女性は何を感じてか、はっと言葉を止め、そして、
ユーフェミアもろとも、姿をその場から霧にように消し去った。
刹那。海棠が素早い動きで正面へ左手を突き出し、それまで女性が立っていた場所に、高温の蒼い炎が巨大な火柱を形成した。
「くそっ！」
「おっ」
「っ――」
「はっ……！」
海棠は悔しげに顔を歪めながら女性に直撃するはずであった炎を見、蓬は感心したような声を上げ、美桜は息をのみ、側に立つ白胡

へ何か耳打ちをしていた彩乃は瞬時に目を見開いた。
「バレてしまったか」
左手を前方へ突き出している海棠は、小さく舌打ちをしながら手を下げる。その左手の平には小刀で描いたのか、真っ赤な血でできた炎の魔方陣があった。
「うーん。上手いと思ったんだけどね。あの魔術なら的だけを焼けたのに。――未来は、簡単には変わらないってことか」
蓬は唸るように言い、鋭い眼差しで徐々に弱まっている炎を見る。
その場にいる全員がそれぞれの思いを胸に秘める中、
「はっ。甘いんだよ。その男と私が会話している隙に、そこの魔術師があたしを狙ったんだろう？」
何処からか、ふいに皆の前から姿を消した女性の声が響いた。女性とユーフェミアを除く四名がほぼ同時に、全員の後方にある桜の木の方を見やる。
全員の視線が注がれる桜の木の下には、やはり先ほどと同じ体勢の女性とユーフェミアが立っていた。
「おい、そこの魔術師。動いたってことは、この女がどうなってもいいってことだな」
女性は心底面白いという風に口の端をニィっと大きく釣り上げ、ユーフェミアの喉にくないを強く食い込ませる。くないの刃はいとも簡単にユーフェミアのまっ白な肌を切り、身震いをしてしまうほど不気味な真紅の雫を滴らせた。
「畜生ッ！」
海棠は自分の仕出かしてしまったことに悪態をつき、血が溢れるのもかまわずに左手を強く握りしめた。その指の隙間から、鮮血が痛々しいほど大量に流れ落ちる。
「――海棠！　もう構いませんッ。私は――。私は――！」
ユーフェミアが蒼白の顔で必死に叫ぶ。その瞳からは美しいと思えるほど透明な涙がこぼれ、頬を伝う。
恐怖と悲しみに震えるユーフェミアを見つめながら、海棠は瞋恚(しんい)

の焔を瞳にたぎらせ、美桜は己の不甲斐なさと憤りと悔しさに唇を強く噛み、蓬はただ静かに女性とユーフェミアを見つめ、彩乃は――

「ふっ。ふふふっ。あはははははっ！　はははははははっ！！」

本当に楽しそうに、おなかを抱えながら狂ったように笑いだした。

scene 25

「ははははっ！　ぷっ、ははははっ！　あはははははっ！」
陽気で高らかな彩乃は蒼穹へと、高く高く響く。
彩乃の笑い声に驚いたのか、二羽の雀（すずめ）が小さな羽を広げて家の屋根から飛び立った。
「彩、乃……？」
「ついに狂いましたか」
「――ふふっ」
狂乱しているとしか思えないほど笑い続ける彩乃を、海棠は呆気にとられたような顔をして見つめ、美桜は呆れたように一瞥し、蓬は物語の急展開をわくわくと見つめる子供のように目を輝かせ鼻で小さく笑う。
「なっ……、何が、可笑しい！！」
ユーフェミアを捕まえている女性は、彩乃に向かって獣のように吠える。その顔には、明らかな苛立ちと疑念がうかがえた。
「ははははっ！　あっはははははははッ！！」
女性の言葉には答えず、尚も彩乃は身体をくの字に折って笑う。
「……っ。お前！　この女がどうなってもいいのかッ！」
笑い続ける彩乃への憤りに耐えかねたのか、女性はユーフェミアの喉に食い込ませているくないに力を込めた。さらに深くくないはユーフェミアの肉を抉り、流れる血の量が増す。
女性の言葉と行動に、彩乃の笑いが徐々に終わりを見せ始める。
「ははッ。はぁ、はぁ。……はぁ。さて。三文芝居（さんもんしばい）はここまでのようね」
笑いを完全に止めた彩乃は、普段とは全く違う口調で女性へ向けて言葉を放った。
その瞳と口元にはすでに笑いは欠片も残っておらず、顔には真剣な表情だけが浮かんでいる。

「な、に……？　三文芝居、だと」
女性は眉をひそめて、眉間に深い皺を刻んだ。その瞳は威嚇するかのように彩乃を睨みつけているが、そこに浮かぶ感情は戸惑いや焦燥といった類のものだった。
彩乃は変わらず余裕とさえ思える神妙な瞳で、口の左端を釣り上げて女性に不敵な笑みを向ける。
「そうよ。ふふっ。貴女がすっかり私たちの芝居に騙されているものだから、可笑しくて、くくくっ、つい、笑っちゃったわ」
「どういう、意味だ？」
「そういうも何も、そのままの意味だけれど？」
疑念に満ちた女性とは反対に、彩乃はクスリと笑う。
「……何？」
海棠は眉を寄せ、
「ふふん」
蓬は愉快そうに鼻で笑い、
「……？」
美桜は物思いにふけるようにして、左手の人差し指で顎を挟み、
「……」
ユーフェミアはポカンと口を開けて、余裕満面の彩乃を見つめた。
「お前……。何を、企んでいる？」
戸惑いによってすっかり冷静さを失っている女性は、周りの反応などには気付かずにただ彩乃だけを見つめる。
「何を企んでいる、ですって？　私は何も企んでいないわ」
彩乃は小さく肩をすくめ、そのまま言葉を続ける。「だけれど――。そうね。貴女に、良いこと教えてあげるわ」
「？」
女性は訝しげに彩乃を見つめる。
彩乃は隣に立つ白胡の応援するかのような眼差しを受けながら、一歩前へ進み出る。僅かな衣擦れの音が、沈黙の中でやけに大きく響いた。

「貴女が捕まえている、その金髪の女。それ――守り主でも何でもないのよ？」
「……なッ」
女性は驚愕に目を大きく見開く。
女性と同じように事情をつかめていない海棠も、女性と同じような反応を見せた。違うのは、声を上げなかったことくらいだ。
美桜は未だに、彩乃の考えを読み取ろうと思案し続けている。
「――ふふっ」
時見である蓬は、小さく口元だけで笑い、
「……」
彩乃からこの作戦について予め聞いている白胡は、彩乃をじっと見守り続ける。
「頭の硬〜い貴女のために、私が事を簡単に説明してあげるわ。だからね、貴女みたいに守り主の命を狙う、大馬鹿者がいるでしょ？
その金髪女は、そういう人たちから本当の守り主を守るための、ダミーよ」
「なッ……！　はっ、はったりをかますな」
「はったり？　プッ。馬鹿じゃないの。はったりなんかじゃないわ」
彩乃は間髪入れずに言い、嘲笑を浮かべる。
がその時、ふいに女性の口に僅かな笑みが垣間見えた。
「では、もしもそれが本当だとして、何故今更お前が本当のことを言う必要がある？　ダミーが殺されるだけなのに？」
女性は嘘を見破ったといわんばかりの、得意げな笑みを浮かべる。が、彩乃は微塵も焦りを見せはしない。
「そう。ダミーが殺されてしまうわね。私はダミーが殺されようと構わないわ。けれど――私の前で誰かが死んでしまうのはイヤなのよ。特に、それが私のせいで死ぬのだったら尚更、ね」
「彩乃！」
突然、芝居を続ける少女の名を呼ぶ声が上がった。線が細く、しかし凛とした響きを含んだ麗しい声。その声は、女性によって捕ま

えられ、首にくないを突き付けられている少女のもの。
ユーフェミアは、女性に抵抗しようとはせずに震える声で必死に叫ぶ。
「彩乃！　――いいえ！　主様。もう、いいのです。私は、もう、いいんです！！」
首から血を流す、蜜色の少女は涙を頬に伝わせた。その表情は儚くも、何か強い決意のようなものが感じられた。
ユーフェミアの女優顔負けの華麗な演技に、
「なるほど」「――そうか」
海棠と美桜が、同時に事情を理解した。
「何――。主様、だと？」
女性は驚きに目を瞠り、両手に込めていた力を僅かに緩めた。

scene 26

桜の舞う澄みきった蒼空(あおぞら)。風は穏やかに人々の髪を揺らし、桜の花弁を乗せ、春の香りを届ける。風光明媚(ふうこうめいび)なその場に漂うのは、緊迫した空気。

表情を引きつらせた守り主の命を狙う女性は、驚愕に双眸を見開く。自分の思惑通りに事が進んでいる彩乃は、クスッと小さく笑った。

「そう――」

儚い響きを含むアルト声が、彩乃の口からこぼれる。月の明るい夜闇のように艶めく漆黒の髪をなびかせながら、視線はそのままに彩乃は顔だけを僅かに上へ向けた。黒曜石のような瞳が、太陽の光の力を借りて煌めく。そして――

誰もが魅せられてしまいそうなほど可憐な笑みを、その口元に綻(ほころ)ばせた。

彩乃の、ユーフェミア顔負けの美しい笑みに誰もが息をのむ。

「――本当の守り主はこの私。私の命が危なくないように、私は守り主となるまではここで安全に暮らしていたのよ。残念だったわねぇ。すっかりダミーに騙されちゃって。守り主の刺客って、もっと頭のキレる賢い人だと思っていたわ。なのに、――プッ。貴女って、本っ当に?馬鹿?なのね」

人を嘲(あざけ)るように、クスクスッと彩乃は笑う。馬鹿を強調した言葉と彩乃の笑みに、

「……っざけるな……。――ふざけるなぁぁぁッ!」

女性は冷静な思考と判断力と理性をすっかり失い、怒り任せに鋭い咆哮を上げた。その脳内は憤怒だけに支配されており、何故彩乃が守り手である美桜と戦っていたのか、などという彩乃の証言との矛盾には気付かない。女性は瞳に怒りの業火を燃やし、自分の怒りをぶつけるようにして捕まえていたユーフェミアを強く地面に突き

飛ばした。
「きゃっ！」
ユーフェミアは土ぼこりを纏いながら、地面に強く身体を打ちつける。
「っ――！」
本当の守り主の身を案じた美桜が、ユーフェミアへと近付こうとしたが、
「――！」
ユーフェミアの強い光を宿した蜜色の瞳に睨みつけられ、足を止めざるを得なかった。
ここで美桜が駆けよってしまうと、女性に本当のことを見抜かれてしまうかもしれない。そうなってしまえば、彩乃の演技も身体を打ったユーフェミアの痛みもすべてが無駄になってしまう。
美桜は駆け寄りたい衝動をぐっと堪え、ユーフェミアから視線を引き剥がすために彩乃へと無理やり目を向けた。
彩乃は今、己の命をかけてユーフェミアを守っているのだ。自分が本当の守り主だと言えば女性は自分の命を狙ってくると考え、自分が身代りになってユーフェミアを守ることを決断したのだ。
「私をっ……馬鹿にするなぁぁぁ――！」
女性は空気を揺るがすような叫び声とともに、その場から姿を消した。
「彩乃！　気をつけてください！」
ユーフェミアはそのか細い声を限りに叫び、
「――神の愛娘、か」
この場で唯一その名を知っている蓬は、女性の特殊な瞬間移動能力の名称をふと口にした。
どこから現れても構わないよう、彩乃は神経を尖らせてすっと身構え、
「――あああっ！」
刹那、彩乃の背後から猛々しい声とともに疾風が吹き荒れた。

彩乃は風を感じた瞬間、可憐に宙を飛ぶ黒蝶のようにひらりと前方へ跳んだ。地面が近付くと、しなやかに身体を丸めて受け身を取り、一回転をしたのち地面に足をしっかりとつける。土で汚れたことなどお構いなしに、すぐさま後方を振り返る。

「――ちぃッ！」

黒光りするくないによって、彩乃が先刻まで立っていた地面が砕け散る。粉砕した土は宙を飛び、その向こう側からくないを握る女性の射るような視線が彩乃を貫く。

普通であれば粉砕などしないであろう地面が粉々になっていることを確かめた彩乃は、女性の怪力に驚きつつも素早く立ち上がり、バックステップで後退。すぐさま膝を折って身構える。

「畜生――！」

女性は地面に深々と刺さっているくないを抜こうとはせず、懐(ふところ)から新しいくないを引き抜いた。一点の曇りもなく研がれた鋭い両刃(もろは)が、女性を睨み据える彩乃を映し出す。

「はあぁぁぁぁぁ――ッ！」

女性は右手で逆手に持ったくないを身体の左側に構え、彩乃の腹部めがけて真一文字に薙ぐ。

その動きをよんだ彩乃はひゅっという口笛のように短く鋭く呼吸をし、両足に力を込めて地面を蹴り、後方へと跳ぶ。女性のくないは獲物にありつけず、空を切り裂く音だけを上げる。

「っあぁあ！」

続いてくないは下から上へと縦に振り上げられる。彩乃は僅かに身体をのけ反らせつつ、再び軽く跳んで後退。またもくないは彩乃の身体ぎりぎりで空を掻き切り、ふわりとなびいた彩乃の黒髪を数本宙に散らばらせた。

僅かに宙で舞っていた桜の花弁が、くないの動きによって起きた風に乗って蒼い空へと飛翔する。

「くっそおぉぉぉッ！　当たれぇ――！」

反狂乱の叫びとともに、右足を大きく一歩踏み出す。女性は踏み

出すと同時に右手をぴんと真っすぐ伸ばし、くないを前方へ突き出す。が、またも彩乃は身体を少し横に反らしただけで、やすやすとくないをかわす。足に力を込め、身体をのけ反らせて後方へ大きくジャンプ。そのまま両手で着地し、さらに両手に力を込めて身体を僅かに内側へ丸めながら再度跳ぶ。小さく風を巻き起こしながら着地。そのまますくっと立ち上がり、身構えながら敵を睨む。彩乃の着地によって起きた風に、地面に積もっていた薄紅の花弁が彩乃を取り巻くようにして躍る。

「どうしたのかしら？　貴女、とっても弱いですよ？」

クスリとまた、彩乃は一笑。

「黙れぇッ！」

女性は額とこめかみに血管を浮き出し、彩乃へ唾を飛ばしながら吠える。

彩乃は女性を挑発するようにして、困ったような表情を作る。

「私は本当のことを言っているだけなのですが……？」

「ガキがほざくなぁぁ――！」

女性は地面を抉るほど強く足を踏み出す。くないを突き刺すつもりなのか身体の前にくないを構え、彩乃めがけて弾丸のように突進する。

ひゅっと彩乃は口笛のような息をし、地面を強くしっかりと蹴る。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

裂帛の気合とともに突進してきた女性をあっさりとかわし、彩乃の身体は胡蝶のように宙を舞う。

scene 27

女性の頭上を身体の前で両手をクロスさせた彩乃が、背面跳びの要領で跳ぶ。

皆が蝶のように飛ぶ彩乃を見つめる中、視線を集めている少女は背筋を使って僅かに反らしていた身体を伸ばし、横に一回転した。続いては腹筋を使って身体を前方に曲げ、小さく身体を丸めた状態で音も立てずに地面へ吸い込まれるように着地。彩乃が降り立ったそこは、

「白胡！　さっき言ったとおりによろしく！」

「分カッた、アルよ」

クリーム色の髪を持つアンドロイド、白胡の右隣だった。荒い呼吸を繰り返している女性を睨み据えたまま彩乃は立ち上がり、白胡が自分へ差し出した物をゆっくりと慎重に手に取る。白胡の細い腕によって持ち上げられていたそれは、かちゃりと心地よい小さな音を立てながら彩乃の手におさまる。

――彩乃の手がしっかりと握ったもの。それは、黒光りする鞘に覆われた、刀だった。

「ひっ……！」

「……っ！」

「……」

「――うん」

艶めく黒鞘に収まっている刀に、全員の視線が注がれる。腰が抜けているのか、未だ立ち上がれずにいるユーフェミアは口元を押さえながらも小さな声を上げ、海棠は驚きで目を瞠り、美桜は険しくも興味深げな顔つきで彩乃を見つめ、蓬は楽しそうな表情のまま頷いた。

「な、に――！」

女性は双眸を見開き、後方に降り立った彩乃を見つめる。

刀をその右手に握り横に構えている彩乃の立ち姿は凛々しくも美しく、それが握られていることに、一片の違和感もない。まるでそこにあることが当たり前であるかのように、すらりと伸びる刀は彩乃の手に収まっている。

彩乃の左手が、黒鞘を軽く握る。刀は右方向へと引かれ、イィィィィ……ンと刃を振動させながら彩乃は刀を鞘から滑らかな動きで抜き放った。己の白刃（はくじん）を露わにした刀からは、ため息の様な息吹が聞こえるような気さえする。

時が緩やかに進んだような気さえしたが、彩乃が白胡のそばに降り立ってから僅か十数秒ほどしか経っていない。

黒鞘を彩乃は後ろの白胡へと渡し、右手で柄を握る刀を空を切り裂きながら振るう。刀は彩乃の動きのままに滑らかな軌道を描き、鋭い唸りを上げる。

彩乃は刀を身体の前で構え、そっと右手に左手をそえる。視線は女性に注がれたままだ。

「覚悟することね。お馬鹿な刺客さん」

「その口をいい加減、閉じてやる！」

憤りによって動きが大きくなり、無駄な力も入れ過ぎている女性はかなりの体力を消耗しているのか、肩で息をしている。その黒い瞳は、獲物を狙う獣のように鋭い。

「はぁぁぁぁぁッ！」

女性は唸り、勢いよく走り出す。土が、女性のはくわらじの裏から飛び散る。

「――っ」

彩乃は女性を見すえたまま、自分めがけて駆ける女性を迎え撃つかのように地面を蹴る。

「はぁ！」

女性が、間近に迫った彩乃の首へとくないを横へ薙ぐ。

「これで、終わりだぁぁ！」

光線を放つようにして閃くくないは、残像を残しながら流れ――

時が、止まる。まるでスローモーションの映像を見ているかのように、ゆっくりと時が流れる。
淡い桜色の花弁。閃く白刃。ほとばしる鮮血。目に沁みる空の蒼。大きく開かれる瞳。
「――がはっ！　あぁぁぁあぁぁぁ――！」
鼓膜をつんざくような、鋭い悲鳴。派手な音を上げながら、身体が傾き地面へ向けて倒れゆく。返り血に濡れた、真っ赤な刃。彩乃の首や頬にかかる、赤い雫。
「うっ、あ。げほっ！　ぐッ。ゴホッ！　ゴホッ！」
女性の口から溢れだす、大量のどろりとした粘り気のある血。
鋭い光を放ち続けている、彩乃の瞳。その手に握られているのは、赤く濡れた刀。
時が、景色が、スローモーションから解放される。
「くっ、そ……。何故、こんな、小娘、に私がぁぁぁ――！」
地面に倒れ、腹から真紅の血を流す女性は脂汗をかいた顔で彩乃を睨みつけながら、絶叫する。
先ほどの戦闘時、自分の首を狙うくないを体勢を低くして逃れた彩乃は、ガラ空きになった女性の腹部を刀で横に薙いだ。くないは最後の最後まで彩乃の血を浴びることはできず、先ほど抜かれたばかりの刀が女性の血にまみれることとなったのだった。
「うっ、ぐっ。はぁ……。はぁ……。くそっ――。何故っ……。何故……。私が、負けたっ、んだ……。うっ。はぁ……。はぁ……」
女性は荒い呼吸を続け、虚ろな瞳から、一滴の涙をこぼした。

ｓｃｅｎｅ　２７（後書き）

ｎａｋｏｎｏｋｏ様よりご指摘いただいた誤字脱字、その他諸々文章が不自然な部分などを直し終えました。
私の作品は誤字脱字が多いみたいです；
ほんの些細な誤字脱字から、文章についての批評・感想まで、何でもお待ちしております。
読者の皆さま、いつもいつも、本当にありがとうございます。

scene 28

誰も、何も言葉を生み出しはしない。人々は沈黙し続けることを選択し、口を閉ざす。

「――それはな」

ふいに沈黙を破ったのは、のんびりとした緊張感の欠片もない声だった。

女性の荒い息が響く中。ふいに上がったその声に、皆が視線を声の主へと向ける。声の主、蓬は地面に横たわる女性をじっと見つめたまま、ゆっくりと口を開く。

「君を切った黒髪の少女、彩乃が、君が最初に捕まえていたユーフェミアちゃんを――本物の守り主を、守るために戦ったからだよ」

道に身体を伏せているユーフェミアが、はっと目を見開く。

「私は、騙さ、れ、たのか……」

女性は苦しげな呼吸の中でやっとそれだけ言い、蒼白の顔に自嘲気味の笑みを微(かす)かに浮かべた。

蓬は、瞳孔が開きかけているかのように虚ろな女性の瞳を見つめ、静かに言葉を紡ぎ始める。

「誰かを守ることは、決して容易いことではない。守ることは、殺すことよりも断然(だんぜん)難しい。でも、誰かを守ろうとする気持ちは、他の何よりも強いんだ。自分の身や命より、他者の身と命を思う強い心。大切な人を守るのだという、ゆるぎない決意。恐怖を押しのけて、行く手を阻むたくさんの壁に挑む勇ましさ。そんなものが集まってできたのが、？誰かを守る気持ち？だ。その気持ちは、決してやわなものではない。――彩乃は、そんな気持ちを持って刀を振るったからこそ強かったんだ。ユーフェミアちゃんを殺す、という気持ちだけしか持っていない君よりも、はるかにね」

ユーフェミアは、返り血に汚れた彩乃を見上げ、その蜜色の瞳を潤ませた。そんなユーフェミアの反応に、彩乃は困ったような微笑

みを浮かべる。
女性は二人のやり取りを一瞥した後、ふんっと小馬鹿にするように鼻で小さく笑った。
「こんな、こと、で……、私が、改心する、と、思う、なよ……。私は、刺客、だ。殺しを、する、だけ、だ……。絶対に、私は、お前を、そこの、金髪、女を……殺し、秘宝を、奪って、みせる……！」
女性は最後に一度だけ血交じりの咳をこぼし、そのまま霧のようにふっと姿を消した。後に残されたのは、赤黒い溜まりをつくり上げている女性の血と、地面に刺さったままの一本のくないだけだった。
女性の姿が完全に消えた後、美桜はすぐさまユーフェミアへと駆け寄った。が、ユーフェミアは美桜の進行を手の平を差し出して止め、桜の木に寄りかかりながら自分で立ち上がった。
ふいに刀を握る彩乃の右手が力なく垂れ、刀の切っ先を地面に突き刺した。それはまるで、突然刀が重くなってしまったかのように見えた。彩乃は安堵したかのような、自分へ押し寄せる疲労感に顔を歪ませているかのような表情をする。
「彩乃……」
ユーフェミアのか細くも凛とした声が、彩乃の耳へと僅かに、しかししっかりと届く。彩乃はふっと、視線を桜の木の下のユーフェミアへと向ける。桜が風に散る中、ユーフェミアは涙を浮かべた瞳で、桜にも負けぬ美しく綺麗な笑みを浮かべた。
「ありがとう、ございました……。貴女には、とても感謝しています」
ユーフェミアは桜の幹から身体を浮かせ、深々と腰を折った。礼を言われた彩乃は、照れているのか顔を赤く染め、その表情を隠すかのように僅かに俯けた。
海棠と蓬が笑顔で二人を見つめる中、
「――彩乃さん」

彩乃の数メートル近くまで歩み寄っててていた美桜が、顔を赤く染めている少女の名を呼んだ。
その声には気のせいか、僅かな敬意がこもっているように思えた。
「うん？　何だい」
彩乃はいつも通りの、少し年寄りくさい軽い口調で返事をする。
その右手には、まだしっかりと刀の柄が握られている。
美桜は切れ長の瞳で静かに彩乃を見つめ、口を開く。
「私は、貴女の行動力と力量、そして何より――主様を守るその心の強さに、感動いたしました。同時に、主様をお命を守ってくださったころに感謝いたします。そこで、私からの提案なのですが――守り主と、秘宝の守り手の指名を、貴女に譲りたいと思うのです」
美桜の言葉に、彩乃、海棠、ユーフェミアが一様に息をのんだ。
蓬だけは、すべてを見透かしたようなその瞳で薄く笑っただけだった。
美桜が見つめる中、彩乃は、
「えっと、それは……え？　だって、いいのかい？　あたしゃあんたとの勝負に負けたんだよ」
「えぇ。そうです。しかし、先ほどの戦いをこの目でしっかりと見、貴女ならば守り手になることができるのでは、と思いました」
「えっと……え？　でも……。そりゃ、嬉しいし、守り手になりたいけど……」
彩乃の戸惑いながらも肯定するような言葉に、美桜は双眸を細める。
「では、貴女には守り手となる意志はあるのですね」
「――あぁ。意志は、ちゃんとあるよ」
「――それは、守り手になるということが、どんなに厳しいことか重々承知の上での言葉ですか」
「もちろん」
彩乃は力強く頷く。その右手は僅かに汗ばみ、刀の柄が湿り気を帯びる。

「では――。今日(こんにち)、この場で、私は貴女に守り手の役目を譲り与えます。守り手たるもの、その身と命にかけて、守り主と秘宝を守りなさい」
彩乃は、鼻から大きく息を吸い込んだ。春の甘い香りが彩乃の鼻孔をくすぐり、肺の中をその香りに満たす。何処か遠くで、うぐいすがその軽やかな鳴き声を上げた。
「あぁ。あたしは、この命をかけて、ゆうちゃんを、ユーフェミアを、守って見せるよ」
彩乃の落ち着いた、しかし強い響きを含む声。その声に、美桜が小さく顔を歪める。まるで、彩乃のことを心配するかのように。
顔を歪めたままの美桜は、唇を重たげに持ち上げ言葉をもらす。
「――では、彩乃さん。もう一つ、貴女に伝えなければならないことが、あるのです」
美桜の苦しげに吐き出された言葉に、彩乃は怪訝に顔を傾ける。
「何だい。ゆうちゃんのためなら、あたしゃ何でもしてみせるよ？」

scene 29

桜の薄紅色が、五人と一体を包み込む。皆の髪が様々な動きで、風になびく。

さらりと流れる桜の花弁。ユーフェミアを気にしながらも、少しでも彩乃との距離を縮めるために美桜は前へ歩み出す。美桜と彩乃の間に幾枚もの花弁が流れ、二人の距離が二メートルほどにまで狭まった後、

「――彩乃さん」

美桜は静かに彩乃へ視線を向けた。その視線は決して厳しく鋭いものではなく、優しさに似た柔らかさを浮かべながらも、深い憂いを帯びたものだった。

彩乃は物悲しげな美桜の瞳と沈んだ口調に何か不穏なものを感じ取りながらも、まっすぐに怯むことなくその視線を受け止める。

「――何だい？」

「守り手となる代わり、貴女は大切なものを一つ、犠牲にしなければならないのです」

「犠、牲……？」

彩乃は、訝しげに首をかしげる。心拍数は不安によって僅かに上げられており、その頬は朱を失っている。

美桜は入江家を訪問して来た時とは一変して、強気で冷酷な雰囲気をすっかり失っていた。今その身体に纏っているのは、憂いばかりが色濃く染み出している雰囲気。しかし、その雰囲気を美桜が纏おうとも、不自然でアンバランスだとは思えなかった。むしろ、暗いその雰囲気はぴたりとあっている。それはまるで、美桜が最初に纏っていた強気で冷酷な雰囲気はただの偽物であったかのように。本当に纏うべき雰囲気は、この陰鬱なものであるかのように。

静かに言葉を発する美桜は、ゆっくりと頷く。

「はい。それは――主様、月倉ユーフェミア様との、友人関係です」

彩乃の眉間が、深く皺を刻む。「え……？」という疑問の声が、彩乃の口からふいにこぼれ落ちる。
彩乃の戸惑いをそのままに、美桜は言葉を紡ぎ続ける。
「守り主と守り手は、あくまで主（あるじ）と僕（しもべ）。その二人の間に、友情があってはなりません。友情、愛情……。そういった類の感情は、咄嗟の冷静な判断力に一瞬の迷いを生み出す可能性があります。迷いは、最大の敵です。どんなに些細な迷いであろうとも、それは変わりません。――守り手は、守り主を友人としてではなく主として接さねばならないのです」
「――ってことは、つまり……あたしとゆうちゃんは……友達で、居ちゃいけないって、ことなのかい……？」
彩乃の声は掠れ、意気消沈したかのように力がなかった。彩乃の瞳を見つめる美桜は、目の前に立つ少女の瞳から明るい光が少しずつ失われていくことを知りながら、残酷にも小さく頷く。
美桜の返答に、彩乃の瞳は悲しみに沈む。明るく宿っていた光の代わりに、悲しげな悲哀に満ちた暗く重い色が瞳を満たし、しかし決意を秘めたような鋭い光だけは失われずに灯り続けていた。
「――そうかい」
以外にも落ち着いた声音で、彩乃は静かに答える。その視線は下へと、地面へと落とされる。
切っ先が僅かに地面に刺さっている、右手でしっかりと握っている刀を、彩乃はそっと地面から抜いた。血に濡れた白刃は、太陽の光を浴びて美しく怪しく閃く。彩乃は黙って顔を俯けたまま、すぐ隣に立つ白胡へと横向きにして握った刀を差し出した。碧眼を持つアンドロイドは、彩乃を心配げに見つめながらも刀を受け取り、彩乃の体温がまだ残る柄を血の通わない冷たい手の平で握る。
「――ユーフェミア様の一番近くに居た者として、ユーフェミア様、海棠さん、彩乃さんの三人の友情を断ち切らなければ、ユーフェミア様が守り主になった時、三人ともが不幸になるということは分かっていたことでした。だから冷たい態度を装い、三人の友情を否定

するようなことをしたというのに……。やはり、彩乃さんは、守り手になるべきではないのかもしれません――」
美桜の口から語られる真実に、彩乃はしっかりと首を振った。
「いいや――。あたしは――」
中途半端に言葉を切る彩乃。その視線はやはり地面へと注がれたまま、上がりはしない。
「……」
海棠が心配げに見つめる中、彩乃はゆっくりと前へ踏み出した。その足取りは確かなもので、躊躇いは微塵も感じられない。ただしっかりと、前へ――ユーフェミアの方へと踏み出される。
美桜の隣を俯いたまま彩乃は通り過ぎ、その身体はユーフェミアへと近付いていく。
桜と風を纏いながら、彩乃は桜の木のそばに立ちつくしているユーフェミアの一メートル手前まで歩み寄った。彩乃はそのまま顔も上げずにゆっくりと前方へ身体を傾け、そして――静かに膝を折ると、ユーフェミアへと跪き、深々と頭を下げた。
「……我が命をかけて、私は貴女をお守りいたします。――主様」
「……」
ユーフェミアは絶望したかのように顔を歪める。
しばらく沈黙を続けていたが、やがて重たげに口を開き「はい――」と掠れた声で、短く小さな返事をした。
何の喧騒もない、虚しいほど広い田畑と山だけが広がる静かな田舎。舗装もされていない道や畦道が伸び、畑のそばに藁ぶき屋根の家々がぽつぽつと建つ。
春風と薄紅桜の花弁に包まれている景色の中、沈黙の人々が一件の家の前で立ちつくしていた。
その重苦しい沈黙を破るようにして、一匹の雲雀（ひばり）が甲高い鳴き声を上げながら、遥かな蒼穹へと向けて高く高く飛び上がった。

＊　＊　＊

その後、ユーフェミアと服を着替えた彩乃は秘宝を守っているという屋敷へと旅立ち、美桜さんは中心都市へと帰り、某（それがし）は砂漠の薔薇を求めて旅立った。

これが本当にハッピーエンドだったのかは、誰にも分からない。彩乃にとって、ユーフェミアを守れることは幸せなことであろうが、その願いを叶えるために彩乃はユーフェミアとの友情という大きな代償を払うこととなった。

ユーフェミアを守るはずであった美桜さんはその任務を失い、今は何処で何をしているのか某には分からない。

他人の気持ちは、結局他人には分からないものだ。某には彩乃の気持ちも、ユーフェミアの気持ちも、美桜さんの気持ちも分かりはしない。逆に、某の気持ちは誰にも分からないことだ。

しかし――一つだけ、分かることがある。それは――

某は、彩乃のために旅立ったことを少しも後悔していない、ということだ。

scene 30

＊　＊　＊

「北にオアシスがある砂漠の街……。やはり、ここで間違いないようだな」
人気が全くない、崩壊した砂上の街。家はすべて破壊されており、残っているのは石の壁の残骸のみ。元壁の下部分だけが砂に突き刺さり、たくさんの家の壁が奇妙なストーンヘンジを作り上げている。
海棠は僅かに残った家々の壁から、崩壊する前の美しかったであろう街の面影を見出だしながら、密やかなため息をついた。
「……本当に、徹底的に破壊してくれたな」
乾いた砂と、その上に散らばる石壁の残骸を踏みしめながら歩む海棠は、悲愴に暮れるように顔を歪める。
「これでは、砂漠の薔薇の手がかりさえつかめないではないか。――確かな情報筋から、ここに砂漠の薔薇が祀られていると大金を払ってまで聞きだしたというのに。……確か、街の中心の大聖堂に祀られていると言っていたな」
街の中心へと足の先を向ける海棠は、まるで自分の言葉に呆れるようにして大きなため息を漏らした。
「街の外れがこの有り様だ。中心部にある大聖堂など、もっとひどいことになっているに決まっているではないか。砂漠の薔薇も祀られたいたのだし……」
海棠は双眸を細め、歩みを止めずに周りに広がる瓦礫の街を眺めた。見晴らしは大変良いが、景観としては大変悪い。荒涼とした砂漠の風景は、胸の中の虚しさをただ掻き立てるだけで、他の何も与えてはくれない。

海棠は本日三度目のため息を漏らしつつ、歩を進める。その時、
「？」
地を踏みしめる足の先に、何かを蹴ったような感触が伝わってきた。どうやら石ではないらしく、それは硬くはなかった。訝しく思った海棠は視線を下げ、まじまじと足先を見つめる。見た感じ、それは縦に長い石壁の残骸に見えた。が、それは木の枝のように細く、丸く立体的で、何より先端が五つに枝分かれしている。
最初、それが何であるのか分からずに眉をひそめていた海棠だったが、
「――あ」
唐突に、それの正体を悟った。それは、殆ど砂に埋もれて干からびた、人間の腕だった。
海棠は、地面に埋もれる腕を見つめ――自分が今踏んでいる砂の下に埋まっているであろう人間の死体を思い――憂いているとも思える表情で、痩せ過ぎているかのように骨ばった腕を見つめる。
「……この人たちは、一体どんなことを思いながら、死んでいったのだろうな……」
海棠は沈鬱そうに口を開くと、誰に問いかけるでもなく囁く。漆黒の瞳は陰り、まるで大切な仲間を死から助け出せなかったかのように、海棠は申し訳なさそうな暗い顔で頭を下げる。
「すまないな。某がもう少し早くここへ辿りついていたならば、砂漠の薔薇の略奪を阻止できていたかもしれないのだが……。いや。それは傲慢（ごうまん）すぎる考えに過ぎぬな。某一人では、結局――どうしようもなかったか……。某自身も砂漠の薔薇を求めているのだから、結局この街に歓迎はされなかっただろう」
海棠は首を振りつつ視線を上げ、しっかりと前を向く。瞳はすでに憂いに沈んではいない。そんな海棠を、まだ低い場所に位置する太陽が静かに見返していた。
街の中心。そこに立つのは、一つの大聖堂。もともとこの街の人

々は神への信仰が厚く、他者のための願いを叶えるという神聖なる砂漠の薔薇を深く尊び、大切に守っていた。
もとはと言えば砂漠の薔薇は数万年も昔、今でも謎が多い一人の魔術師が石膏や重晶石でできる本物の砂漠のバラを模して、とある砂漠の街で創ったものだ。その魔術師は今でも生きているなどと言う噂もあるが、それが本当かどうかは誰にも分からない。
そして、砂漠の薔薇を創った砂漠の街というのがどうやらこの街らしく、しかし世間では砂漠の薔薇を生み出した街はすでに崩壊したという噂が流れているため、その事実を知る者はほぼいない。そのため、この街に砂漠の薔薇があるということを知っている人もごく僅かだ。
――そう、海棠は信頼している情報屋に聞いた。大金を払って。
「――くそっ。イライラするな。せっかく情報を聞いたというのに。……今度こそ、彩乃の病を治せると思ったのに……」
海棠は俯きながらやり場のない怒りを砂にぶつけ、ブーツの先で乾いた砂を蹴る。砂はあっさりと舞い上がり、風によって流される。
俯いたままの海棠は本日何度目かのため息を落とした。ため息は地面に吸い込まれるようにして落ち、海棠の瞳も陰る。
「――次の街に行った方がいいのだろうか……。砂漠は危険だからな。早めに次の街へ旅立とう」
海棠は半ば諦め気味に言葉を漏らし、そして、
その身体が、ふいに大きな暗い影に覆われた。

scene 31

いや、覆われたのではない。海棠が、砂の上に落ちる大きな黒い影の中へと入ったのだ。

「え――？」

海棠は意味が分からず、視線を上げる。視線は砂を黒く染める濃い影をしっかりと見、影を落とす建物を捉え、そして――

その瞳が大きく瞠られ、薄く開いた口が驚愕に息をのんだ。

あったのだ。街の中心に。

――砂漠の薔薇を祀っていたといわれる、大聖堂が。それも、破壊されていない綺麗な形で。

「嘘だ……。何故……。幻では、ないよな……？」

海棠は信じられないという風に口をポカンと開き、大きく開かれた双眸で大聖堂をしっかりと見つめる。

街は壊滅状態だというのに、大聖堂だけはまるで別世界のもののように綺麗なまま、静かにそびえる。唯一破損しているのは、入口の両開きになっている木戸のみ。そこだけは、見事なまでにバラバラにされていた。扉のなくなった大聖堂の入り口から見える赤い絨毯が敷かれた中の床に、木端微塵になった木屑が四方へ散らばっている。

「扉を壊したのは侵入を円滑にするためだとして……何故、大聖堂を壊さない？　このように、街を壊しておいて……」

海棠は後方に広がる街を振り返り、そこに広がるあまりに寂しく残酷な光景に双眸を細めた。僅かに残る壁の残骸を良く見ると黒くすすけた部分がある。そこから、街はおそらく炎上か爆発によって崩壊したのだと分かる。どちらにしても、火が関係していることは明らかだ。

燃え盛る炎。人々を飲み込み、残虐にもその身体を焼いていく。大半の者は煙によって中毒死しただろう。炎に焼かれたためのショ

ック死、または肉がただれるほど焼かれて死に至ったか。そのどちらかによる死亡原因もあるかもしれない。何にしても、苦しみながら死んだことに変わりはない。

炎。悲鳴。腐臭。熱風。

人々の泣き叫ぶ声が耳に届き、腐臭が風とともに鼻孔を刺激したような気がし、海棠は荒涼とした街並みから視線をそらした。その瞳が捉えるのは、黒くすすけることなく建っている白壁の大聖堂。

「本当に、分からない……。砂漠の薔薇を狙い、この街を破壊した者は一体何を考えていたんだ？」

海棠は眉をひそめながら、歩を進める。向かうは大聖堂の中。そこにはすでに砂漠の薔薇はないだろうが、少しでも砂漠の薔薇の手がかりが見つかるかもしれない。そんな淡い希望を捨てきれず、海棠は大聖堂へと足を踏み入れた。刹那、

「ぐっ――！」

その鼻が、肉が腐ったようなひどい腐臭に襲われる。海棠は反射的に右手を伸ばし、首に巻いている砂よけのための布で鼻を覆った。その顔は先ほどよりさらにしかめられ、吐き気が喉元まで込み上げる。

臭いにばかり気を取られていたために海棠は腐臭の原因が理解できずにいたが、やがて漆黒の瞳であるものを捉えた。それは――

あまりに残酷な死を辿った、人間の死体。

赤い絨毯に赤黒く染みを作り上げる血の量は半端ではなく、中心に伸びる絨毯の敷かれた通路を挟んで綺麗に並べられた木の長椅子や、白い石でできた壁にも血は飛び散っている。

壁の高い位置に取りつけられているステンドグラスから色鮮やかな斜光が降り注ぎ、大聖堂内の残酷な光景を照らし出す。あまりに美しい虹色の光と、不気味な赤黒い染みは大変アンバランスに見える。

血を生み出す死体は、長椅子に隠れているものもあれば、絨毯の上に転がっているものもある。それぞれがまちまちの格好で、同じ

息をしないものとして横たわる。死体はすべて、刃物のようなもので切り裂かれたような跡があり、身体はほぼ原形をとどめていなかった。人間、というよりは血によって赤く染められた布を纏う肉の塊、と言われた方が頷ける。

中心の赤い道を行った突き当りの壁には大きな十字架が掲げられており、その十字架が交差した中心の部分は不自然な穴が開いていた。

「――なるほど。ここに、砂漠の薔薇が埋め込まれていたわけだな」

少しだけこの残酷な風景から立ち直った海棠は、ブーツをはいた足で乾いた音を響かせながら通路を歩む。足音は反響し、静寂に満ちていた大聖堂に音が蘇り始める。

海棠の足はやがて、その身長よりはるかに大きな十字架の前で止まった。十字架は木でできているらしく、僅かに朽ちていた。丁寧に白く塗られているが、その塗装も所々がはげている。何より、中心で地味ながらも神々しさを放っていたであろう砂漠の薔薇が欠けている。十字架の中心にあるのは、虚しい穴のみ。

海棠は未だに布で鼻を覆ったまま、左手の人さし指でそっと十字架の穴をなぞった。指にざらりとした堅い木の感触が伝わる。

海棠は指を空洞に添えたまま、瞑想をするように瞼をそっと下ろした。しばらく瞳を閉ざしていたかと思えば、すぐに漆黒の瞳を露わにする。その瞳には、僅かばかりの希望が宿っていた。

「――よし。まだ魔力が僅かに残っている。砂漠の薔薇を盗んだ犯人も、そう遠くへ行っていないはずだ」

海棠は口元をほころばせながら、しかしすぐにその笑みを消し去った。顔に浮かんでいた喜色は一瞬で消え、表情が曇天の空のように暗くなる。

「だが――犯人に追いついたところで、どうやって奪い取る？　街を一つ破壊できるほどの相手に、某は勝てるのか……？」

自問し、すぐに首を振る。

「無理だろうな。力尽く奪うことは不可能だな。だが、このように

残酷な者がまともに話を聞くとも考え難い。……一体、どうしたら良いのか」
憂いに沈む海棠の声。ひっそりと独り言を並べていたそれは、ふいに途切れる。
突然訪れた静寂。海棠は指を十字架に空いた穴から離し、身体を反転させ後方を振り向く。足を動かした際に生まれた乾いた音だけが、沈黙の中に余韻を残す。
「……なぁ。おぬしは、どう思う」
ふいに問いを口にした海棠の視線の先。そこには、海棠側から見て右の列に並んでいる木の長椅子がある。海棠はその中の一つを一心に見すえているようだ。
沈黙。重く、息苦しいと感じるほどの静けさに満ちた空気があたりを包む。
「……なぁ。そこに隠れている子供。何か答えてはどうだ？　この中に足を踏み入れた時点で、おぬしの気配には気付いている。姿を現せ。別に某はおぬしを取って食ったりはしない」
海棠の問いは、沈黙によって抹殺された。
呆れたようなため息。眉をひそめている海棠は、仕方ないという風に首を振ると長椅子の中の一つへと足を一歩前へ出した。軽い足音が大聖堂の中に反響し、
「動くな！」
それかき消すようにして、叫び声に近い声が響き渡った。

scene 32

虚しくも鋭く反響する幼い子供の声。血に染まった大聖堂の中に、高音の声が満ちる。それはやがて、吸い込まれるようにして消えた。

声を発した者は、唐突に長椅子の影から飛び出してきた一人の子供だった。小豆色の短髪を覆うようにターバンを巻き、褐色の肌と鳶(とび)色の瞳を持ち、白い布を纏うような形のいかにも砂漠の住民といった服装をしている。

子供らしい高い声をしたその子供は――

両手で、一丁の銃を握っていた。

銀色のバレルと木製のストックでできた、子供が持つには大きい銃を砂漠の民の子供は重たそうに両手で持ち上げるようにして持っている。銃口の狙いは、手が不安定に揺れるため上手く定まっていない。

「言っとくけどな、兄ちゃん。オレを、甘く見んじゃねぇぞ！　銃だって、初めて撃つわけじゃ、ないんだからな！　オレは男なんだから、銃だって、撃ったことくらいあるんだ！」

子供は、銃を持つ両手と身体を支える二本の足をあからさまに揺らす。銃口は海棠を捉えたり捉えなかったりしているというのに、すでにその右手の人差し指は引き金へとかけられていた。

初心者丸出しの子供は、しかし視線を海棠から外そうとはせず、子供にしては厳めしい表情ででガンを飛ばす。

「……少年。悪い冗談はやめろ。銃は初心者が持つものではない」

「うるせぇ！　オレは、初心者なんかじゃ、ない！」

子供は叫び声を上げ、その小さな身体に力がこもる。刹那、子供も気づかぬ間に自然と力が入っていた指が引き金を引き、銃口が火を吹く。

空気を揺るがすような銃声が大聖堂の中に放たれ、子供の叫び声をかき消した。短いはずの銃声が、長く長く尾を引く。その音に重

なるようにして、激しい破壊音があたりを包み込む。
完璧な静寂がなかなか訪れない大聖堂の中、
「……っと、危ないなぁ」
緊張感が僅かに欠けているような、蓬の声の響きに似た海棠の声が上がる。声は穏やかさを含んではいたものの、その顔は真剣そのものだった。目は恐怖と焦燥に似た感情をうつしており、顔はこわばっている。その表情を消さぬまま、銃口に狙われていた無傷の青年は肩越しに後ろを振り返る。
子供が放った弾丸は的である海棠から大きく反れ、大聖堂の白壁に新たに傷を生みだしていた。弾丸は硬い石の壁をいとも容易く破壊し、煙を巻き上げる貫通した穴をあけていた。煙の向こうで、壁の穴越しに砂漠の砂が垣間見える。
海棠は表情をいくらか和らげると、感嘆の口笛を小さく鳴らした。
「凄まじい破壊力だな。ということは……」
海棠は顔を反転させて正面に向き直り、やはりな、と呟く。
「っ……」
海棠の視線の先には、目を丸くしたまま銃を持った子供が赤い絨毯の上に尻もちをついていた。銃口からは、火薬のにおいを巻き上げる白い硝煙が立ち上っている。
「反動も、大きいだろうな。しかも先ほどの発砲は予期せぬこととときた。ま、狙いが定まらないうちから引き金に指をかけていたのだから、仕方のないことか」
海棠は淡々と言葉を紡ぎ、信じられないという風に己の手の中にある銃をまじまじと見つめる子供へ一歩近寄る。
「少年。大丈夫か？」
ポカンと口を開けていた子供は、はっと口を引き締める。
「うっ、うるさい！　お前なんかに、心配なんてされたくないんだよッ。手前(てめえ)なんか、死んじまえばいいんだッ。糞ったれ！」
罵詈雑言の数々を並びたてる子供に、海棠は呆れたような眼差しを向ける。

「ひどい言い草だな。人を突然撃っておいて、その言い方はなんだ？　某は何もしていないだろう？」
「とぼけるな！」
子供は銃を手にしたまま、素早く立ち上がる。立ち上がった瞬間に足をふらりと揺らしたが、しっかりと床の上に立っている。子供は重いであろうに右手だけで銃を握ると、それを闇雲（やみくも）に振り回しながら海棠に訴え始めた。
「お前が、街をメチャクチャにしたんだろッ！　オレは見たんだからな！　お前は魔術師で、魔術の力を使って、街を壊したんだろッ！」
銃を振り回しているのではなく、銃に振り回されているようにさえ見える子供に、海棠は真剣な眼差しを向ける。
「――少年。早とちりをするな。某が魔術師だということは認めるが、某は街を壊してなどいない」
「五月蠅い！　五月蠅い！　黙れッ！　オレは見たんだ！　若い男がこの街を大きな爆発で壊して、砂漠の薔薇を奪ったのを！」
子供の必死な発言に、海棠は双眸を見開く。
「少年！　おぬしは、砂漠の薔薇の盗み主を見たんだな？」
「五月蠅い！　それがお前なんだろッ！」
「違う。某は、街の破壊や爆発などといったことに魔術を使ったりはしない！」
海棠は焦るように言葉を素早く発する。
明らかに苛立ちを見せ始めた子供は唸るように叫び、銃をしっかりと両手で握りなおした。
「ふざけンなぁ――！」
銃口が、海棠を捉える。黒々とした目のような銃口に射竦められた海棠は、両目を見開いたまま息をのむ。
言葉になっていない叫びを上げながら、子供の指が意図的に引き金を引く。海棠を捉えている銃口は唸りを上げ、硝煙とともに弾丸を撃ちだす。金の空薬莢が不気味に閃きながらはじけ飛び、銃を握

る子供の腕が反動によって大きく上へと跳ね上がる。小さな身体はそのまま後ろへと倒れそうになりつつも、数歩たたらを踏んだだけで尻もちをつきはしなかった。
「――っ痛(つう)」
海棠は顔を歪め、焼けるような痛みに裂かれた右頬を、反射的に右手で抑える。頬を抑える右手の指に、どろりとした生温かい感触を感じる。頬に触れされていた右手をすぐに離し、目の前へと移動させる。
「やはり、か。少し頬を掠めていったな」
頬を抑えていた右手は、真っ赤な鮮血で汚れていた。
銃を持った子供は、真紅に染まった海棠の頬と右手を見ると息が詰まったかのように呼吸を中断した。戸惑いに瞠られた鳶色の瞳を見る限り、不気味なほど鮮やかな真紅の血に怖気づいているらしい。
「全く。後で手当てをしなければならないな」
海棠は右手を口元まで持ってくると、そこに付いた血を真っ赤な舌で舐めた。口の中に、錆び臭い鉄の味が広がる。
銃口を下へと向け、おろおろと視線を彷徨わせている子供を見すえると、海棠は厳しい眼光で子供を睨みつけた。
「少年。おぬしは、こんなことがしたいのか？」
瞳とは裏腹に、声は以外にも落ち着いている。海棠の唐突な問いに顔を上げた子供は、一瞬で海棠の眼光に射られ言葉を失った。

scene 33

鋭利な刃物のような瞳で睨み据える海棠の瞳に、砂漠の民である子供は畏怖の念を抱き顔をこわばらせる。

「おぬしは、人を傷つけるようなことがしたいのか？　子供。質問に答えよ」

海棠は瞳の冷酷さを和らげぬまま、感情の淡々(あわあわ)しい冷たい声音で言い捨てる。その右頬に真紅の血が流れ、縦に一筋のラインを流れるように引いた。

子供は瞳に焼きついて離れない鮮血の紅蓮に一瞬息をのみ、魅入られているかのように視線をそらさずそれを見つめる。しかし、その視線は決して海棠のそれとぶつかることはない。

海棠は鮮血を食い入るようにして見つめる子供から、その手に持っている銃へと視線を下げた。

「少年。銃とは生き物を傷つけ、大切な命を奪う代物だ。そのように危ないものを、おぬしのような子供が持つな」

海棠の諭すような声音に、子供の手の平に力がこもる。

「だって……。だって……！　復讐してやりたいんだ！　オレの住んでた街を、こんなっ、メチャクチャにしやがって……！」

子供は俯き、ぼろぼろと瞳から涙をこぼし始めた。涙腺から溢れる透明な雫は子供の頬を止めどなく流れ、それを止めようと手が白くなるほど握りしめた左手の拳で懸命に涙をぬぐう姿は、その子供の幼さを改めて感じさせるものだった。

瞳から次から次へと落ち続ける涙は砂をはじきながらその上に落ち、淡い黄土色の土を濃く染めていく。

海棠は必死に涙を抑えながら肩を震わせてしゃくり上げる子供のそばへ寄り、膝を折って視線の高さを同じにした。

「少年。その悲しみは、大変理解できる。大切な者を失うことは、自分の身体の一部を失ってしまうかのように、悲しく辛く苦しい。

だが、復讐をしようと考えてはいけない。――某が、この街を壊した者ではないということは、分かってくれたか？」
呼吸さえも苦しげな子供はこくりと小さく頷き、泣き声ながらに訴える。
「それっ、は、分かって、る……。けどっ、何っ、で、だよっ……。だって、家族、もっ、友だ、ちも、家、もっ、街っ、も、全部、壊されたっ、ん、だぞっ……」
「あぁ。しかし、この街を壊した者を殺せば、その破壊者を大切に思っている人から、おぬしが恨まれ、殺されてしまうかもしれない」
海棠は射るような鋭い視線を和らげ、子供に優しく語りかける。その話の内容はけして優しいものでも、平和的なものではないのだが。
子供は徐々に収まってきた涙をぬぐい去り、力が抜けたかのように拳をすとんと下へ下ろした。
「でも……」
「復讐は復讐を呼ぶ。復讐は、連鎖するものなんだ。ここでおぬしが殺しを行えば、次々に復讐の輪が広がるのだぞ」
「けど、オレを大切に思ってくれている人は、もう、いない……。だから、オレが殺されたって、復讐は広がったりしない」
真っ赤になった目を真っすぐに海棠の瞳へと向け、子供は同じ高さにある漆黒の目を真剣に見つめる。真っすぐな、決意を秘めたような鳶色の瞳に、海棠はふっと柔らかな笑みを向けた。その笑みは、見た者もつられて微笑んでしまいたくなるほど、温かで抱擁感のある笑みだった。
笑顔を崩さぬまま、海棠は言葉を紡ぐ。
「そうだなぁ……。もしおぬしが殺されてしまえば、次は某がおぬしのために復讐として殺人ををするかもしれないな」
海棠の優しい笑みの中からこぼれた言葉に、子供は目を見開く。
「そんなっ……。別に、いい！　オレのために復讐なんて、するなよっ」

「ほら」
海棠は子供の鼻先に、弾き出すようにして人さし指を突きつけた。子供は先ほどよりやや目を開き、僅かに顔を引く。
驚いている子供の反応を楽しむかのように、海棠は笑いながら言葉を続ける。
「おぬしがそう思うように、この街の人たちもおぬしが復讐をすることなど、望んでいないのではないか？」
「えっ……。あ――」
海棠は、最初の厳しい視線からは想像がつかないほど明るい眼差しで子供へ向けて微笑み、言葉に詰まっている子供の頭に巻かれた、少し黄ばんだターバンへポンッと手を置いた。
「わっ！」
子供は小さく悲鳴を上げ、海棠の手を捉えるようにして自分の頭へと左手を伸ばす。海棠は小さく笑い声を上げながら手を離し、服についた土埃をはらいつつ立ち上がった。
「まだ言っていなかったな。某は、海棠という名だ」
「は？」
唐突な自己紹介に、子供は疑問符を頭上に浮かべる。
「某の名だ。おぬしは、なんという名だ？」

scene 34

子供は名を問われているのだと気がつき、疑問符をかき消す。
「あ、……えっと、ヤナ」
子供は何故か恥ずかしげに口ごもりながら、僅かに俯く。海棠は口元に薄く笑みを浮かべながら、長い髪を揺らして頷く。
「ヤナ、君だな」
「……あぁ。あんたは、えっと、？カイドー？だよな？」
問うような視線で見つめてくるヤナに、海棠は口元に浮かべていた笑みを苦笑へと一変させた。
「……うーん。少し発音が違うが、名前は合っている」
海棠は「まぁ、いいか」と独り言ち、「とりあえず外に出よう」とヤナに提案する。
ヤナは黙したまま首だけを動かして頷き、それを確認した海棠は外へと歩を進める。
血生臭い大聖堂の中に伸びる赤い絨毯の道をぬけ、海棠とヤナは熱と粒子を孕んだ乾いた風にあおられる。海棠の長い髪は滑るようにして風の中で泳ぎ、ターバンの隙間から出ているヤナの短い髪は小刻みな動きで激しくなびく。
砂交じりの新鮮な空気を短い呼吸である程度吸い込んだ海棠は、早朝より鮮やかに色付いてきた青空を見上げ眩しさに双眸を細めた。漆黒の瞳は、中点へと向かって行く太陽を静かに見つめる。太陽は重圧を与えるかのように、じりじりと砂漠に立つ者をその熱で焦がす。
「そろそろ気温が危ないな……」
海棠は視線を下げながら背へと手を伸ばし、上着に付いているフードを掴むとそれを目深にかぶった。天で輝く太陽から地上へと下げられた視線は、瓦礫と砂しかない街をぼんやりと見つめるヤナへと向けられる。

「ヤナ君」
「……えっ？　あ、な、何だ？」
ヤナははっと我に返り、自分より背の高い海棠を瞬時に見上げる。海棠の視線は、ヤナの瞳よりやや下へと向けてられている。その瞳が捉えているのは、ヤナの手に握られているままの銃だった。
「それは子供が持つには物騒だからな。某が持っておく」
「え？　でっ、でも……」
ヤナは眉をひそめて海棠を見つめる。右手で握る銃の引き金には、相変わらず人さし指がかかっていた。
「おぬしは初心者だろう？」
「ちっ、違う！」
「では、何故引き金に指がかかっているんだ？」
「え？」
ヤナは意味が分からないという風に小首を傾げ、腕を視線の高さまで持ち上げ右手人差し指をかけている銃の引き金を見る。海棠は笑いを堪えるように顔を歪め、ヤナの持つ銃を指さした。
「引き金は、的に狙いを定めるまで指をかけてはだめなんだ。銃を扱ったことのない某でも、それくらいの事は分かる。本当はおぬし、初心者なのだろう？」
海棠は馬鹿にするような笑みではなく、柔らかく労わるように微笑んでヤナを見る。その小さな身体にそぐわぬ銃を持つ子供は、虚をつかれたかのような表情で海棠を見上げる。
「知らなかったのか？」
海棠の問いに、ヤナは恥ずかしげに瞼を伏せながら殆ど分からないほど小さく頷いた。
「……そうか。あ。くどいようだが、某はこの街を壊してはいないからな」
「それは、分かった。よく考えたら、街を壊したヤツはカイドーより髪が短かったしな」
ヤナは俯いたまま小声で告げる。

海棠はヤナの言葉に僅かに双眸を見開いて驚きを見せ、
「……そうか。うん。分かってくれたのならば、良かった」
微笑みを消さぬまま頷いた。
「あぁ。じゃ、じゃあ、ほらよ。でも、ちゃんと返してくれよ」
「分かってるさ」
顔を上げたヤナは、渋々といった表情で海棠へと銃を差し出す。その右手の人差し指は引き金にはかけらておらず、銃身に沿うようにして真っすぐに伸ばされていた。海棠はそれを確認した後、爆発物を取り扱うかのようにそっと銃を受け取った。
「では。預かっておくからな」
海棠は指を真っすぐにしたまま、腰に巻かれたベルトの背中側へとそれをさした。
「……なぁ、カイドー」
銃を収めた手を視線で追っていたヤナは、遠慮がちに海棠へと問いかける。
「うん？　何だ」
「……カイドーも、この街に砂漠の薔薇を探しに来たのか？」
「あ、あぁ。まぁ、な」
海棠の遠慮がちな返答に、ヤナは小さく俯き顔をしかめた。
「じゃあ、カイドーもこの街を壊したヤツと、同じなのか？」
「あ。いや、某は力技で砂漠の薔薇を奪うつもりはなかった。某は、大変な病にかかっている妹の病を治すために、砂漠の薔薇を求めていたんだ。――きっと、砂漠の薔薇を盗んだ者も、誰か大切な人のためにこうしたんだろう」
ヤナはさらに顔を大きく歪め、睨みつけるように鋭い眼差しを漆黒の瞳へとぶつけた。
「この街をメチャクチャにしたヤツを、カイドーはかばうのか？」
「違う。たくさんの命を奪った破壊者を許すことはない。しかし砂漠の薔薇は、自分ではない誰か他の人のために使わなければならない。だから、盗んだ者にも大切な人がいて――」

「盗んだんじゃない！　強奪していったんだ！　みんなを殺して、街を壊して！　それに、砂漠の薔薇には――っ」
激情に任せ、罵るようなぞんざいな口調で言葉を吐き出していたヤナは、口にしてはいけないことを言ってしまったかのようにふいに口をつぐんだ。
他人の言葉を途中で遮っておいて、途中で発言を止めてしまったヤナに対して海棠は眉をひそめ、
「砂漠の薔薇には、何だ？」
言葉の続きを促した。
「――何でも、ねぇよ」
ヤナは低い声音でぶっきらぼうに呟き、海棠の瞳から逃れるようにして黄土色のサラリと乾いた砂の上に視線を落とす。
海棠は疑うように双眸を細め、静かな声音で問う。
「おぬし。砂漠の薔薇の何を知っている？」
「……。何にも、知らねぇよ」
「――口を割らぬ気か。……ま。言いたくないのならば、無理な詮索はしないとしよう」
「あぁ。そうした方がいいぜ、カイドーさん。……この世には、知らない方がいい真実もあるってもんだ」
ヤナは視線を下げたまま、ため息のような小さな吐息をついた。

scene 35

燃え盛る太陽が、刺し貫くような熱を発する。地へと降り注ぐ日光は、容赦なく人々の身体を焼く。

砂と瓦礫に埋もれる崩壊した砂漠の街。そこに立つ二つの人影は、双方とも黙している。空気はからりと乾いているというのに、何故かその場の空気はじっとりと重みを持っているように感じられた。それは絡みつく汗のせいであるかもしれないが、二人の表情からこの場が緊迫していると感じ取ることができる。

「――ときに、ヤナ君」

二人のうちの一人――フードを目深にかぶり、口元から鼻にかけてを布で覆っている青年、海棠が重苦しい沈黙をあっさりと切り裂いた。

「何だよ」

「某と、旅をしないか？」

先ほどのぴんと張り詰めた糸の様な空気からは想像もできないほど、あっけらかんとした海棠の声に、

「……はっ？」

驚きと戸惑いを入り混じらせた顔で、ヤナは素早く地面から顔を上げていた。海棠の穏やかな光をたたえた黒い瞳と、ヤナの困惑に歪められた鳶色の瞳がぶつかる。

「あぁ。共に旅をするといっても、この砂漠を越えた先にある街までだ。ここにいてもおぬしには、その、住むところがないだろう？」

「まぁ……。そう、だけど」

ヤナは再び視線を砂の上に落とす。鳶色の瞳が、淡く陰りを帯びた様に見えた。

海棠は鋭くヤナの微妙な感情の変化に気がつき、空元気な声で言葉を発する。

「ならば、次の街でおぬしの引き取り手を見つける。まぁ、引き取

り手といっても、孤児院になるんだが……。某は、おぬしを引き取る孤児院を探す手伝いをする。どうだ？　この提案は」
「どうだって言われても……。その……、ここではもう暮せねぇし、ありがたい申し出だけどよ……。その、カイドーと旅をするんだよな？」
　迷っているようなヤナの言葉に、海棠は小さく首を傾けた。その漆黒の瞳は、何故か面白そうに笑っていた。
「何だ？　何か不満か？」
「え……っと……。あぁ！　もういい！　カイドー。次の街までオレ様の護衛をさせてやる。感謝しろ」
　ヤナは頬を薄紅に染めながら、良く言えば威勢よく、悪く言えば偉そうに海棠へ右手の人差し指を突き付けた。
　ヤナの上から目線な態度に半ば呆れながらも、海棠は確信するように頷く。
「では某が、しっかりと次の街まで送り届けよう。確か、商業が盛んな豊かな街だったな」
「あぁ。砂漠の商人がよく訪れる街だ」
「そうか。――それからもう一つ。旅を共にする代わりに、砂漠の薔薇を奪った者の情報を教えてもらいたい」
　先ほどまで浮かべていた笑みをかき消し、真剣な表情で海棠はヤナへと話を持ちかける。海棠の問いに、ヤナは一瞬眉をよせた。
「え？　それは、でも、オレは何もそいつのことなんて知らないぜ？」
「しかしおぬしは、先ほど某と犯人の容姿が違うと言っていたな」
「まぁ、な」
「ということは、おぬしは犯人の容姿をある程度はしっているということだな？」
「まぁ、な」
「それならば、犯人の容姿だけでも教えてもらいたいんだ」
　今や海棠の顔には、神妙な表情しか浮かんでいない。

「……それが分かったら、カイドーはどうするんだ？」
「某は、砂漠の薔薇を求めている。おぬしから犯人の容姿を教えてもらい、もしその容姿と合致する者がいたら、某は何としてでもその者から砂漠の薔薇を貰う」
「どうやって？」
「……できるならば、話し合いで解決したいが、無理ならば――力づくで奪うつもりだ」
海棠の瞳が、陰りとも殺意ともつかぬ不気味な闇に覆われる。
低い海棠の声音にヤナは戦慄を感じ、背と頬に冷や汗を流した。
「――ま、カイドーの役に立つならそれでいい。でも、カイドー――死ぬなよ」
「おぬしに心配されるほど、某は弱くないと信じている」
「過信は怪我のもとだって、親父から教わったことがある」
「そうか。忠告をありがとう」
海棠はふっと瞳の闇を和らげ、ヤナに微笑みかける。ヤナは僅かに目を見開いた後、視線をそらすようにしてふいっとそっぽを向いた。
「さっ、さっさと出発するぞ。早くしねぇと昼間になっちまう」
「あぁ。……ヤナ君。本当に、これて良いのだな」
唐突に神妙な声を上げた海棠に、ヤナはきょとんと視線を返す。
「良いのかって……何が？」
訝しげに問うヤナに対し、海棠は気落ちするようにして肩を落とした。
「ここを離れ、次の街へ移り住むことが、だ。少しも迷いはないのかと、某は言いたいんだ」
ヤナはあぁと手を打ち、あっさりと言う。
「ンなことかよ」
「ンなことって、おぬし」
「オレはもう、ここに未練なんざねーよ。確かに今まで住んできた街を離れるのは辛いし、自分だけ生き残ったって事実は、なかなか

受け止められるようなもンじゃねぇよ。けどさ……せっかく、生き延びたんだ。オレだけでも生きてかなきゃ、死んじまったみんなに叱られちまうよ。だから――生きるためにオレはここを離れる」
小さな子供のものとは思えない、ゆるぎない決意と悲壮をたたえた立派な瞳。煌めく鳶色の瞳に真っすぐ見つめられている海棠は、ふいににっと笑いヤナの髪をターバンごと乱暴とも思える手つきでかき回した。
「ぎゃっ！　何すんだよッ！」
「ははっ。小さき愉快な子よ。その決意、某は気に入ったぞ。おぬしは――某の妹の瞳に、とても似ている」
ヤナは少々不機嫌そうに、しかしほんの少し喜色を灯してクスリと笑い短い小豆色の髪の上からターバンを巻きなおした。
海棠は微笑んだまま、ふいに瞼を下ろすと布越しに時間をかけて大きく息を吸った。乾いた熱い空気が、海棠の肺を満たす。微かな音をせわしなく立てながらフードは風に揺れ、痛いほどの日差しが砂漠に降り注ぐ。
しばらく瞳を閉じたまま、海棠は荒涼とした街へ黙祷（もくとう）をささげる。ヤナは僅かに頭を下げている海棠を見習って、自分も同じように瞼を閉じた。
沈黙の時が緩やかに流れる。風と砂の流れる音に満たされている、崩壊した街。太陽はくっきりと濃い影を、砂の上に作り上げていた。
その時、ふいにすべての音が止んだ。先ほどまで流れていた風さえも沈黙する。
――それはまるで、街が風が砂がすべてのものがこの惨事を憂い、瓦礫の街へ黙祷を捧げているかのようだった。

scene 36

静かな砂漠に、風が再び流れ始める。音が戻り、砂が流れる乾いた音や布が揺れる微かな音が蘇る。

「……さて。行くか、ヤナ君」

「――あぁ。行こう、カイドー」

瞼を上げた海棠は、自分の胸部ほどまでしか身長がない小さなヤナを見、瞳を開いたヤナは小さく微笑んで視線をそらすように俯いた。その小さく細い肩が、ふいに震える。小刻みに身体を揺らすか弱いヤナの姿を、海棠は僅かに目を見開いて憂いを帯びた表情で見つめる。

静かな時間が流れる中、震えるヤナの頬から小さな水の玉が転がり落ちた。雫は太陽の光を反射して煌めきながら落ち、乾いた砂にほんの少しの水分を与えた。

僅かに色濃くなった砂へ視線を落とした後、俯いたままのヤナを見て海棠はふっと笑う。

「何だ？　泣いているのか？　水分は取っておけよ」

おどけた口調でヤナをからかうように海棠は言葉を発する。水が大変貴重になるこの砂の地で、水分を無駄にするようなことはできない。

海棠に茶化されたヤナは、むっとして顔を上げる。その顔は、僅かに赤い。

「うっ、うるせぇ！　砂が目に入っただけだッ」

「ふぅん。そうか」

海棠はにたにたと笑い、ヤナはむすっとしたまま不機嫌そうに海棠を見上げる。

「まぁ、おぬしがそう言うのであればいい。――では。そろそろ出発するぞ。ちゃんとついてくるんだぞ。某は、方向感覚だけはいいんだ」

自信満々に明朗とした声音で発言した海棠を胡散臭げに見つめながらも、ヤナは小さく口元だけで笑う。
「ンじゃオレは、方向感覚に自身があるというカイドーさんに、道は任せるとしよう」
ヤナは海棠へと向けている顔に、晴れ晴れとした笑みを浮かべた。その顔にはもう、涙は欠片も存在していなかった。
ヤナの笑顔を認めた海棠は小さくしかし強く頷き、陽炎を揺らめかせながら漠然と広がる砂漠を歩み始めた。砂につく大きな海棠の足跡を辿りながら、ヤナは海棠の後ろを歩み始める。
「――なぁ、カイドー。さっき?砂漠の薔薇には――?って言いかけてた言葉の続きだけどな」
ヤナは前方を行く海棠には聞こえない囁くような小声で、ぽつりともらす。
「実は――砂漠の薔薇には、自分の欲のために使える方法があるんだぜ。カイドー。お前は、それを知ってたか?」
「うん? 何か言ったか?」
ヤナの低く小さな声を僅かに聞き取った海棠は、肩越しに振り返って怪訝そうに問う。
「――いいや。何でもねぇよ。ただの独り言だ」
ヤナは首を振りながら誤魔化し、駆け足で海棠の隣に並んだ。
水分を微塵も感じさせない砂漠。瓦礫があちらこちらに点在するそこに、大きめのものと小さめのものの二組の足が、並んでへこみをつけていた。へこみは風に流される砂によってかき消され、やがて完全に見えなくなる。

scene 37

＊　＊　＊

夜闇に浮かぶ美しい蜜色の月は、完全な円形よりやや欠けている。歪んだ円形の様な形をした月は金色（こんじき）の煌々と光る部分と、クレーターを形成している影の部分とがはっきりと分かれていた。空に光を放ちながら浮かぶ月は、満月のときほどではないにせよそれに近いほど明るい月光を、闇に覆われてた砂上へと落としている。月の光は、瓦礫と化した砂漠の街をくっきりと浮かび上がらせる。

「フフフッ。ずいぶん派手に壊してくれたじゃない？」

「そうですね。まぁ、いかにも彼女らしいですが。大聖堂を壊していないというのもまた、彼女らしいですね」

「すでに壊された街に関心や興味など不必要だ。とにかく、今はあいつの手がかりを探すんだ、ファイヴ、ナイン」

「……おなか、すいた」

荒れ果てた街の残骸の中。そこに、四つの影があった。四つの影は全員、薄汚れた白いローブをフードをかぶって纏い、砂よけの布を口元に巻きつけている。

「はい、はい。もうー、いっつもマジメさんなんだからー。セヴンはー」

「ファイヴ。その語尾を伸ばす口調は止めろ。ベタベタして気持ち悪い。ついでに、無駄に多い言葉数も減らせ」

ファイブ、と呼ばれた二十代前半に見える女性は、毛先が緩く巻かれた長い栗毛を揺らしながら、セヴンと呼んだ男性を振り返る。その拍子に、首からかけている色とりどりの宝石で飾られたペンダントがファイヴの豊かな胸の上で躍り、月に反射して矢のような鋭

い光を放った。
ファイヴは妖艶なほど真っ赤な口を尖らせ、視線の先に立つセヴンを睨む。
「個性を尊重することは、とっても大事なのよー？　分かんないのー？」
「そのセリフをお前が言っても、自己中心的な考えを持った奴が自分のいいように、もっともらしい言葉を並べ立てているようにしか聞こえないのは、オレだけか？」
肩に軽くかかるほどの、男性にしては長い銀髪と切れ長の目を持つ、長身で痩躯（そうく）な体つきをした二十代半ばほどのセヴンは、ため息交じりに言葉をこぼす。
「奇遇ですね。実は私も、自己中心的な考えを持った人が自分のいいように、もっともらしい言葉を並べ立てているようにしか聞こえなかったんです」
「ひっどいじゃなぁい、二人ともー。セヴンはともかく、ナインまであたしの敵ー？」
ナインと呼ばれた、黒い長髪と静かな眼差しをした十代後半ほどに見える少女は、その目にかけている黒縁眼鏡の位置を右手で小さく上下させて直し、丁寧な口調を崩さないまま淡々と言葉を紡ぎ始める。
「確かに個性は大切です。しかし、あなたの場合は都合のいいように言葉を使っているだけではありませんか。それでは言葉が可哀そうです」
「えー。ひどーい！　あ！　ねぇー。シックスはどう思ってるのー？」
艶めく栗毛を揺らしながら、ファイヴはシックスと呼んだまだ幼い少女を振り向く。シックスは柔らかな白髪のショートボブをした、十歳になっているかなっていないかというほどの幼い女の子だった。
シックスへと期待を込めるファイヴに、セヴンは冷ややかな視線を浴びせる。

「シックスが、まともな意見を言うわけないだろう」
「五月蠅いわねー！」
ばっさりとセヴンに言われてしまい、ムキになるようにファイヴは口調を荒げ反抗した。
「あなたが五月蠅いんですよ。もう夜半じゃないですか」
ナインは呆れたような小声で呟き、星がちりばめられた漆黒の空を見上げる。
「……」「……」
ファイヴ、セヴンが黙したまま見つめる中、白髪の少女は、
「……おなか、すいた」
しゅんと顔を曇らせて、両手で自分のお腹を包み込んだ。
ファイヴの問いに対して的外れな答えを返したシックスを見つめ、ファイヴはがくりと肩を落とし、セヴンはふんと鼻を鳴らす。
「お遊びはここまでだ。そろそろ仕事に戻るぞ」
セヴンのその一言で、個性云々の話は打ち切りとなった。
それまで天を仰いでいたナインがふいに視線を下ろし、虚ろな眼差しでぼんやりと虚空を見つめるシックスを見る。
「――シックス。彼女の匂いは残っていますか？」
ナインの問いかけに、シックスは首をふらりと持ち上げ、くんくんと小さな鼻をひくつかせた。

scene 38

やや上の方を向き、鼻を上下させていたシックスはふいに視線を下げた。虚ろな表情のままで、シックスは操り人形のような不自然な動きで、ことんと首を傾ける。フードの下に隠れる白髪が、さらりと揺れる。

「いっぱい、する。ちの、におい」

「……じゃなくてー。それは死んだこの街の住人たちのにおいじゃなーい。ナインが言ったのは、彼女のにおいのことよー？」

ファイヴの呆れた声音にシックスは再度顔をもたげ、鼻を動かす。さほど高くない小さな鼻を小刻みに動かすシックスの姿を、ファイヴとセヴンとナインは静かに見守る。

しばしの静寂の後、シックスの鼻の動きがふいに止まる。

「する、するよ。かのじょの、へんなにおい。におい、あと、ふたつ、にんげんの、する。まじゅつしと、ただのにんげんの、こどものにおい」

思いがけないシックスの答えに、ファイヴ、セヴン、ナインは驚きに顔を見合わせる。

眉をひそめたセヴンは、物思いにふけるようにして顎に手を当てる。

「魔術師と子供……？　まさか、この街の生き残りか？」

セヴンの小声に、ファイヴは顔をしかめる。

「えぇー？　こんなにメチャクチャなんだよー？　生き残りなんているわけないじゃなーい」

ファイヴの言葉に、シックスを見つめていたナインが視線を上げる。

「しかし、可能性がないと言い切ることはできませんね」

セヴンは顎に手を当てたまま、ふと思いつきを言葉にする。

「魔術師と子供の旅人が通ったという可能性もあるな」

「魔術師と子供が同じ行動をしているとは限りませんよ。無関係の二人だという可能性もゼロではありません」
セヴンの言葉に、ナインが訂正を加える。
「でもさー、シックスがにおいを嗅ぎ取れてるってことは、ここに長居をしてたってことなんじゃなーい？　ってことは、まさかこの街の住人ー？」
「はたまた、つい最近までここに居たか、ですね。しかしこの辺りに人影はありませんし、気配も感じられません」
「ということは、やはり街の生き残りか？」
セヴンの言った結論に対し、ファイヴは口を尖らせ小さく首をかしげる。
「あたしはアリエナイと思うけど、それが妥当な考えなのかしらー？」
「もしくは、私たちのように砂漠の薔薇を求めてこの街へ来た旅人、ということも考えられますね」
ナインの言葉を最後に、再び沈黙が流れ始める。
その沈黙を破るようにして、ふいにシックスが何かのメロディーを紡ぎ始るめる。
「おーなかいっぱいのみたーいなー。まっかなちーをーのみたーいなー。にーんげんーはどこにいーるのかなー」
でたらめな歌を、シックスはリズムにのせて小さく身体を揺らしながら、可愛い声で上手に歌う。
静かな地に静かなシックスの歌だけが流れる。
シックスの歌に交じって、ため息交じりのセヴンの声が上がる。
「……そうなると、かなり厄介な話だな。我々の目的は、彼女の殺害と砂漠の薔薇の略奪。これ以上の仕事は増やしたくないんだがな」
「げー。ライバル出現ー？　面倒くさいなー。ライバルの抹殺も仕事のうち？」
げんなりと肩を落とすファイヴ。その肩に乗っていた栗毛が、身体の動きとともにこぼれる。

ファイヴの言葉に対し、ナインは眼鏡の位置を直しつつ小さく頷く。
「そうなりますね。魔術師と言っていましたので、砂漠の薔薇の魔力を感じ取ってここまで来たのでしょうか？　もしかすると、砂漠の薔薇は今その魔術師が持っているということもあり得ますね。街の様子から見て砂漠の薔薇を奪ったのは彼女だとして、彼女からさらに魔術師が砂漠の薔薇を奪ったのであれば可能性は否定しきれません」
ナインの淡々とした説明に、ファイヴとセヴンの顔が曇る。
「もしその魔術師がライバルであれば、少しでも早く始末しなければならないな」
「そうねー。魔術となると、かなり厄介ねー」
「大丈夫です。こちらには、空腹のシックスがついているのですから」
「わかいーちーとーやわらかーいおにくーがおいしーよー。こどものほうがーいーいーなー。おしょくじへーいこーうー。アハハハッ」
高らかな笑い声で歌をしめたシックス。暗い夜空へと大きく開けられた口からは、月の光に反射してきらりと不気味に光る鋭い牙が覗いていた。
ファイヴ、シックス、セヴン、ナインは全員同色の鮮血を思わせる真紅の瞳を、明るく輝く月へ向けて微笑んだ。
蜜色に煌めく月は己が照らす地上でこれから巻き起こる、世界の破滅と人々の苦悩の物語をまだ、知らない――。

ｓｃｅｎｅ　３８（後書き）

ａｃｔ　２終了！

ここで声のイメージを♪

ファイヴ…高垣彩陽さん（独特な声って好きです☆　狩沢さん的な声のイメージです）

シックス…日高里菜さん（可愛い声の代名詞と呼べるお方ですね！　ちょっとシックスのキャラはアレだけど…）

セヴン…浪川大輔さん（素敵ヴォイス♪　初めて聞いたときに「あ、なんかいい！」と思いました☆）

ナイン…小林沙苗さん（メチャ好きです！　あの静かで涼やか～な声が　波江さぁぁぁぁん！！）

あとがき

砂漠の薔薇ａｃｔ　２を最後まで読んでいたき、誠にありがとうございます。
この度は投稿の仕方の大改造をし、読者様には大変な迷惑をおかけしました。
本当に勝手で申し訳ありません。
すべては計画性のない私の責任です；

また、ａｃｔ　３を読んでくださる方へ。
ａｃｔ　３は「砂漠の薔薇　？」として投稿しております。
読んでくださる方はこちらへどうぞ→ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７１３１ｐ／

いつも私などの拙作を読んでくださって、本当にありがとうございます！
最近は更新も間々ならない私ですが、これからも砂漠の薔薇を読んでくださる方がいるのであれば、それはとても喜ばしいことです。
下書きの方は少しずつ進んでおりますので、できる限り早く更新していきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6488p/

act 2　夜半の月、砂上の旅

2011年11月13日00時31分発行